

Title	芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実態と特徴に関する研究:大連工業大学の事例研究
Author(s)	周, 首能
Citation	
Issue Date	2026-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	ETD
URL	https://hdl.handle.net/10119/20576
Rights	
Description	Supervisor: 由井 蘭 隆也, 先端科学技術研究科, 博士

博士論文

芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実態と特徴に関する研究—大連工業大学の事例研究

ZHOU SHOUNENG

主指導教員 由井蘭隆也
北陸先端科学技術大学院大学
先端科学技術専攻
(知識科学)

令和8年3月

Abstract

This study conducts a comparative analysis of the current state and characteristics of transnational higher education in the field of art and design, using Chinese universities as a case study. Transnational higher education plays a significant role in the rapidly progressing internationalization of global education. In view of its importance and the societal demand for internationally competent talent, transnational higher education programs have been implemented across numerous domains within higher education. The objective of this research is to elucidate the effects of transnational higher education specifically within art and design, taking Chinese universities as an example.

To achieve this research objective, two subsidiary aims were established. The first is to compare transnational higher education with local education in the host country, focusing on the Fashion Design major, and to examine their differences. To this end, this study employed qualitative research methods, conducting interviews with current students, faculty, and administrative staff. A comparative analysis of the two educational systems was performed to investigate how their disparities manifest concretely in the educational setting. The findings indicate that due to distinctions in educational philosophy and institutional frameworks between transnational and host-country higher education, the characteristics of cultivated students differ significantly, even within the same major on the same campus. Furthermore, based on authentic feedback from students and administrative faculty, this study also highlights that even in fields originating from Europe and America, such as fashion design, neglecting local social conditions and educational systems can hinder the full attainment of expected outcomes.

The second subsidiary aim is to explore the issue of creativity within transnational higher education programs in art and design. To address this, interviews were conducted with students majoring in Media Design and Fashion Design. Utilizing qualitative research methods, the study analyzed the relationship between transnational higher education and student creativity. The results show that transnational higher education in the field of art and design brings overseas educational methods to the educational settings of the host countries where it is introduced, and thus may exert a positive impact on students' creative attitudes.

Based on the aforementioned findings, the ideal form of transnational higher education targeting art and design should possess the following characteristics: It should emphasize the cultivation of students' conceptual and ideational abilities, making it suitable for nurturing designer-oriented talent. In particular, it can aid students in understanding cultural diversity and enhancing their creative awareness and attitude. However, compared to local education, it often offers relatively fewer technical courses, which may lead to deficiencies in students' technical skills. Therefore, within art and design transnational higher education, it is crucial not only to expand students' creative thinking but also to ensure they acquire solid technical competencies. Moreover, students enrolled in transnational higher education programs

have greater access to international information compared to their peers in local education. Leveraging this advantage, they can grasp the latest global trends, holding the potential to cultivate talent capable of engaging with the global community. Furthermore, this investigation also revealed that within transnational higher education, even for art and design fields of Western origin, disregarding local social conditions and educational systems prevents the achievement of desired outcomes. Consequently, when formulating transnational higher education programs for art and design, it is imperative to fully consider local actualities and adopt flexible strategies. Particularly, maintaining collaboration with local educational institutions and securing necessary support when participating in activities such as competitions are essential. Finally, the paper concludes by discussing future research topics.

Keywords: Transnational Higher Education; International Education; Comparative Study; Art and Design; Creativity; Globalization

目次

第一章 序論.....	1
1.1 研究の背景.....	2
1.2 研究の目的.....	3
1.3 研究の意義.....	4
1.4 論文の構成.....	5
第2章 トランスナショナル高等教育と先行研究.....	7
2.1 はじめに.....	8
2.2 トランスナショナル高等教育を.....	8
2.3 先行研究.....	21
2.4 まとめ.....	23
第3章 ファッションデザイン学科を対象としたトランスナショナル高等教育 の比較研究.....	25
3.1 研究概要.....	26
3.2 研究デザイン.....	26
3.3 研究対象の紹介.....	32
3.4 データ分析.....	33
3.5 結論.....	46
第4章 芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の創造性..	48
4.1 研究概要.....	49
4.2 研究デザイン.....	50
4.3 データ分析.....	55
4.4 結論.....	68
第5章 結論と今後の課題.....	69
5.1 本論文のまとめ.....	70
5.2 知識科学への貢献.....	72
5.3 今後の課題.....	73
謝辞.....	74
参考文献.....	75
付録.....	81

図目次

図 2-1 トランスナショナル高等教育の研究動向.....	21
図 4-1 カテゴリ統合の導入流れ.....	56

表目次

表 2-1: International Program and Provider Mobility (IPPM) の枠組.....	11
表 2-2: 2025 年中国のトランスナショナル高等教育プログラム統計表	22
表 3-1: インタビューリスト①.....	29
表 3-2 : 学生への質問表.....	30
表 3-3 : 教職員への質問表.....	31
表 3-4 : SOF と SIC の必修科目比較表.....	33
表 3-5 : 表 3-5: SIC と SOF の比較表.....	45
表 4-1 : インタビューリスト②.....	53
表 4-2 : 学生への質問表.....	54
表 4-3 : 生成されたカテゴリー・下位概念の定義と具体例.....	66

第一章

序論

1.1 研究の背景

グローバル化の発展に伴い、トランスナショナル教育（TNE: Trans National Education）は教育資源の国際移動における重要な手段となっている（Altbach & Knight 2007）。高等教育におけるトランスナショナル教育は、トランスナショナル高等教育（TNHE: Trans National Higher Education）と呼ばれている。Knight はこのような教育資源の移動をクロスボーダー教育と名づけ、「法的な国境もしくは地域境を越えて、人々、知識、プログラム、プロバイダー、政策、思考、カリキュラム、プロジェクト、研究、そしてサービスが移動すること」と定義している（Knight, 2005）。

トランスナショナル高等教育のプログラムはいくつかの形式に分類される。例えば、学生が自国にいながら外国の大学キャンパスで学び、その大学から学位を取得できるプログラムがある。または、学生が自国大学と外国の大学の連携によって運営されているプログラムで学び、その学位を取得できるプログラムがある。さらに、学生が自国と外国との協力によって設立された外国式の教育をおこなう自国の大学で学び、その学位を取得するプログラムがある。これらの分類からでもわかるように、トランスナショナル高等教育は国際教育の一貫として、時代の変遷とともに変化しており、その過程で様々な学習形式を生み出している（Knight, 2017）。

高等教育の国際化の中、海外留学をはじめとする人の国際移動への注目度が高いが、現在ではトランスナショナル高等教育が重要な側面のひとつである（Levantino, 2016）。その理由として、産業のグローバル化が進む中、企業は国を越えたビジネス展開を行っており、多文化に理解し、国際的なコミュニケーション能力を持った人材を求めている。このため、学生たちは自国の教育だけでなく、海外の知識や文化を学び、国際的な視野を持つことが求められている。しかし、発展途上国の学生にとって、留学のコストが依然として高価であるため、トランスナショナル高等教育は、そのような学生のニーズに応えるための有効な手段として位置付けられている。

しかし、トランスナショナル高等教育のプログラムが普及している一方、その実態が十分に解明されていないのが現状である。多くの研究はトランスナショナル高等教育の概念や展開形式に焦点を当てているが、実際にこれらのプログラムが学生や教育機関に与える影響、そして、その質や効果については十分に検証されていない。その問題意識の一つとして、トランスナショナル高等教育による提供国の教育がトランスナショナル高等教育による受け入れ国の教育よりも優れているかどうかである。本研究の事例国である中国は、トランスナショナル高等教育がその国内において非常に高く評価されており、国の教育政策の一環として全面的にトランスナショナル高等教育を押し出そうとしている（Han, 2021; Mok & Han, 2017）。しかし、実際これらのトランスナショナル高等教育のプログラムとローカル高等教育の学部学科を比較し、その本質的な相違点がどこに存在するかについて取り組んだ研究は少ない。更に、トランスナショナル高等教育の研究において、その教育実態に関する情報を入手しにくい現状を指摘する研究者もいる（Knight & McNamara, 2017）。

そのため、教育現場に焦点を当て、トランスナショナル高等教育における実際の展開や学生の学習体験に関する直接的な情報を収集する必要がある。これ

により、実際の運用における問題点や改善点を明らかにすることができる。特に芸術のような特定の分野におけるトランスナショナル高等教育の実践は、国の文化的特性に応じて多様性がある。従って、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育は、それを導入する国のローカル高等教育の間で、一定の差異が存在することが考えられる。しかし、現在の研究ではこれらの差異に注目した分析が不足している。さらに、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の創造性についても、未だに多くの不明な点が残されている。創造性は芸術教育の核心的な要素であり、高等教育が主体である学生の創造性や活動でどのような影響を与えているかの実態を理解することは、芸術教育に新たな視点を提供できるのを期待したい。

芸術デザインという分野では、文化的影響や価値観が制作活動に直接影響を与えるため、教育現場における相互理解が質的向上につながる。技術の進展によって教育の形式が変化する中でも、人間中心のアプローチを維持し、学びの文脈を尊重することが芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の持続可能性を左右する鍵となる。トランスナショナル高等教育プログラムを実施する際、関係者同士の連携が妨げられることがあり、特に言語の壁や評価基準の相違が連携を困難にしている。今後、トランスナショナル高等教育を実施するための世界共通基準を設置することが不可欠だと考えられる。本研究は、そういう基準の設置に貢献できることを期待する。

トランスナショナル高等教育は今国際教育の重要な柱として、グローバルな人材育成と知識の越境的流通を支えている。しかし、その教育効果の実態がまだ明らかになっておらず、学習成果の測定における透明性と公平性が求められている。トランスナショナル高等教育で育成された学生がはたして国際社会で真に通用する能力を身につけているかは、依然として疑問が残る。トランスナショナル高等教育の効果性について、より深く探求することは、依然として重要な研究課題の一つとなっている。

1.2 研究の目的

トランスナショナル高等教育は国際教育に新たな地平をもたらしたが、その実態や効果に関して未だ不明な点が多数存在している現状にある。特に芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育は、その教育効果や創造性啓発などの面で多くの不明な部分が残されている。本研究の目的は、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実態を明らかにし、その効果と特徴を明らかにすることである。そのため、本研究の主な目的（MR0）は、このファッションデザインとメディアデザイン学科に焦点を当て、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実態と特徴を明らかにすることである。主な目的（MR0）を達成するために、二つの副目的（SR0）が設定された。まず、トランスナショナル高等教育は、教育の提供国と受入国の文化・教育慣習の相互作用によって成り立つが、その芸術デザイン分野の教育における手法は、しばしば一方的な価値観の輸出に偏りがちである。トランスナショナル高等教育の受け入れ国にとって、それを提供する国の教育が自国の教育に何からの利点をもたらすと考えるからこそ、それを導入する。本研究のSR01はファッションデザイン学科を対象とし、トランスナショナル高等教育と従来のロー

カル高等教育における学習成果の差異を比較分析する。これにより、トランスナショナル高等教育が持つ特徴と課題を明らかにし、芸術デザイン教育に新しい視点を提供することができる。次に、芸術デザイン教育にとって、創造性が学習成果の核心であり、トランスナショナル高等教育は二つの国の文化の影響下で学びを行うため、創造性の育成に独特な特徴を秘めている可能性が考えられる。しかし、現状ではトランスナショナル高等教育が創造性の育成にどのような影響を与えているかは十分に探求されていない。本研究のSR02は、ファッションデザインとメディアデザイン学科を対象に、トランスナショナル高等教育が学生の創造性育成に与える影響を分析することである。SR01とSR02を達成することでMROが達成される。

1.3 研究の意義

1.3.1 学術的意義

従来のトランスナショナル高等教育研究は、主に概念や展開形式に集中しており、特定分野のプログラムに焦点を当て、現場にいる人間の声を拾い、その実態を調査しているものは少ない。Dai (2018)は、自分の自身の経験を元に、トランスナショナル高等教育プログラムに所属する学生の学習体験を分析した。Dai、Matthews、Renshaw(2020)の研究では、文化を跨るという角度から、中国人学生が二つの国の教育システムで教育を受ける経験を紹介した。OuとGu (2021)の研究では、言語社会化と文化間コミュニケーションにおけるアイデンティティの角度から、トランスナショナル高等教育プログラムに所属する学生の学習経験を紹介した。今までの研究では、トランスナショナル高等教育全体の角度から分析するものであり、特定の分野、特に芸術デザイン分野のトランスナショナル高等教育の実態や効果、特に創造性育成への影響に関する研究は不足している。本研究により、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の具体的な実施状況や学生の学習体験に関する詳細な情報を収集し、その特徴と課題を明らかにすることが可能である。

また、本研究はトランスナショナル高等教育と従来のローカル高等教育の学習成果の差異を比較分析することで、トランスナショナル高等教育の独自の特徴を明らかにする。これにより、芸術デザイン分野のトランスナショナル高等教育に新たな研究視点を提供することができる。

更に、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育が学生の創造性育成に与える影響を分析することで、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の状況と課題を明らかにし、トランスナショナル高等教育の実践に役立つ知見を提供することができる。これは、トランスナショナル高等教育の質的向上や教育手法の改善に貢献すると期待される。

本研究は、トランスナショナル高等教育の世界共通基準の設置に向けた一歩となり、国際教育の発展に寄与することを期待する。特定分野のトランスナショナル高等教育に関する研究成果を蓄積することで、トランスナショナル高等教育の全体像をより明晰にし、教育の連携を促進することができる。

1.3.2 実務的意義

大学では、学生が主に自国の伝統的な教育を受けており(Barak, 2017)、トラ

ンスナショナル高等教育の導入国がトランスナショナル高等教育プログラムを通じて、その状況に変化をもたらすことができる。特に芸術などの分野では、伝統的な教育では、学生が接触する文化やデザインスタイルが比較的狭い範囲に限定されることが多い。トランスナショナル高等教育の導入により、学生は異なる国の文化や芸術的表現形式に触れる機会が増え、これが学生の創造性や国際的な視野を拡大する一助となる。本研究は、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実態や影響を明らかにすることで、受け入れ国の高等教育機関に具体的な改善策を検討することができる。例えば、トランスナショナル高等教育と従来のローカル高等教育の学習成果の差異を比較分析することで、ローカル高等教育が不足している部分を特定し、それに応じたカリキュラムの改良や教育方法の改善を行うことができる。

また、教育者たちは、創造性、イノベーション思考など、より高度な認識プロセスを重視するよう、教育を改革すべきだと提案してきている(Griffin, McGaw, & Care, 2012)。芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育が学生の創造性育成に及ぼす状況を分析することで、受け入れ国の高等教育機関は創造性を育む教育環境の構築に向けたアイデアを得ることができる。これにより、自国の芸術デザイン教育においても創造性を重視した教育方法を導入し、学生たちの創造力を引き出すことが可能となる。

更に、本研究の成果は、トランスナショナル高等教育の提供国にも有益な情報を提供する。提供国は、自国の教育プログラムが受け入れ国にどのような影響を与えているかを把握することができ、それに基づいて教育プログラムの改善を行うことができる。これにより、トランスナショナル高等教育の質を向上させ、双方の国の高等教育の発展に寄与することができる。

また、本研究は、芸術デザイン業界にも貢献をすることが期待される。芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育によって育成された学生たちは、多文化を理解し、国際的なコミュニケーション能力と創造性を持った人材として、芸術デザイン業界において活躍することができる。芸術デザイン業界は、このような人材を確保することで、国際的な市場における競争力を高めることができる。

本研究は、トランスナショナル高等教育の受け入れ国と提供国の双方の高等教育機関や芸術デザイン業界にとって、具体的な改善策や有益な情報を提供することができ、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の質的向上や人材育成に貢献することが期待される。

1.4 本論文構成

本論文は以下の5章により構成されている。

第1章である本章では、研究背景として、トランスナショナル高等教育が国際教育における役割と重要視された理由を述べた上で、研究目的を立て、本研究の学術的意義と実務的意義を解説した。

第2章では今世界で実施されているトランスナショナル高等教育の概念と種類、そして、本研究の実例の提供国である中国のトランスナショナル高等教育の状況を紹介し、そこから、今世界で実施されているトランスナショナル高等教育に関する先行研究をまとめた。

第3章では、ケーススタディとして、ファッションデザイン学科を対象に、トランスナショナル高等教育とローカル教育を比較する。

第4章では、ケーススタディとして、ファッションデザインとメディアデザイン学科を対象に、芸術デザイン分野のトランスナショナル高等教育が学生の創造性に与える影響を考察する。

第5章では、本研究の結論を述べた上で、知識科学への貢献を説明する。そして、本研究の成果の限界と将来の研究への方向性として今後の課題を示す。

第 2 章

トランスナショナル高等教育と先行研究

2.1 はじめに

本章では、トランスナショナル高等教育（以下、TNHE[Trans National Higher Education]と表記）の概念、発展、形式、そして、中国 TNHE の実施状況などについて説明する。それから、研究背景となる先行研究について説明し、トランスナショナル高等教育研究の流れ、重要な研究者、国別協力、近年の新しい動向についてまとめる。

2.2 トランスナショナル高等教育

2.2.1 トランスナショナル高等教育とは何か

TNHE プログラムは、いくつかのタイプに分けられる。例えば、学生が自分の国にいながらにして海外の大学キャンパスで学び、その大学から資格を得られるプログラムが存在する。

また、海外の大学と自国の大学が協力して、自国のキャンパスで授業を行い、双方の大学から学位を取得できるタイプもある。さらに、学生が一時的に海外の大学に留学し、その学習成果を自国の大学に持ち帰ることができるプログラムも TNHE の一つである。これらの様々なプログラムタイプは、学生や教育機関のニーズに合わせて選択することができ、トランスナショナル高等教育の多様性を反映している。

トランスナショナル高等教育の目的は、学生に異なる文化や教育システムに触れる機会を提供し、国際的な視野とグローバルな人材としての能力を育成することにある。海外の大学との協力により、学生は自国では得られない教育資源や知識にアクセスすることができ、異なる思考方法やアプローチを学ぶことができる。また、異文化交流の経験を通じて、国際社会で通用するコミュニケーション能力や柔軟性を身につけることができる。

しかし、トランスナショナル高等教育にはいくつかの課題も存在する。まず、言語の壁が大きな障害となることがある。海外の大学で学ぶ場合、授業や教材が英語などの外国語で行われることが多く、言語能力が不十分な学生にとっては学習が困難になることがある。また、文化の違いによる適応問題も存在する。異なる文化や教育システムに慣れるまでに時間がかかり、一部の学生はストレスを感じることもある。

さらに、トランスナショナル高等教育の質の担保も重要な課題である。異なる国の大学との協力において、教育水準や評価基準の差異が生じることがあり、学生が受ける教育の質が一定しない可能性がある。このため、トランスナショナル高等教育の質を保証するための基準や評価システムの整備が必要である。これらの課題を克服するために、トランスナショナル高等教育の関係者は、言語サポートや文化適応支援を提供することが重要である。また、教育機関間での協力や交流を強化し、教育水準や評価基準の調和を図ることが必要である。これにより、トランスナショナル高等教育の利点を最大限に活かし、学生により良い教育環境を提供することができる。

国境を超えた教育活動を指す表現としては、TNHE の他にもクロスボーダー高等教育(Cross-border Higher Education)やオフショア高等教育(Offshore Higher Education)、ボーダレス高等教育(Borderless Higher Education)など

があり、これらは混同される場合がある。TNHE とこれら他の表現との違いを明確にすることが重要である。

クロスボーダー高等教育は、国境を越えた高等教育活動全般を指し、その形態や目的は多様である。例えば、学生が自国から他国へ移動して学ぶ場合や、オンラインを通じて他国の教育機関から学ぶ場合などが含まれる。クロスボーダー高等教育は「国際移動」という動きに学習者、教育機関、または教育プログラムの視点を当てている一方で、TNHE は学習者と教育機関またはプログラムの「所在地の違い」に焦点を置いているという解釈も存在する(花田, 2022)。このような多様な視点が存在することは、Knight (2021) が指摘している通り、高等教育の国際化が時代の変遷とともに進化していく過程を反映しており、その中で生じた学習形態の多様性を示している(Knight, 2021)。

オフショア高等教育は、主に海外の拠点で行われる高等教育活動を指す。これは、ある国の教育機関が他国にキャンパスを設立し、そこで学生に教育を提供する形態が一般的である。この形態では、自国の教育機関が海外の拠点で自国の教育プログラムやカリキュラムを提供することが多い。

ボーダレス高等教育は、国境の概念を超えた高等教育の理想的な形態を表す言葉である。これは、教育資源や情報が国境を越えて自由に流通し、学生が世界中の教育機関から均等に学ぶことができる状態を目指している。質保証やアクレディテーションなど、高等教育に関連する様々な制度は依然として国や地域ごとに異なり、国境の影響はまだ大きい。このため、ボーダレス高等教育は国境を越えるイメージを持たせやすい用語ではあるものの、実際の運用面を正確に反映しているわけではないと指摘されている(Knight, 2005)。

TNHE は、これらの概念といくつかの共通点を持ちながらも独自の特徴を持っている。TNHE は、基本的には海外の大学との協力を通じた高等教育活動を中心に据えている。この協力が形式や目的の多様性を生み出している。TNHE が学生の国際的な視野や能力育成に重点を置いている一方、クロスボーダー高等教育は国境を越えた教育活動の広い概念を捉え、オフショア高等教育は海外拠点での教育提供に焦点を当て、ボーダレス高等教育は国境を超えた教育の理想状態を追求している。これらの違いを理解することで、トランスナショナル高等教育の研究や実践において、的確な位置づけを行い、その特徴や課題を効果的に把握することができる。また、関係者は、これらの概念を明確に区別することで、トランスナショナル高等教育の発展や質の向上に向けた具体的な対策を考えることが可能となる。

2.2.3 トランスナショナル高等教育の発展

高等教育の国際化においては、海外留学を含む人々の国際的な移動が注目を集めやすい一方で、TNHE も重要な要素のひとつとなっている(Levantino, 2016)。既に 1980 年代後半には、オーストラリアなど一部の国が TNHE を輸出型サービス産業の一環として開始していた(McBurnie & Ziguras, 2003)。しかし、それが大幅に拡大したのは、高等教育の国際化が加速した 2000 年代であった。2000 年代以降、世界的な経済のグローバル化や情報技術の急速な発展が、TNHE の拡大を後押しした。インターネットの普及により、オンライン教育が可能になり、国境を越えた教育プログラムの提供が容易になった。これにより、学生は自国

にしながら海外の大学の講義や教材にアクセスできるようになり、TNHE の選択肢が増えた。また、一部の発展途上国の人間にとって、先進国のビザを取得することが困難であるため、TNHE プログラムを積極的に選んでいる (Levatino, 2016)。これも TNHE の発展にとって、追い風となっている。

また、各国政府や教育機関も TNHE の重要性を認識し、積極的に関与するようになった。Bohme. tal (2002) は、2025 年までにオーストラリアにおける国際高等教育に対するニーズの 44% は TNHE プログラムになるという予測をしており、TNHE への期待感が示されている。多くの国では、海外の教育機関との協力を促進する政策や制度が導入され、TNHE の質を担保するための基準や評価システムが整備された。これにより、TNHE の信頼性が向上し、学生や保護者の信頼を得ることができるようになった。

さらに、企業や産業界のニーズも TNHE の拡大に影響を与えている。グローバル化が進む中で、多文化に対応できる国際的な人材が求められるようになり、企業は TNHE を通じて育成された学生を積極的に採用するようになった。これにより、TNHE の需要が増え、教育機関はより質の高い教育プログラムを提供するよう努力している。その一方で、Fielden et al. (2007) によると、オーストラリアでは 2003 年から 2009 年にかけて TNHE プログラムの数が 1569 から 889 に減少しており、拡大一辺倒ではなく競争的環境にあることが窺える。

この競争的環境は、複数の要因によって生じている。まず、TNHE の拡大に伴い、教育機関の数が増え、各機関が限られた学生資源を奪い合う状況になっている。これにより、新興の教育機関や知名度の低い機関は、既存の有名な機関との競争に負け、TNHE プログラムを中止することになる可能性が高い。また、TNHE の質の担保や評価システムの整備が進んでいる一方で、ある程度の水準を下回るプログラムは市場から淘汰されることになる。学生や保護者が TNHE に対する理解が深まり、質の高いプログラムを選択する傾向が強まっており、質の低いプログラムは需要が減少する結果となる。さらに、経済情勢や政治的な要因も TNHE の拡大に影響を与える。例えば、世界的な景気後退や通貨の変動により、学生や家族が TNHE に対する費用負担能力が低下する可能性がある。また、国と国の間の政治的な関係が悪化すると、教育協力や学生の移動に対する制限が強められることがあり、TNHE の拡大に支障をきたすことになる。

このような競争的な環境の中で、TNHE を推進する教育機関は、質の高い教育プログラムの提供と差別化を図ることが重要である。言語サポートや文化適応支援の充実、教育内容の革新や改善、良質な師資の確保など、学生にとっての魅力的な環境を提供することが求められる。また、企業や産業界との連携を強化し、学生の就職支援やキャリア形成をサポートすることで、TNHE の価値を高めることも重要である。

今後、TNHE は、技術革新や国際社会の変化に応じて、さらに進化していくと考えられる。オンライン教育やデジタル技術の活用による教育方法の革新、新たな学習形態や評価方法の導入、国際的な教育ネットワークの構築など、新たな可能性が広がっている。これらの動向を理解し、適切な対策を講じることが、TNHE の発展において重要な課題となる。

Knigh & McNamara (2017) によれば、今世界で実施されている TNHE の主要なプログラムは、フランチャイズプログラム、海外ブランチキャンパス、ダブル

ディグリープログラム、ジョイントディグリープログラム、国際共同大学、国際遠隔教育、国際協働遠隔教育である(表 3-1)。なお、ダブルデグリープログラムおよびジョイントディグリープログラムはパートナーシッププログラムとして総称されていることもある(Knight & McNamara, 2017)。次の節では、このフランチャイズプログラム、海外ブランチキャンパス、ダブル及びジョイントディグリープログラム、国際共同大学について紹介する。国際遠隔教育と国際協働遠隔教育について、本研究との関連性が低いため、ここでは扱わないことにする。

表 3-1 : International Program and Provider Mobility (IPPM) の枠組

高等教育機関が単独で展開する TNHE (Independent TNE provision)	複数の高等教育機関が協働して展開する TNE (Collaborative TNE provision)
フランチャイズプログラム (Franchise Programmes)	パートナーシッププログラム (DarTNHERship Programmes 「ダブル/ジョイントディグリープログラムを含む」)
海外ブランチキャンパス (International Branch Campus)	国際共同大学 (International Joint University)
国際遠隔教育 (Self-study Distance Education)	国際協働遠隔教育 (Distance Education with Local Academic Partner)

出典:Knight と McNamara (2017. p15) 【翻訳:花田(2022)】

2.2.4 トランスナショナル高等教育プログラムの種類 フランチャイズプログラム

フランチャイズプログラム(Franchise Program)は、ある高等教育機関が、自らの教育プログラムやブランドを他の教育機関に提供し、その機関が自国でそのプログラムを実施する形態である。British Council (2012)によると、「A 国の教育機関が B 国の教育機関にコースの一部またはすべてはての提供を許可することで、学生は B 国の教育機関でそのコースを学び、A 国この教育機関から学位や修了証が授与されるプログラム」と定義されている。フランチャイズプログラムは、教育の提供する側と受ける側の大学がいるという意味では、大学間の協力によって成り立っているプログラムではあるが、教育プログラムの設計は提供する側によるところが大きい。提供側の大学は、教育内容や教材、評価基準などを基本的に定め、受ける側の大学はそれらを実践する役割を担う。このような形態から、フランチャイズプログラムにはいくつかの利点がある。提供側の大学にとっては、自らのブランドや教育プログラムを海外に拡大することができ、学生数を増やすことができる。同時に、自大学とは異なる文化圏で教育プログラムを提供することを通じて、教職員が国際的な教育や学問の経験を積むことができる Pon & Ritchie (2014)。また、受ける側の大学にとっては、自らが持っていない高度な教育カリキュラムや国際的な評価基準を導入することができ、学生により質の高い教育を提供することが可能になる。学生

にとっても、自国で外国の有名な大学の教育を受けることができるため、海外留学の費用や生活習慣の違いといった問題を回避しながら、国際的な教育を受けるチャンスを得ることができる(Aminu et al., 2022)。

しかしながら、フランチャイズプログラムにもいくつかの問題が存在する。例えば、提供側の大学が自らの教育プログラムを受ける側の文化や社会的な状況に十分に適応させていない場合、学生は学習に困難を感じる可能性がある。また、受ける側の大学が提供側の要求を十分に満たせず、教育の質が低下する可能性もある。さらに、フランチャイズプログラムの評価や監督体制が十分でないと、学位や修了証の信頼性が低下することにもつながる。このような問題を解決するためには、提供側と受ける側の大学が密接に連携し、教育プログラムを受け手の状況に合わせて調整する必要がある。また、中立的な第三者機関による定期的な評価や監督を導入することで、教育の質を維持することが重要である。これらの対策を講じることで、フランチャイズプログラムがトランスナショナル高等教育においてより有効に機能することが期待できる。いずれにしても、TNHE の多様化が進んでいるなかで、他のプログラムとどのようにして差別化を図っていくかは、今後フランチャイズプログラムにとって重要だと考えられる(花田, 2024)。

海外ブランチャキャンパス

海外ブランチャキャンパス (International Branch Campus: IBC) は、ある高等教育機関が自国以外の国で独立したキャンパスを設立し、自国のキャンパスと同じ教育プログラムや学位を提供する形態である。Garrett et al. (2017) は海外ブランチャキャンパスを「高等教育機関が外国で運営する学位プログラム全体を提供する分校」と定義した。Lane & Kinser (2013) は海外ブランチャキャンパスを、海外ブランチャキャンパスを自前で所有して運営するタイプ、ホスト国政府からキャンパス建設費用の支援を受けているタイプ、ホスト国の現地パートナーと共同して設置するタイプ、海外ブランチャキャンパスに必要な施設を賃借によって調達するタイプ、海外ブランチャキャンパスに必要な施設を賃借によって調達するタイプ、他の教育機関の施設内に間借りの形で海外ブランチャキャンパスを設置するタイプ、という5つのタイプに分類した。

海外ブランチャキャンパスは、学生に自国で海外の大学の教育を受ける機会を提供するだけでなく、教育機関にとっても多くの利点がある。まず、教育提供側の教育機関にとっては、まず収益を確保できるという魅力がある。同時に海外ブランチャキャンパスを通じて自らのブランドを国際的に拡大することができる。海外で自らのキャンパスを設立することで、当該地域の学生や企業、教育関係者に対して自らの存在をアピールすることができ、知名度を向上させることができる。また、海外ブランチャキャンパスを通じて、自国のキャンパスとは異なる文化や社会的な状況で教育を提供することができ、教職員や学生に国際的な視野を持たせることができる。一方、教育導入する国にとって、海外ブランチャキャンパスは、留学による人材の海外流出を防止することができる。学生にとっては、海外ブランチャキャンパスを利用することで、海外に出なくても海外の教育環境やカリキュラムを体験することができる Wilkins & Balakrishnan (2013)。これにより、異なる文化や学問的アプローチに触れることができ、国際的な人材としての素養を身に付けることができる。Garrett

et al. (2017) の調査によると、2017 年時点で海外ブランチキャンパスを設置している大学は、国・地域別で 34 カ国・地域存在し、その上位 5 カ国・地域はアメリカ (81 校)、イギリス (44 校)、フランス (31 校)、ロシア (23 校)、オーストラリア (14 校) で、全体の 73%を占めている。一方、海外ブランチキャンパスの受け入れ国・地域は 77 カ国・地域あり、その上位 5 カ国・地域は中国 (34 校)、アラブ首長国連邦 (UAE) (33 校)、マレーシア (12 校)、カタール (12 校)、シンガポール (11 校) で、全体の 39%を占める。

しかしながら、海外ブランチキャンパスにもいくつかの問題が存在する。まず、海外ブランチキャンパスを設立するためには、多額の資金が必要となる。土地の取得、建物の建設、設備の導入など、様々な費用が発生するため、教育機関にとっては大きな負担となる。また、海外ブランチキャンパスを運営するためには、自国のキャンパスとは異なる文化や社会的な状況に対応する必要がある。言語の違い、法律や規制の違い、教育制度の違いなど、様々な問題に対処する必要があり、運営には高度な能力が要求される Lawton & Katsomitros (2017)。

さらに、海外ブランチキャンパスの教育の質を維持することも重要な課題である。自国のキャンパスと同じ教育プログラムや学位を提供するためには、教職員の質や教育環境の質を維持する必要がある。また、海外ブランチキャンパスの評価や監督体制を整備することも必要であり、学位や修了証の信頼性を確保するためには、中立的な第三者機関による定期的な評価や監督を導入することが重要である。

このような問題を解決するためには、教育機関が十分な準備を行い、海外ブランチキャンパスを設立する前に、当該地域の市場や社会的な状況を十分に調査する必要がある。また、海外ブランチキャンパスを運営するためには、自国のキャンパスとの連携や協力体制を整備することが重要であり、教職員の派遣や研修、教育プログラムの共有など、様々な方法で連携を強化する必要がある。さらに、海外ブランチキャンパスの教育の質を維持するためには、評価や監督体制を整備することが必要であり、中立的な第三者機関による定期的な評価や監督を導入することで、学位や修了証の信頼性を確保することができる。

ダブル&ジョイントディグリープログラム

ダブルディグリープログラム (Double Degree Program: DDP) とは、学生が 2 つの異なる大学で学び、それぞれの大学から学位を取得するプログラムである。通常、学生は一定期間をそれぞれの大学で過ごし、両方の大学のカリキュラムを履修する。このプログラムにより、学生は異なる大学の教育資源や文化を体験し、幅広い知識とスキルを身に付けることができる。Knight & Lee (2022) は「2 つの教育機関が共同で学位プログラムを実施し、卒業要件を達成することで、それぞれの機関から 1 つずつ学位が与えられるプログラム」と定義した。一方、ジョイントディグリープログラム (Joint Degree Program: JDP) は、複数の大学が共同で提供する学位プログラムである。学生はこの共同プログラムを通じて、複数の大学の教員から指導を受け、統合されたカリキュラムを学ぶ。卒業時には、複数の大学が共同で発行する学位を取得する。Knight & Lee (2022) は「1 つの学位プログラムをパートナー校と協力して運営し、その修了条件を満たすことで、連名により 1 つの学位が授与されるプログラム」と

定義した。

ダブルディグリープログラムとジョイントディグリープログラムには、それぞれいくつかの利点がある。ダブルディグリープログラムは、学生が2つの異なる大学の学位を取得することができるため、就職先や進学先の選択肢を広げることができる。また、異なる文化や教育環境で学ぶことで、国際的な視野や柔軟性を身に付けることができる。すなわち、学生は異なる大学のコースや教え方に触れる中で、自己の学習能力や適応力を高めることができる。加えて、2つの学位を手にするすることで、将来の職業における競争力を高めることが期待される。しかし、4年間の学士課程で修得した単位が双方で認定されることから、実質的にダブルカウントであるという指摘もある(Knight, 2017)。このダブルカウントに対する懸念は現在でも払拭されているとはいえない部分もあり、アメリカの一部の大学ではダブルディグリープログラムを禁止しているところもある(花田, 2024)。

一方、ジョイントディグリープログラムは、複数の大学が共同で提供する統合されたカリキュラムを学ぶことができるため、それぞれの大学の強みを組み合わせた総合的な学力を育むことができる。このプログラムでは、異なる大学の教員から指導を受けることで、多様な学術的アプローチや知識を得ることができる。また、共同で発行される学位は、複数の大学の信頼性を集約しており、社会的な評価も高いと考えられる。しかし、双方の教育期間は運営や制度面で対立も生じ易く、同時に異なる学術文化の調整も必要という指摘がある(花田, 2019)。その反面、ジョイントディグリープログラムでは、ダブルディグリープログラムで指摘される単位のダブルカウントの懸念が存在しない。

国際大学協会(IAU)が2014年に行った調査によると、ジョイントディグリープログラムよりもダブルディグリープログラムの設置数のほうが多い(Egron-Polak & Hudson, 2014)。その理由として、両プログラムの特徴の違いから、ジョイントディグリープログラムのほうが実施に向けたハードルが相対的に高いことが推察される(花田, 2024)。

国際共同大学

国際共同大学(International Joint University:IJU)は、複数の国の高等教育機関が共同で設立する大学である。Knight (2019)は、「学術プログラムの開発・提供において、現地および外国の高等教育機関やプロバイダーが協力して共同設立した高等教育機関」と定義している。この形態では、各国の教育機関が持つ資源や学術的な強みを集約し、統合された教育環境を提供する。国際共同大学は、国際的な人材育成を目指しており、世界各国の学生に多様な学問分野や文化に触れる機会を与える。

国際共同大学はTNHEのなかでも新しい取り組みであり、学術的な文献も相対的に少ない。2002年にカイロ・ドイツ大学が最初の国際共同大学として設立され、2017年時点で22大学が設置されている(Simpson, 2021)。そのうち、受け入れ国の中で中国が最も多く、全部で9校が設置されている。提供国の中では、ドイツが7校と最も多く、アメリカと日本、香港が3校と続く。

国際共同大学と海外ブランチキャンパスは似ているが、Simpson (2021)は、以下の4つの点で違いを指摘している。まず1点目は、大学の法的位置づけに関してである。国際共同大学は、国公私立を問わずホスト国に所属する独立した大学である一方、海外ブランチキャンパスは外国の大学という位置付けとなる。2点目は、質保証制度についてである。国際共同大学はその法的位置に基づき、質保証がホスト国の基準に従うことが求められるが、海外ブランチキャンパスでは必ずしもそうではない。3点目は、組織運営に関することである。国際共同大学では基本的に設置側とホスト側の双方から理事会メンバーが選ばれるのに対し、海外ブランチキャンパスでは、法的に必要な場合を除いて主に設置側のメンバーが責任を担っていることが多い。4点目は、教育活動における違いである。国際共同大学ではホスト側と設置側が協力してカリキュラムなどを設計する一方、海外ブランチキャンパスでは本校との同等性が重視される。また、もう一つの相違点として、国際共同大学ではホスト国の教育・研究の質やキャパシティ向上への貢献を意識し、学部から博士課程までの教育プログラムが提供され、研究機能も重要視される傾向がある。さらに、ホスト国内の産業界との研究や人材育成面での連携も比較的特徴がある。一方で、海外ブランチキャンパスは主に学部教育および一部の専門職学位が中心であり、研究機能には必ずしも重点が置かれていない(花田, 2024)。

国際共同大学を設置する目的について、まず、文化交流の促進が一つの重要な目的となっている。国際共同大学では、異なる文化背景を持つ教職員や学生が集まり、学問や生活の場で交流することで、相互理解を深め、世界の多様な文化に対する寛容性を高めることができる。これにより、国際社会における平和と協力に貢献することが期待される。

また、国際共同大学は、先進的な教育理念や方法を導入し、ホスト国の高等教育の質を向上させる役割も担っている。設置側の大学が持つ優れた教育資源や研究成果を活用して、ホスト国の学生たちにより質の高い教育を提供することが可能となる。これにより、ホスト国の人材育成が促進され、産業界や社会の発展に寄与することができる。設置国にとって、自国の教育モデルの宣伝、相手国への教育援助、自国とホスト国の大学間パートナーシップ主導など、その目的はさまざまである(Simpson, 2021)。

さらに、国際共同大学は、国際的な研究協力の拠点として機能することも期待される。異なる国の研究者たちが集まり、共同で研究を進めることで、新しい知見や技術が生み出される可能性が高まる。これにより、グローバルな課題の解決に貢献するとともに、学術分野の発展にも大きく寄与することができる。

2.2.5 中国のトランスナショナル高等教育の展開

中国トランスナショナル高等教育プログラム

中国において、TNHEは「Chinese Foreign Cooperative Running School (CFCRS) 中国語：中外合作办学」と呼ばれている。日本では、それを「内外協力による学校運営」と定義されている(南部, 2014)。つまり、「中国の大学と外国の大学は独立した対等のパートナーであることを特徴としている。中国では外国大学の純粋な分校の設立は現在のところ認めていない。独立校と提携校ネットワークの中間に位置する概念で、外国大学の一部でも中国大学の一部でもなく、合弁によって独立した高等教育機関を設立する点に特徴がある。東南アジ

アなどでは、現地のホスト校の多くは学位授与権のないカレッジなどが大半であり、その学術的地位や歴史、名声などに大きな差があるのが普通であった。しかし、中国のホスト大学は正規の学位授与大学であり、合併の新大学(国際共同大学)は中国大学と外国大学の双方の学位を出すこともあり、国内での進路と外国への進路の双方の道が開かれる点でも特徴がある」(杉本、張, 2017 p. 448)。

このような特徴から、中国の TNHE は学生や教育機関に対して大きな魅力を持っている。学生にとっては、国内で正規の大学教育を受けながら、外国大学の教育資源や学術環境に触れることができるため、知識・専門的な能力と国際的な視野を両立させることができる。また、双方の大学から学位を取得することができれば、就職や進学を選択肢が大きく広がり、国内外の企業や大学での競争力を高めることができる。教育機関にとってみると、中国の TNHE は異文化交流の促進や国際的な研究協力の機会を提供している。中国の大学と外国の大学が共同で教育プログラムを開発し、教員や学生を交流させることで、両者の教育理念や方法を相互に学び合い、教育の質を向上させることができる。さらに、共同研究を通じて、新しい知見や技術を生み出し、グローバルな課題の解決に貢献することもできる。

しかしながら、中国の TNHE もいくつかの課題を抱えている。まず、文化や制度の違いによる問題が挙げられる。中国と外国の大学は、教育理念、カリキュラム、評価方法などが大きく異なる場合が多いため、双方の協力体制を構築するのに時間と労力が必要となる。また、学位授与や資格認定などの制度面での調整も複雑であり、円滑な運営を実現するには国際的な基準や慣行を活用した解決策が求められる。

その次に、教育の質の維持と向上が重要な課題である。TNHE は国内外の教育資源を融合させた新しい教育形態であるが、その質が一定以上に維持されなければ、学生や社会が信頼を置くことができない。そのため、教育機関は質保証制度を整備し、定期的な評価や監督を行うことで、教育の質を常に一定レベル以上に保つ必要がある。また、教職員の研修や能力開発、教育プログラムの見直しなどを通じて、教育の質を持続的に向上させることが求められる。

最後に、社会の理解と信頼の獲得が重要である。TNHE は比較的新しい教育形態であり、一部の人々には理解が不足している場合もある。そのため、教育機関は TNHE のメリットや目的を広く社会に周知し、質の高い教育を提供することで、社会の信頼を獲得する必要がある。また、産業界や行政との連携も強化することで、TNHE が社会や経済の発展に貢献することを実感させることが重要である。

中国の TNHE は、国際化が進む中で、学生や教育機関に大きなメリットを提供する新しい教育形態として期待されるが、同時に文化や制度の違い、教育の質の維持と向上、社会の理解と信頼の獲得などの課題も抱えている。これらの課題を克服し、持続的な発展を実現するためには、教育機関や関係者が共同で取り組み、改善策を模索していく必要がある。

著者の調べで、中国において 2025 年の時点では、全国で 826 件の海外との提携によるさまざまな大学レベルや学部レベルの TNHE プログラムが行われている(表 3-2)。その対象国は、英国 26%、米国 16%、ロシア 15%、オーストラリア 14%、ロシア 10%、韓国 9%、ドイツ 5%、カナダ 3%の順となっている。対象

国が欧米諸国が多いのは、中国本土よりも優れている教育が行われている学科が、欧米諸国に集中していることを意味する。特に今回の研究対象である芸術デザイン分野において、プログラム数が近年増加する傾向にある(The Chinese Ministry of Education Chinese-foreign cooperation in running schools, 2025)。プログラムの多くは「学院」レベル、すなわち学部や部局レベルの提携関係であり、外国のパートナーは必ずしも教育機関に限定されないのが特徴である。大学として独立法人格が認められ、営業権が認可されているのは、諸外国提携運営大学(上記で言う国際共同大学と似てる)の9校のみである。

中国のTNHEプログラムの多くは、経済、管理、工学、理学などの分野に集中しており、これらの分野は中国の産業構造の変革と高技能人材の需要に対応したものと考えられる。また、一部のプログラムでは、外国の大学との共同研究や学生交流などの国際化の取り組みも積極的に行われており、中国の高等教育の国際競争力の向上に寄与している。一方で、中国のTNHEプログラムもいくつかの課題に直面している。例えば、一部のプログラムでは、外国の大学との教育理念や教育方法の違いにより、教育内容の統合や学生の学習効果の評価に困難が生じることがある。また、外国の大学との提携関係の維持や管理にも一定のコストやリスクが伴う。さらに、中国のTNHEプログラムは、国内外の高等教育市場の変化や政策環境の変化に敏感に対応する必要がある。例えば、外国の大学との提携関係の再評価や、新たな提携先の探索など、柔軟な戦略的対応が求められる。

中国トランスナショナル高等教育の法規整備

1979年初頭、民営高等教育機関が誕生した(夏, 2002)。全国統一大学入学試験が再開される中、教育の普及を通じて量的拡大を図り、生産力を向上させ経済発展を促進することが求められた。しかし当時、施設の整備や投資の拡大が難しく、高等教育規模拡大への需要に対応できず、「高等教育が育成した人材の不適性」といった問題が表面化した(夏, 2002)。こうした状況の中、民営高等教育機関は中国の高等教育における量的拡大と質的向上に重要な役割を果たす存在として現れた。政府からの直接的な資金援助を受けないこれらの機関は、自主性が高く、柔軟な運営戦略や独自の教育プログラムを展開できる特徴を持つ。このため市場のニーズに迅速に応じ、特色ある教育を提供し、学生や社会から支持されている。

民営高等教育機関の中には、TNHEプログラムに積極的に参画し、外国の大学と提携して共同プログラムを提供する機関も多く存在する。これらの機関は、外国の大学の教育資源や国際的なネットワークを活用し、自国の学生に国際的な視野や能力を養う機会を提供している。同時に、外国の大学との提携も、民営高等教育機関自身の国際化やブランド力の向上に寄与している。しかし、民営高等教育機関の発展にも課題は存在する。例えば、資金調達や施設整備などの面で、公立高等教育機関に比べて劣勢に立つことがある。また、教育質の確保や学位の認可など、民営高等教育機関に対する社会的な信頼性の確立も重要な課題である。これらの課題に対応するため、民営高等教育機関は、教育質の向上に努めるとともに、政府や社会からの支持と認可を得るための努力を続けている。

2002 年から、教育部は民営教育機関に関する情報を公開するようになった。これにより、民営高等教育機関の存在や活動が公式に認識されるようになり、社会の注目を集めるようになった。同時に、教育部の統計掲載を契機に、民営高等教育機関は自己の評価や改善のためのデータを得ることができるようになり、教育の質の向上に向けた取り組みを加速させることができた。

2003 年には、中国政府は TNHE の規範化と発展を促進するために、「内外協力による学校運営条例（中国語：中華人民共和國中外合作辦學條例）」を公布した。この条例は、中国の TNHE の目的、原則、設立、運営、管理などの各方面に対して明確な規定を行い、TNHE の法的地位を確立し、その健康的な発展を保障するための重要な法律的基盤を提供した(杉本・張, 2017)。条例の公布に伴い、中国の TNHE はより規範的で秩序ある方向に発展することができるようになった。教育機関は条例に基づいて、自身の運営や管理を改善し、教育の質を向上させるための取り組みを強化することが求められた。また、条例により、学生や社会の權益がよりよく保護されるようになり、TNHE に対する社会的な信頼感が向上することが期待された。この「条例」というのは、TNHE が中国の教育事業の構成部分として位置づけられ、協力相手が教育機関であることが明示され、必ずしも非営利でなくてもよいと解釈できる表現が含まれた(南部, 2014)。

これにより、民営高等教育機関の存在や活動が公式に認識されるようになり、社会の注目を集めるようになった。同時に、教育部の統計掲載を契機に、民営高等教育機関は自己の評価や改善のためのデータを得ることができるようになり、教育の質の向上に向けた取り組みを加速させることができた。

また、この「条例」により、外国の組織や個人が中国の教育機関と協力して学校を運営することが合法化され、その運営形態も多様化した。非営利目的の協力だけでなく、一定の営利を目的とした協力も許容されることで、教育市場に新たな活力が注入された。出資者は、法規により所有権を保持できるほかに収益を回収することができ、教育関連事業、人材派遣事業などにおいても収益が見込まれる。海外の提携校にとっても卒業後は優秀な学生を自国に取り込むことができるなどのベネフィットがある。入学する学生は、全国統一入学試験の成績が国公立大学と同じ学力レベルとなっていることも魅力である。キャンパスには、海外のからの留学生、交換留学生、外国人教員が多く国際的な雰囲気醸し出し、外国語がキャンパスの公用語として使用されて、国内にいながら外国のキャンパス生活を体験できるというアピールポイントを有している(澤谷, 2022)。

杉本・張(2017)の調査によれば、「2006 年に規範化された民営高等教育機関に対する管理条例によれば、各民営高等教育機関は少なくとも 1 名の共産党組織の専任責任者を設置すべきと明記された。この責任者は学校の監督責任者を兼任し、法律に従う場合、管理運営機構すなわち理事会に加わることが可能である。TNHE に対する管理も規範化の動向がみられる。2009 年、TNHE のレベルアップと持続的な発展を目指して、暫定的な評価方法が公布され、各機関の運営目的と特徴、管理体制、資金・資産管理、教員・学生管理等の 9 項目に対する評価及びその説明が義務づけられた」(杉本・張, 2017)。

こうして、高等教育での改革と開放政策の施行により、民営高等教育機関が登場し、「内外協力での学校運営」へと発展することが可能となった。より早

く個人・経済発展の要求に応えられるため、民営高等教育機関はすでに社会主義教育の欠かせない一部となっている。同時に、公立高等教育機関と同様に、政府および各級の共産党委員会が運営に参加し、関与する体制となっている。

しかしながら、法規の整備が進んだとはいえ、実際の運営においてはまだいくつかの問題が残っている。例えば、外国の教育機関との協力において、文化や教育理念の違いによる摩擦が生じることがある。また、営利目的の協力が増えることで、教育の質が低下する懸念もある。これらの問題に対して、政府や関係機関は引き続き対策を講じ、TNHE の健全な発展を図る必要がある。さらに、国際情勢の変化やグローバルな教育市場の動向にも対応しなければならない。近年、世界的に高等教育の国際化が進んでおり、中国の TNHE もこの流れの中で、自らの特色を生かし、国際的な競争力を高める必要がある。このためには、教育機関や関係者が協力して、新しい教育プログラムやモデルの開発、教員の国際化能力の向上など、様々な取り組みが求められる。

表 2-2 2025 年中国のトランスナショナル高等教育プログラム統計表

2025 年中国全土トランスナショナル高等教育プログラム統計											
											単位: 件
	アメリカ	イギリス	オーストラリア	カナダ	ドイツ	フランス	韓国	ロシア	ニュージーランド	その他	合計
北京市	11	11	3	3	2	0	1	1	0	5	37
上海市	6	6	5	4	8	3	1	1	1	10	45
天津市	4	2	4	3	0	2	0	0	0	5	20
重慶市	7	5	4	0	3	1	0	2	2	3	27
江蘇省	4	18	11	6	7	0	1	4	1	15	67
浙江省	12	4	1	2	1	2	0	2	1	9	34
広東省	5	2	0	0	1	1	2	0	0	5	16
海南省	2	5	0	1	1	1	0	0	1	1	12
福建省	5	1	0	1	0	1	0	0	0	5	13
山東省	8	12	3	2	4	1	17	8	3	15	73
江西省	4	3	0	1	0	0	2	5	0	7	22
四川省	11	4	0	0	1	2	1	1	0	2	22
安徽省	7	0	0	0	2	1	4	1	0	3	18
河北省	2	2	2	0	4	0	7	2	4	14	37
河南省	18	5	11	4	2	1	12	9	2	24	88
湖北省	15	9	5	1	2	1	4	1	3	7	48
湖南省	8	9	2	1	1	0	2	1	3	2	29
陝西省	7	7	1	0	2	2	0	1	1	1	22
山西省	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
黒竜江省	0	5	0	0	0	1	1	19	0	3	29
遼寧省	5	6	4	1	2	2	0	10	3	9	42
吉林省	19	6	5	0	1	0	19	12	0	5	67
江西省	6	3	2	0	0	0	2	0	0	5	18
雲南省	2	3	1	1	0	1	1	1	1	3	14
貴州省	3	5	1	0	0	0	0	0	0	4	13
甘肅省	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3	5
内モンゴル自治区	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	3
寧夏自治区	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
新疆自治区	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
青海省	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
西藏自治区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	172	134	67	31	44	23	77	85	27	168	828

(中国教育部が発表したデータを基に、作者が作成)

2.3 先行研究

2.3.1 トランスナショナル高等教育研究の流れ

TNHE の先行研究について、これまで主に欧米の大学が中心となり、グローバルな教育展開の動機やその実施形態、政策的背景が多角的に検討されてきた。特に、海外キャンパスの設立や学位プログラムの輸出に関する事例分析が多い。近年 TNHE の導入国であるアジア諸国からの研究も増えており、TNHE 導入国の視点からプログラムの設定と実行について分析した。図 1-1 は 1999 年から 2021 年までの TNHE 研究の出版トレンドの流れを示している（Kun Dai, Ka Ho Mok & Xiaoyuan Li, 2023 p4）。以下はこの図の示す三つの時期を参考にして、TNHE 研究の流れを紹介する。

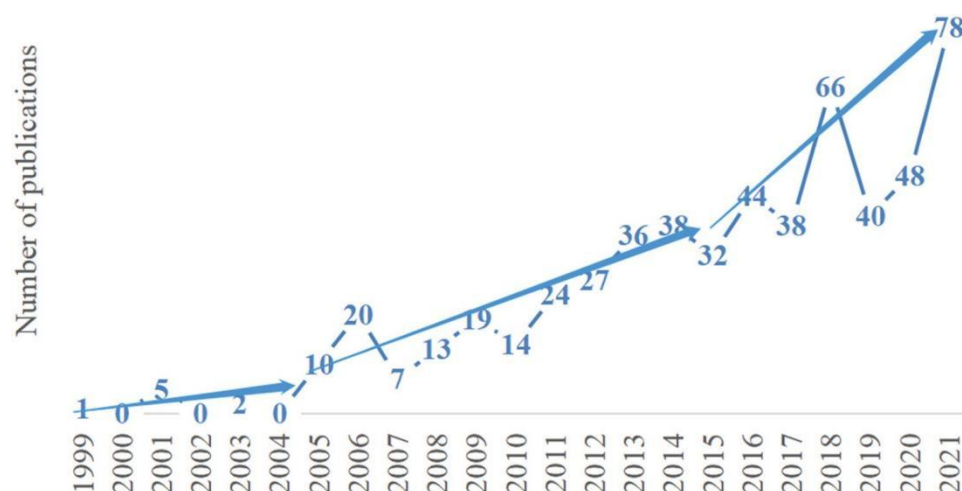


図 2-1 トランスナショナル高等教育の研究動向

出所：Kun Dai, Ka Ho Mok & Xiaoyuan Li (2023, p4)

第一期（1999 年～2004 年）トランスナショナル高等教育の制度化

1999 年から 2004 年にかけて、TNHE に関する研究が徐々に出現し始めた。この段階では、TNHE が少しずつ制度化され、プログラムも実行されている。この時期の研究は TNHE の規制と管理に焦点を当てていた。McBurnie & Ziguras (2001) は、香港、マレーシア、オーストラリアにおける TNHE の規制などについて分析した。これらの初期の研究は、主にオーストラリアとアジアの高等教育協力をモデルとした TNHE の実践を理解するための基盤を築いた。また、Knight (2004) は TNHE の定義を明確化し、その多様な形態を分類化する試みを通じて、研究領域の体系化に貢献した。この時期は、主に英語圏の研究者が中心となり、法律や国際貿易協定との関連から TNHE の枠組みを捉えることに重点が置かれた。

第二期（2005 年～2014 年）：トランスナショナル高等教育の発展

2005 年～2014 年にかけて、TNHE のプログラムは世界中で急速に拡大した時期であり、研究もそれに伴って多様化した。この期間には、欧米の大学がアジアや中東、アフリカにキャンパスを設立する事例が相次ぎ、その動機やガバナンス構造、質保証の課題についての分析が深化した。この時期の研究において、

TNHE の概念化に関する Knight(2005)の研究、国家戦略に関する Shams & Huisman(2012)の研究、管理問題に関する Pyvis & Chapman(2007)の研究、経済効果に関する Pon & Ritchie(2014)の研究、学生と教員の経験に関する Wilkins、Balakrishnan & Huisman(2012)、Leung & Waters(2013)の研究が代表的なものである。中国のトランスナショナル高等教育に関する研究もこの時期から現れた(Huang, 2008)。同時に、TNHE 対する批判的視点に関する研究も出始めた(Blackmur, 2007)。

第三期（2015 年～現在）：トランスナショナル高等教育の拡大

2015 年以降は、TNHE が世界的に進展した時期である。この時期はグローバル化の加速と情報技術の飛躍的な発展が背景にあり、TNHE の拡大が著しくなっている。この段階では、TNHE の形態がますます多様化し、特にコロナの影響でオンライン教育などの新しいモデルも登場している。この時期の研究焦点も、これまでの規制や管理、概念化などに加えて、新たな分野に広がっている。例えば、グローバルな教育市場における不平等や学問的植民地主義への批判(Stein & de Andreotti, 2016)、TNHE の新たな役割(Aminu et., 2022)、オンライン TNHE の効果や質の評価に関する研究(Li, Dai & Zhang, 2024)が増えている。また、近年、グローバリゼーション、高等教育の国際化、学生の移動性などの角度から TNHE を分析する研究で出現し始めた(Tight, 2021; Wilkins & Lan, 2022; Zhang, 2021)。この時期には、アジアやアフリカなどの途上地域からの研究者の発言力も増しており、グローバルな視点からの TNHE の研究がますます活発化している。これにより、TNHE の理論や実践がより豊かな内容を持つようになり、世界中の高等教育の発展に貢献している。

2.3.2 TNHE 形態ごとの研究

TNHE の研究では、その全体を対象する研究以外、それぞれのプログラム形態に焦点を当て、その定義、設定、運営などについて研究もしくは言及する学者もいる。

フランチャイズプログラムについて、Knight & McNarama(2017)は、フランチャイズプログラムの実施状況について分析し、そこに存在する課題を指摘した。Moufahim & Lim(2015)はフランチャイズプログラムで学ぶメリットを、技術、批判的思考力、ディスカッション力などの面から考察した。Pon & Ritchie(2014)は、文化交流、人員交流、大学運営のフランチャイズプログラムの意義を考察した。

海外ブランチキャンパスについて、Garrett et al. (2017)は、世界で展開している海外ブランチキャンパスを国別で統計し、その実施状況を紹介した。Lawton & Katsomitros(2017)は、インドで実施している TNHE プログラムを例に、海外ブランチキャンパスに存在する問題点を指摘した。Lane & Kinser(2013)は今世界で実施している海外ブランチキャンパスの運営形態をタイプごとに分類した。Wilkins & Balakrishnan(2013)は、授業の質やキャンパスライフを対象に、海外ブランチキャンパスのメリットについて考察した。

ダブルとジョイントディグリープログラムについて、Knight & Lee(2022)はダブルとジョイントディグリープログラムディグリープログラムについて定義を行った。Knight(2017)は、ダブルカウントという角度からダブルディグ

リープログラムについての問題点を指摘した。花田(2019)は、ジョイントディグリープログラムにおける学術文化の調整の必要性について考察した。Egron-Polak & Hudson(2014)は、ジョイントディグリープログラムとダブルディグリープログラムを比較して、それぞれの特徴を分析した。Dai(2020・2021)は、ジョイント・ダブルディグリープログラムが学生を「文化の中間地」の立場にさせると主張した。

国際共同大学について、Knight(2019)はその特徴と用途の角度から考察し、定義を試みた。Simpson(2021)は国際共同大学の実施状況、各国の相違点、ほかのTNHEプログラムとの違いなどについて分析を行った。

2.3.3 新しいキーワード

Dai, Mok & Li, (2023) の調査では、TNHE 研究に関する新たなキーワードを紹介した。それは、TNHE の政策と品質保証、学生の動機と経験、学生の流動性である。各国の教育政策における国際化戦略が具体化される中で、TNHE プログラムの質保証も求められており、それに伴いクロスボーダー教育のモニタリング体制も進化している。また、学生一人ひとりの学びの軌跡に着目し、留学経験が学業・職業選択に与える影響を縦断的に分析する研究が増加している。さらに、デジタル技術の進展によりオンラインでの国際教育が拡大し、学習者のアクセス可能性が大幅に向上している。こうした環境下で、学生の選択動機や学習成果の評価に関する研究も深化しており、特に文化適応や言語課題が学習経験に与える影響が明らかになりつつある。2025 年現在、グローバルな人材育成をめざす教育機関では、単なる知識伝達を超え、国際的視野と実践力を持つ人材の育成が求められている。

政策と品質保証について、Mok & Han(2017)は政策の設定者と実行者の間に存在する隔たりを焦点に当て、TNHE の政策と品質保証に存在する問題点を分析した。Neri & Wilkins(2019)は、国の戦略設定の角度から、TNHE に関連する問題を分析した。Lim et al. (2016)は TNHE とローカル教育に存在する基準の違いから、TNHE の品質評価、プログラム管理について考察した。

学生の動機と経験について、Fang & Wang (2014)は学生の選択動機という角度から、TNHE の位置づけを行った。Dai, Lingard, & Musofer(2020)は、学生の二つの教育システムの間で学習する体験を例に、教育における異文化間移行の可能性を提案した。Ou & Gu, 2021 は、TNHE によってもたらされる他の社会文化的課題などについて分析した。

学生の流動性について、Hartmann & Mok(2021)はコロナ後、学生の心理的変化の角度から、TNHE の需要について分析した。Kleibert(2022)は、TNHE は学生を地域内に留まらせることができるという事実を元に、政策立案者の角度から見る TNHE について考察した。Dai, Wilkins & Zhang(2023)は、香港とその周辺地域を例に、TNHE プログラムが集中して形成する要因について分析した。

2.4 まとめ

本章では、まず TNHE の概念を整理し、主要なプログラムの種類について紹介した。それから TNHE の先行研究について説明し、研究の流れ、重要な研究者、国別協力、近年の新しい動向についてまとめた。

2000年代から大きく発展した TNHE は、学習者に対する教育機会の拡大や海外留学にかかる費用負担の軽減といったメリットがもたらされたことは、大きな成果と言えるだろう。一方で、商業的な側面、TNHE プログラムを提供する大学本校との質の同等性の確保、単位認定の方法など、一部の TNHE プログラムにおいては教育の質の保証に関する課題も残されている。

TNHE のプログラムは、フランチャイズプログラム、海外ブランチキャンパス(IBC)、ダブルディグリープログラム(DDP)、ジョイントディグリープログラム(JDP)、国際共同大学(IJU)、国際遠隔教育、国際協働遠隔教育に分類することができる。本章では、フランチャイズプログラム、海外ブランチキャンパス、ダブルディグリー及びジョイントディグリープログラム、国際共同大学について紹介した。TNHE に対するニーズが高まっている中、学習者の保護を念頭に置いた取り組みが求められており、これは今後の TNHE 展開において十分な検討が求められる課題である。一方、中国の TNHE は諸外国とは異なる道を歩んでいる。中国では外国大学の純粋な分校の設立は現在のところ認めていない。海外の大学と合併して新しい教育機関を作り、両方の大学に所属し、どちらの分校とも言えないのが特徴である。

中国では、外国大学との協力による TNHE プログラムが主に展開されており、そこには独自の規制と管理体制が存在する。こうした体制は、中国の教育政策や文化的背景に基づいて形成されており、外国大学との協力を通じて、中国の学生に国際的な教育機会を提供する一方で、中国の教育体系や人材育成目標に合致するように調整されている。今後、中国の TNHE は、国内の教育政策や社会的ニーズに応じて、さらに独自の道を歩んでいくと考えられる。また、グローバルな TNHE の潮流との連携も強化されることで、中国の高等教育の国際化が一層促進され、世界中の学習者にも貢献することが期待される。

また、本章では、研究背景となる先行研究について説明し、TNHE 研究の流れ、形態別研究、近年の新しい動向についてまとめた。これまでの研究では、TNHE の拡大における政策立案者と実践者の間に存在する構造的ずれが繰り返し指摘されてきた。特に、グローバル化における北と南の教育価値観の不均衡、質保証制度の形式知と実践知の断絶、そして教員や学生の主体性が制度設計の中で軽視される傾向が共通の課題として浮かび上がっている。また、特定の分野における TNHE の有効性を、現場にいる人間たちの視点から調査分析した研究はまだ存在しない。本研究は、その先駆的な存在として、芸術デザイン分野を対象に、TNHE の有効性について調査分析を行う。

TNHE は多文化の下で行う教育であり、学生が異なる国の文化に接することによって、国際的視野や文化に跨る理解力を育む機会となる。そのため、学生の創造性が高まることが期待され、特に芸術デザイン分野では多様な文化的刺激が新たな表現の可能性を生む。しかし、今までの研究では芸術デザイン分野における TNHE の影響に着目したものが極めて限られており、特に学生の創造性や表現力の発展にどのように寄与しているかについての実証的な知見は依然として不足している。本研究は、こうした空白を埋めるものであり、多文化環境が芸術デザイン教育にもたらす具体的な効果と特徴を、学習者の内面的な体験を通して明らかにすることを目指す。

第 3 章

ファッションデザイン学科を対象とした トランスナショナル高等教育に関する 比較研究

3.1 研究概要

本研究における著者が勤めている大連工業大学は、イギリスのサウサンプトン大学との協定で、ファッションデザイン専攻において、トランスナショナル高等教育(本章では、以後 TNHE と表記)のダブルディグリープログラムを実施している(Dalian Polytechnic University Southampton International College:SIC)。ダブルディグリープログラム(Double Degree Program:DDP)は「2つの教育機関が協働で学位プログラムを運営し、その卒業要件を満たすことで、それぞれの機関から1つずつ学位が提供されるプログラム」(Knight & Lee, 2022)を指す。つまり、学生が中国にいながら、4年間サウサンプトン大学で実施されている教育カリキュラムに従い教育を受け、最終的にサウサンプトン大学と大連工業大学両校から2つの学位が授与される。一方、大連工業大学には元々ファッションデザインという専攻が存在し(Dalian Polytechnic University School of fashion:SOF)、そこに所属する学生は、大連工業大学に元々存在するカリキュラムに従い、教育されている。従って、大連工業大学には二つのファッションデザイン専攻が存在し、それぞれ異なる二つの教育システムによって授業を行っていることになる。そこで、本論文で、二つのファッションデザイン専攻の教員や学生に対してインタビューを行い、そのデータを質的調査法で分析し、同じ専攻において二つの教育システムが、そこで学ぶ学生に与える影響を明らかにした。

3.2 研究デザイン

本研究は、教育における質的調査法を用いて、TNHE の提供国と受け入れ国の教育システムの比較研究のケーススタディである。

Merriam(2004)によれば、ケーススタディは「教育的な革新を研究し、プログラムを評価し、政策を伝達する上で、特に有効である」(Merriam 2004)。この研究の背景には、TNHE の提供国の教育が TNHE の受け入れ国の教育よりも優れているかどうかという問題意識がある。たとえば、中国を例に、TNHE がその国内において非常に高く評価されており、国の教育政策の一環として全面的に TNHE を押し出そうとしている(Han 2021; Mok & Han 2017)。しかし、実際これらの TNHE のプログラムと本土高等教育の学部学科を比較し、その本質的な相違点がどこに存在するかについて取り組んだ研究はほとんど見当たらない。

こうした問題意識を基盤としながら、本研究では次の三つの点に注目して研究の具体的な問いを立てていく。

第一に、本研究では学科に所属している学生について注目している。同じ名前の学科に所属している以上、学生はほぼ同じ内容の授業を受講し、取得できる資格や参加できるコンテストなどもほとんど同じだと思われる。しかし、それぞれの学生が異なる言語で異なるカリキュラムの下で育成されるので、その教育方法や教育理念が学生に与える影響の違いについて明らかにする必要がある。

第二に、本研究では、学科に所属している教員について注目している。SIC に所属するほとんどの教員たちはサウサンプトン大学から派遣された人たち

で、国籍もバラバラである。その特徴の一つとして、派遣された教員の大多数がサウサンプトン大学本校から派遣された者ではなく、臨時に募集された非常勤がほとんどであることが挙げられる。そのため、教育水準がはたしてサウサンプトン大学本校レベルに達することができるかどうか不明である。一方 SOf に所属する教員は全員中国本土の出身で、留学経験を持つ者も何人かいる。それぞれの学科に所属するこれらの教員たちに焦点を当て、その指導方法や人柄などが授業にどのような影響を与えてきたか、その実態を議論していく必要がある。

第三に、本研究では、学科の施設や設備に注目している。SIC の学費は SOf の約 5 倍以上であり、実技などで使う機械もほとんどサウサンプトン大学から寄付されたもので、建物の中に独自のカフェ、レストラン、自習室や閲覧室などが完備されており、独自の Wi-Fi も利用できる。また、建物全体がオートロックになっているため、他の学部の学生が利用出来ないようになっている。一方、SOf の施設や設備は SIC と比べて明らかに劣るところがあり、予算規模もまったく異なる。この施設や設備の差によって生じる教育の格差が、所属する学生にそれぞれどのような影響を与えているかについて明らかにする必要がある。

世界各国における TNHE の実施目的は海外から優れた教育資源を導入し、より高いレベルの人材を育成することである。従って、TNHE のプログラムを実際に体験した学生のレベルがどの程度のもので、とりわけ従来の教育システムで学んだ学生と比べると、どのような差異が存在するかを知ることが、今後 TNHE プログラムの設計と実施にとって、良い参考となる。また、その違いを数値データだけでなく、現場における生の声を聞くことも大事である。従って、本研究はそこで学んでいる学生や働く職員を対象に、インタビューを行い、質的研究法を用いて分析したものである。

教育における質的研究は、人々がその社会的世界と相互作用しあうことによって構築してきた意味を理解することを意図している (Merriam, 2004)。本研究で検証する TNHE と中国本土高等教育の違い、という事象の解釈は多元的であり、そこに在籍する学生それぞれの経験や背景、彼ら自身のアイデンティティのあり方などによって色づけられるものである。そのため、それらの学生の声に耳を傾け、学生の行動や行為についての詳細な聞き取り調査を行うことにより、TNHE プログラムという教育現象の実態と特徴を明らかにすることができる。

本研究では、以下の 5 点に留意しながら質的研究を行う。

- 1、TNHE プログラムについて、その理解と意味を引き出す。
- 2、研究者自身が、データ収集と分析を行う。
- 3、研究者自身が現場へ出向き、現場の人間からデータを収集する。
- 4、学生個人の個別的・特殊性を持った事例から、一般的な特徴や法則を導き出そうとする帰納的な方向性をもった分析を行う。
- 5、調査結果に関しては、十分に記述的にする。

この研究調査の中では、特定の大学の TNHE プログラムという一つの境界づけられたユニット（システム）に注目していることから、TNHE のケーススタディでもある。ケーススタディでは、「集約的な記述と分析」(Merriam 2004) が求められており、ここでは従来の先行研究における分析結果を生かしつつ、

特定の大学に位置する学部学科と TNHE プログラムについて、それらの国の国家的状況、大学の特色といった背景を踏まえた分析を行う。

また、ケーススタディは教育的な革新を研究し、プログラムを評価し、政策を伝達する上で、とくに有効であるとされる (Merriam 2004)。今回のケーススタディの調査対象となる学科は、ファッションデザインという芸術系学科を意図的に選んでいる。このような特色ある分野では、中国は欧米諸国と比べて比較的まだ弱いと言われるところから、現在 TNHE プログラムの数が急増している (第二章の中国のトランスナショナル高等教育の展開という部分を参照)。このような革新的な動きを見せる TNHE プログラムにおいて、その洞察や発見、また新しい解釈を行うことは、今後の各高等教育機関における国際化戦略への取り組みや、TNHE 政策への示唆となることが期待される。

サンプリングの妥当性とその意義

研究対象を考察する時に、まずどこ (どのような大学) で、誰 (どのような学生) を対象とするかを選択する必要がある。本研究では、TNHE の状況、比較研究の意義などから、同じキャンパス内に存在する 2 つのファッションデザイン学科 (SIC と SOF) において、その両方の学科に所属する学生、教員、スタッフを研究対象とした。TNHE の提供国と受け入れ国における教育システムの差異を比較し、今後の課題や各国の高等教育及び留学生政策を見据えて行く上で、二つの意味においてこれらのカテゴリーに注目することが重要だと考えられるからである。

まず、同じ大学に存在する同名学科に注目する意義を提示する。同名学科に焦点をあてる理由は、比較対象が同じキャンパス内に存在し、外部環境による教育への影響が少ないため、TNHE 提供国の教育と受け入れ国の教育の本質的な差異を引き出すことができるからである。また、近年では、TNHE のプログラムがその受け入れ国の大学の得意学科を特化する目的で実施する傾向があり、同大学内に共存する同名学科が増えているため、その比較研究は大きな意義を持つと言える。

二つ目の意義としては、本研究で取り扱うファッションデザインという分野は、アジア諸国が欧米諸国と比べるとまだ弱いと考えられることが多いので、留学志向を持つ学生も多い。自国の弱い分野を補完していくというのも、TNHE を導入する目的の一つなので、この分野での比較研究はより TNHE の存在意義に迫ることができる。

調査方法の詳細

本インタビューの回答者は各学院に所属する 3、4 年生、大学院生、卒業生、合計 24 名及び教職員合計 6 名の計 30 名である。インタビュー候補者決定後の連絡は、主に SNS のメッセージや E メール、電話を使い、事前に本研究の趣旨や個人情報の取り扱いについて説明を行った。場所は全て大学内のカフェで行われた。時間は 30-40 分程度である。データの内容については全て本人の了解を得た上で引用を行っており、インタビュー中に話された、特に個人的な内容を述べた部分、本人が公開を望まなかった部分については録音、書き起こしなどは行っていない。最後に、個人情報の取り扱いには十分な配慮を心がけた。研究の目的上、情報提供者の出身地や現在までの学習・教育環境に触れざるを

得なかったが、固有名詞をあげることは必要最低限に抑え、個人の特定に繋がらないように細心の注意を払っている。

表 3-1 インタビューリスト①

回答者番号	性別	所属	インタビュー時間
1	女	服飾学院三年生	35 分
2	男	服飾学院三年生	35 分
3	女	服飾学院三年生	34 分
4	男	服飾学院三年生	30 分
5	女	服飾学院三年生	35 分
6	女	服飾学院四年生	34 分
7	女	服飾学院四年生	30 分
8	女	服飾学院四年生	33 分
9	女	服飾学院四年生	37 分
10	女	服飾学院四年生	34 分
11	女	服飾学院卒業生	33 分
12	女	服飾学院大学院一年生	34 分
13	女	サウサンプトン国際学院	39 分
14	女	サウサンプトン国際学院	33 分
15	女	サウサンプトン国際学院	34 分
16	女	サウサンプトン国際学院	32 分
17	女	サウサンプトン国際学院	38 分
18	女	サウサンプトン国際学院	35 分
19	女	サウサンプトン国際学院	33 分
20	女	サウサンプトン国際学院	34 分
21	女	サウサンプトン国際学院	36 分
22	女	サウサンプトン国際学院	35 分
23	女	サウサンプトン国際学院	35 分
24	男	サウサンプトン国際学院	35 分
25	女	SIC 中国側責任者	40 分
26	男	SIC イギリス側責任者	41 分
27	女	SIC 管理職員	24 分
28	女	SIC 中国籍教員	20 分
29	女	SIC イギリス籍教員	33 分
30	女	SOF 管理職員	40 分

今回のインタビューは 2019 年 9 月 11－17 日に行われたものである。インタビュー調査は、半構造化インタビューを基本としている。状況によっては、

非構造化・インフォーマルな形式の質問も実行し、インフォーマルな質問は特にインタビュー調査の最初の段階で、引き続き行われるインタビューの質問を定型化するためにも行った。また、調査協力者の学生の経験や考えは多様であり、こちらが想定していなかった回答や経験に触れることも多かったため、会話の流れの中でより柔軟な質問を行うことを心掛けた。実際のインタビューを始めるにあたっては、本研究の要旨とデータの扱い、プライバシーの保護やレコーダー使用の可否などについて口頭で伝えると共に、代表的な質問を含めたガイドラインを手渡した。

表 3-2：学生への質問表

- 1、出身地はどこですか？
- 2、今まで絵を習ったことはありますか？
- 3、あなたの英語力はどのレベルですか？
- 4、何故この学校のこの学科を選びましたか？ほかに行きたかった学校ありましたか？
- 5、経済的な部分が学校選びに影響があったのですか？
- 6、自分の芸術的センスとスキルについてどう思っていますか？
- 7、先生たちの指導方法についてどう思っていますか？
- 8、授業内容に満足していますか？
- 9、資格とコンクールへの参加はどのようになっていますか？
- 10、学校の宿舍生活に満足していますか？
- 11、学校の食堂に満足していますか？
- 12、教室や図書館などの施設に満足していますか？
- 13、就職支援は充実していますか？
- 14、留学サポートはありますか？
- 15、教員との人間関係はどうなっていますか？
- 16、同級生との人間関係はどうなっていますか？
- 17、未来に対するビジョンはありますか？

※質問の順番はこの通りとは限らない。

表 3-3：教職員への質問表

- 1、貴学院でこのような学科を導入した理由はなんですか？
- 2、今までの教育経験と異なること、現在の学科の特徴・課題点を教えて下さい。
- 3、担当クラスでの学生の特性・良い点・課題点などを教えて下さい。
- 4、指導において苦労する点、学生指導する上で心掛けていることを教えて下さい。
- 5、どのようなテキストを使用し、どのような教育方法（授業スタイル）を取っているかどうか教えて下さい
- 6、指導に当たって、知識の教授を重視しているのか、それとも学生自身の学習意欲を上げることを重視しているのか、教えて下さい。
- 7、独自の教育法があるかどうか教えて下さい。
- 8、教室カルチャー（クラスの雰囲気）、学生間の英語力の差、教育背景の差異はありますか？
- 9、8の差異によっておこるクラスのなかでの課題などがあれば教えて下さい。
- 10、文化の差異によって引き起こされる問題があれば教えて下さい。
- 11、中国での生活に慣れましたか？（SIC）
- 12、クラスにおける英語力の差が授業にどのような影響を与えましたか？（SIC）
- 13、国際教育学院を意識したりしますか？（SOF）
- 14、コンテストの参加や資格取得の面でのバックアップがありますか？
- 15、未来への展望を教えて下さい。

※質問の順番はこの通りとは限らない。

3.3 研究対象の紹介

大連工業大学服飾学院（SOF）

大連工業大学は1958年に設立された総合大学である。前身は中華人民共和国軽工業部直属の大連軽工業学院、1998年に遼寧省の管轄下に入り、2007年「大連工業大学」に名前が変更された。現在15の学院の下で、49の学部学科を抱え、学生数14800人余り、留学生数500人余り、教員数は840人余り、主に紡績、食品化学、芸術、服飾などの分野が中国国内において、高く評価されている。SOFは1985年に創設され、1993年から学部生を募集し始めた。2003年修士課程を設け、それは中国東北地方の高等教育機関における唯一のファッション分野の修士課程である。大連工業大学SOFは中国東北部におけるファッション人材を育成するための重要な基地であり、中国服飾教育最高賞を最多八回も受賞し、その知名度が高い。SOFのファッションデザイン学科は中国で最も早く設置されたファッションデザイン学科である。現在ファッションデザイン学科に所属する学生数は約1000人である。

大連工業大学サウサンプトン国際学院（SIC）

2011 年大連工業大学がイギリスのサウサンプトン大学と共同で TNHE プログラムを実施し、ヴィジュアルコミュニケーションデザインとファッションデザインという二つの学科を設置した。サウサンプトン大学はイングランド南部の町サウサンプトンに本部を置くイギリスの国立大学である。1862 年に設立されたハートリー学会がその前身であり、イギリスの大規模研究型大学グループ、ラッセルグループに所属。サウス・イースト・イングランドで最大の研究主導型大学である。そのアート学部の前身であるウィンチェスター芸術学院は世界的に有名な芸術学院で、中でもファッションデザイン学科が特に有名である。サウサンプトン大学国際学院ファッションデザイン学科は 2012 年 9 月から第一期生を迎え、2022 年現在、約 360 名の学生が所属している。学生たちは学部 4 年間全て中国国内で教育を受け、卒業後大連工業大学とサウサンプトン大学両校の学位を取得することができる。SIC に所属する教員は 2022 年時点で中国籍 15 人と外国籍 10 人からなっている。

SOF と SIC のカリキュラムの違い

SOF と SIC の授業科目の構成に大きな違いがある。SOF では、中国国内のファッション教育の体系に沿って、文化的背景や伝統的技法を重視した科目が多く含まれている。例えば、中国の服飾文化史や刺繍、染色などの伝統工芸技法の習得が義務付けられている。これは、中国独自のファッション文化を形成し、伝承するためのものである。一方、SIC のカリキュラムは、サウサンプトン大学の国際的な教育体系を反映しており、現代的で国際的な視野が求められる科目が中心となっている。例えば、グローバルなトレンド分析や国際的なブランド戦略の講義があり、学生たちは世界的なファッションの動向を把握することができる。それから、SOF と比べて、SIC には学生の発想力と創造性を刺激する科目が多く設置されている。なお、SOF と SIC のカリキュラムは内部機密として、外部に公開することが禁じられている。本論文を執筆する際、大連工業大学側と交渉して、SOF と SIC の必修科目だけ論文に掲載することを許可された(表 3-4 を参照)。表 3-4 を見てもわかるように、SOF と比べて SIC の必修科目には、批判的思考、創造性、イノベーション関係の授業が設置されている。

科目の評価について、SOF では、学期末の試験やレポートが評価の中心となっている。学生たちは、授業で学んだ知識を暗記し、試験やレポートでそれを証明することが求められる。SIC では、授業中の参加度やグループワークの成果、プレゼンテーションなど、様々な要素が評価に反映される。これは、学生たちの学習過程を総合的に評価するためのものであり、知識だけでなく、思考能力やコミュニケーション能力なども重視される。これらのカリキュラムの違いは、SOF と SIC がそれぞれ異なる教育理念と目的を持っていることを反映しており、学生たちにも異なる学習経験と成長の機会を与えている。

なお、今回の研究対象である SOF と SIC のシラバス、カリキュラム、時間割、教科書などの資料は内部閲覧のみが許されており、外部に公開することを禁じられているため、今回の比較研究ではインタビューデータのみ扱うことにする。

表 3-4 SOF と SIC の必修科目比較表

服飾学院 (SOF) ファッションデザイン学科	サウサンプトン国際学院 (SIC) ファッションデザイン学科
・服飾の構造と工芸基礎 (72 時限) ・ファッションイメージ画像 (56 時限) ・デザイン思考と方法 (32 時限) ・服飾材料学 (48 時限) ・立体テーラリング 1 (48 時限) ・立体テーラリング 2 (48 時限) ・仕立て構造とデザイン (80 時限) ・服飾デザイン基礎 (48 時限) ・ファッションスタイリング実践 (32 時限) ・コレクション企画とプレゼンテーション (48 時限) ・ブランド戦略とマーケティング (32 時限) ・ファッションイベントプロデュース (40 時限) ・国際ファッションシステム (24 時限) ・卒業制作総合演習 (72 時限)	・服装とファッションデザイン実践技能 1A (144 時限) ・服装とファッションデザイン実践技能 1B (144 時限) ・モダンデザイン概論 (48 時限) ・批判的思考と創造性 (48 時限) ・芸術デザイン学術英語 (288 時限) ・服装とファッションデザイン実践技能 2A (216 時限) ・服装とファッションデザイン実践技能 2B (216 時限) ・イノベーション産業商業技能 (48 時限) ・専攻と職業の探索 (48 時限) ・卒業制作総合演習 (216 時限)

(内部資料に基づいて著者が作成)

3.4 データ分析

本節では、SOF と SIC それぞれのファッションデザイン学科における在籍学生の違いや教育の特徴など、両学院の相違点と共通点について概観しつつ、訪問調査やインタビューをもとにした分析と議論を行う。

本研究はグラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を使い、コーディングを行う。コーディングにおいて、本インタビュー調査の中からある一定のパターンや概念を探すため、データをいくつかのカテゴリー別にわけ、それぞれのカテゴリーに名称をつけていく。カテゴリーとは、データから引き出された概念であり、現象を表すものである。現象とは、私たちのデータから出てきた、重要な分析上の考えである。ここで何が起きているのか？という問いへの答えを与えてくれる。現象は、研究対象となっている人々にとって重要な問題、結果、関心、事柄を描写している (Strauss&Corbin, 2014)。カテゴリー同士の関係を検討していく中で、焦点を当てていた現象がそれらのカテゴリーからどのように構成されているかを考えていく。

本研究の初期段階のオープンコーディングでは、インタビューデータの全体を読み進めるなかで浮かび上がってくるテーマを模索しながら、暫定的なコードをいくつか付け、別紙面に整理しながら繰り返し全てのインタビュー全てのインタビューデータを通読した。次に、オープンコーディングの中で浮かび上がったテーマについて、それぞれどのようなカテゴリーに分けることができるか考察した。本研究では分析フレームワークとして、「教育の差異」を規定する教育スタイルの違い、最先端ファッションへの接触、教員構成、管理上の諸

問題、コンテストへの参加、卒業後の進路と、6つの項目が挙げられる。コーディング及びカテゴリー化する際も、これらの6つの大きなカテゴリーの中で整理を行った。

各カテゴリーに対する分析が一通り終了した後、データをもう一度最初から読み直し、それまでの作業のなかで浮かび上がってきたテーマに注意しながら、コーディングを修正し、細かくコーディングし直しつつ、さらにコードを付与する。その後、付与したすべてのコードをまとめ、カテゴリー別に分析と論述を行う。その分析内容を、学生の語り全体や言葉を引用しながら整理して論じる。

引用の際に、なるべくインタビューの言葉を変えずに引用を行い、話の一貫性や個人情報保護の観点から発言を略した部分には（中略）の印を付けた。会話特有の倒置などを多用して話している場合は、わかりやすくするために内容や流れを変えない範囲で言葉の順番を入れ替え、引用部分のなかで主語が明確でない場合などにはカッコのなかに補足を行った。中国語で行ったインタビューに関しては、もとの語彙や文脈をなるべくそのまま伝えられるように細心の注意を払った。特に、中国語会話における砕けた表現、特徴的な言い回しなどは直訳的な日本語で表現している。

3.4.1 教育スタイルの違い

最初に、教育スタイルの違いについて述べる。両学院のカリキュラムを見ると、SOFが専門性のある授業が多い。SICの場合は、授業が全て英語で行われるので、英語学習に割り当てられる時間が多い。一年生、二年生のうち、ほぼ毎日英語の授業が入っており、英語に関する学習時間数はSOFの約3倍以上である。SICでは一年生のうちから専門性のある科目も学習するが、全て英語による授業なので、理解するのに困難な学生もいる。英語の実力について質問したところ、以下のような回答が得られた。

「入学する前、英語の学習がテストに対応するものが多く、リスニングと会話の能力が全くないと言っても過言ではない。なのに、いきなり英語による授業が始まるので、本当についていけないです。」（SIC 三年生）

「一年生のうち、英語の授業があまりにも多いので、専門科目を勉強する時間があまりないです。それに、授業が全部英語なので、最初はほとんど理解出来ません。一応アシスタントの中国人の先生もいますが、いちいち先生の言っていることを全て説明してくれるわけではないので、やはり困難は存在します。」（SIC 三年生）

教育方針に関して、SOFの方は技術を重視し、SICの方はデザイン理念を重視する傾向がある。このような違いが生じるのは、両学院の学生に対する教育目標が異なるからである。両学院の管理職員にインタビューしたところ、以下のような回答が得られた。

「学校側が一つの学科を評価する最も重要な指数が就職率です。卒業生が80%以上普通に就職できることが私たちの目標です。企業側の需要に応えるため、学生が入社後即戦力になれるよう、授業でも実技を重視しています。学生が卒業した後すぐデザイナーになれるわけではないから、どこかの企業で就職して食いつなぐ必要があるので、実技能力があれば、とりあえずどこかに就職することができる。」（SOF 管理職員）

「私たちは TNHE プログラムなので、教育方針はイギリス側の意見が重要視されます。学生は学部時代、専門科目の学習が明らかに不足する傾向があります。それは、言語の障壁によるところが大きい。英語がわからないうちは、専門科目の内容を理解するのが困難だし、それに、英語科目も圧倒的に多いので、その分専門科目を学習する時間が少なくなる。そこで、学生に留学することを促すことが我々の仕事となる。サウサンプトン大学に行って、引き続き勉強すればきっと一人前のデザイナーになれると、イギリス側が思っているみたいです。授業でも、スケッチブックの作成など、将来留学するための準備が主な内容となっています。」(SIC 管理職員)

これらの回答からでもわかるように、SOF は学生の就職率を重視するため、学生が就職し易いように、授業では実技を中心に展開する。一方、SIC の方は、学生が将来サウサンプトン大学本校に留学できるようになることが主な目的で、授業内容もそれに合わせて設置されている。実際学生にインタビューしたところ、同じような回答が得られた。

「大学一年生から実技の授業が多くて、四年生になると、もう独自で服を作れるようになりました。自分たちは実技が多いというのはあまり意識したことはないが、SIC の友達と交流して初めて自分たちが実技の授業が多いということがわかりました。(中略)卒業した先輩から聞くと、手元の技術がやはり就職にすごく有利であることがわかったので、何だかすごく納得しました。」(SOF 四年生)

「私たちは一年生の時からとにかくスケッチブックというものを学んできました。スケッチブックというのは、自分の作品を一つのストーリーとしてまとめるものです。要するに、自分のデザインが一貫性のあるものだということを証明するため、作品を頭でイメージすることから作品が完成するまでの記録です。(中略)欧米の大学に留学するためには、このスケッチブックを提出しなければならないので、その内容の良し悪しが合否を大きく左右します。スケッチブックで一番重要視されるのはその発想です。何からイメージして、そして、どのようなプロセスを得て最終的に作品で表現したか、それを説明できることが大事です。なので、私たちの授業では、その発想、つまりインスピレーションのトレーニングが非常に多いです。その代わり、実技たるものはほとんど学ばないので、三年生になっても何も作れない状態です。技術がないので、イメージした作品を実現出来ないから、私たちもかなり焦っていました。同級生の中で、お金を払って外の専門学校で実技を学びに行く人もかなりいました。私も行きたかったのですが、経済的に余裕がなかったので、結局行けなかったです。」(SIC 四年生)

それぞれの学院の方針は明確であるが、それに対して、学生の反応がさまざまである。自分が所属する学院の教育方針について質問したところ、「将来とてりあえず就職したいので、学院の方針が非常に正しいです。デザイナーになるとか、自分のブランドを立ち上げるとか、そんな夢も見たことがあったのですが、今はもうすぐ四年生なので、やはり現実を見なければならぬですね。」

(SOF 三年生)や、「自分は将来やはり一流のデザイナーになりたいので、ただの労働者になるつもりはないです。なのに、授業では技術中心のものばかりだし、作品も先生の意図に沿って作らなければならないので、個人の発想力を発揮するところが全然ないです。」(SOF 四年生)という正反対の反応が、

SOF の学生から出ている。また、SOF 卒業生の一人がこういう意見も述べた。

「大学三年生の時、日本の上田安子服飾専門学校先生が講演に来て、その時、『どうやってブランドを作り上げるか』というテーマで模擬授業をやったのです。あれはすごく印象的でした。大きな白紙が与えられて、自由な発想で自分たちの好きな付箋をどんどん貼って、内容は何でもいい、とにかく自分のイメージに合うものなら何でも貼って良い、そして、出来上がった作品から自分が作りたいブランドのイメージを説明する。あれは本当に面白かった。そういう発想力を刺激するような授業は中国にあまりないので、すごく感銘を受けました。」（SOF 卒業生）

一方、SIC の学生からも肯定的な反応が出ている。たとえば、「将来留学に行くつもりなので、スケッチブックの作り方がとても役立ちます。普通だったら、こういうような授業は恐らく留学のための専門学校とかに行かないと学べないので、私たちは普段の授業からそれを学ぶことができるから、とても得している気分です。先生の教え方もとてもオープンで、私たちの想像力をできるだけ広げるのが目的みたいです。」（SIC 三年生）や、「学院が留学重視の姿勢で、授業とかも全部将来留学できるようなカリキュラムで構成されています。でも私は将来留学するつもりはないので、卒業したらそのまま就職するつもりです。でも、学校では実技の授業が少ないから、卒業するまで自分で服を作れる人が非常に少ないみたいです。SOF の友達を見ると、向こうでは三年生の段階で、実技に関して、我々の遥か上のレベルなので、とても羨ましいです。」（SIC 三年生）などの意見が多く出ている。

SOF と SIC の学生同士が普段から交流があることを、今回のインタビュー調査で把握することが出来た。両学院の学生がお互いの授業内容や進路などについて意見交換し、双方の状況をある程度把握出来た。それは、生徒会、部活、サークルなどを通じて、一部の学生のための交流だが、口コミでほかのクラスメートにも伝わる。中国の大学は全寮制で、学生はほぼ 24 時間キャンパス内で生活しているので、このような情報交換が簡単に行われている。

二つの学院におけるインタビュー調査の結果から、中国教育とイギリス教育の差異も読み取ることができる。中国の大学では、各学院（学部）学科を評価する基準が学生の就職率であり、学生の大学院への進学率が高いため、大学院へ入学した学生も就職としてカウントする。そのため、卒業後に行く先があれば良いという考え方となる傾向がある。昔の中国では、90 年代前半まで、大学卒業後の仕事は全て政府からの配属を受けるため、自由な就職活動はほとんど存在しなかった。しかし、90 年代後半に入り、大学への進学率が上がったため、大卒の人数も急増し、また、民間企業もその時期から中国各地で誕生したため、国家の大学生の就職配置制度を廃止した。それ以後、大学生の卒業後の進路が各大学にとって、頭を悩ます問題となる。国が大学全体の就職率を基準に大学を評価し、大学自身がまたその就職率で各学部学科を評価する。大学生の両親にとっても、子供が選んだ専攻の就職率が気になる場所である。そのような背景の下で、大連工業大学の SOF も当然ながら、学生の就職率を考慮しながら授業のカリキュラムを構成する。

一方の SIC の方は、TNHE プログラムなので、サウサンプトン側の教育方針に従う必要がある。その背景にあるのは、両大学間の契約制度である。SIC は大学内の他の学院と違って、半永久的に存在する学院ではなく、4 年に一度サ

ウサンプトン大学と契約を延長する必要がある。従って、もしサウサンプトン大学の方から契約延長を拒否されたら、SICの存続そのものが出来なくなる。そのため、学院の運営や教育方針などにおいて、サウサンプトン大学側の意見に従う必要がある。サウサンプトン大学にとって、自らの文化輸出はもちろんのこと、学生のサウサンプトン大学本校への誘致も重要である。それで、SICの学習カリキュラムもそれに合わせて、学生が卒業後スムーズにサウサンプトン大学へ留学できるように設置されている。英語教育の重視、スケッチブックの作成など、その方針から生まれた産物だと言える。学生もそれによって、大きな教育インパクトを受けたと言える。これはTNHEに所属する学生は相手国の教育スタイルに適応する必要があることを意味する。

今回のインタビュー調査では、学生がSICの「留学重視」という姿勢を指摘している。Yu (2021) は、西洋教育の象徴的な力が中国のTNHEを受けた学生の認識の中で体现されていると指摘した。また、学習の適応も二つの国の教育ロジックと直面することになり、例えば上下関係や自由な学習管理などである(Pyvis & Chapman 2005)。しかし、そういう「象徴的な力」、「教育ロジック」以外にも、「留学への勧誘」もTNHEで学ぶ学生が常に直面する状況の一つだと言える。

SICの授業特徴は、学生の想像力を制限せず、より自由な発想で自らのデザインと向き合うことである。そのため、具体的なテクニックを学ぶ以前に、まず学生の想像力をトレーニングさせるのが、その方針である。それは多くの学生がインタビューで証言した。SOFとSICにおける教育の特徴は、あるSOFの大学院生の言葉を借りると、「SOFは、学生が卒業後すぐ戦力となれるような技術者を育てるのが得意であり、一方、SICは、将来必ず自分のブランドを立ち上げるような、まさにデザイナーを育てるのが目標である。」(SOF大学院一年生)

3.4.2 最先端ファッションへの接触

ファッションデザイン学科の学生にとって、世界最新のファッション事情を知ることも大事である。毎年パリ、ミラノ、ニューヨーク、東京などで行われるファッションショーの情報など、学生は世界のファッション界を必要がある。この点に関しては、SOFとSICの間に大きな差が存在する。SOFの学生がインタビューでこのように発言している。

「授業の先生が年を取った先生が多く、その考え方や理念など、明らかに古いです。中には留学経験の先生もいるのですが、教員全体の数から見ると、明らかに少ないです。それに、ファッション流行を教えている先生も、どうやらもう長年最新情報を更新していないので、授業の内容は明らかに時代遅れです。」(SOF二年生)

学生自身が世界最先端のファッション情報を入手する手段も少ないようである。それに関して、以下の意見が出ている。

「学院の図書室に雑誌や参考資料が置いてありますが、手に取って見てみると、ほとんどが五、六年前のものばかりで、最新のものがほとんどありません。仕方なく、自分たちがネットなどで調べようと思っても、学校のネット環境が非常に悪く、Googleも使えないので、非常に不便です。」(SOF二年生)

SOFの状況に対して、SICの方は状況が良い。SICの学生が以下のように言

っている。

「授業の中で、先生たちは常に最先端のファッション情報を与えてくれる。それに関しては確かにすごく得していると思う。自分で調べる必要がないからね。学院の図書室には海外から送られてきた本や画集が沢山あって、最新の雑誌も備えられているので、とても便利です。それに、SICの建物内ではGoogleなどの海外ホームページにもアクセスできるので、すごく便利です。これは私たちの特権とも言えますね。ほかの学院では考えられない環境です。」(SIC 三年生)

以上の比較からでもわかるように、SOFは比較的閉鎖的で、流行の流れにあまり敏感ではないと感じられる。一方、SICの方は、ある程度自由で、最先端の流行にも触れる機会が多い。ここで特筆すべき点は、ネット環境である。中国国内では、一般的に海外のネットワークに繋ぐことは困難である。特にyahoo、Googleなどの検索エンジンや、facebook、Twitter、Youtubeなどのソーシャルネットワークサービスは一切使えない。VPNなどを使えば繋ぐことも可能ではあるが、回線が遅いか、高額な使用料がかかる場合がある。大学キャンパス内となれば、その制限がもっと厳しくなる。しかし、SICでは海外から雇われた教員が多く、このようなネット規制はサウサンプトン大学本校の教育方針にも抵触するので、SICの院内のみ、ネットワークを自由に使える環境を作った。VPNを使って海外の検索エンジンに繋ぐこともできる。

3.4.3 教員構成

学生にとって、直接指導受けるのは教員であるため、教員の知識能力が教育レベルに影響を与えと言える。SOFとSICの教員構成及び特徴は異なり、それによって学生も大きな影響を受ける。両学院の教員を比較すると、まず年齢層が異なる。SOFの方は、40代～50代の教員が全体の6割を占める。一方SICの方は7割以上が30代～40代の教員である。それを生み出す原因は教員募集の方法が異なるからである。SOFの教員は全て大連工業大学の正規職員で、終身雇用に近い制度の下で働いている。正規職員の退職年齢は、教授は65歳で、准教授以下は60歳である。ポストが空かないと、新任の教員がなかなか入って来られない、全体的に年齢層の高い教員が占める割合が大きくなる。一方SICでは、外国人教員のほとんどが非常勤で、その多くはサウサンプトン大学が世界中から臨時に募集してきた人であるため、適応能力や体力などが比較的に高く、若い年齢層の人が多い。

教員に関するインタビューで、SOFの学生から「うちの学院には年配の先生が多いので、たまにジェネレーションギャップを感じるがありますね。考え方が古いというか、我々の思考ではついていけないような気がします。」(SOF 三年生)というような意見が出た一方、SICの学生からは「外国人の先生たちは私たちと年齢がけっこう近いので、友達感覚で接することが出来ます。助教の先生なんて全部私たちSICから卒業した先輩で、歳は2、3個しか離れてないから、ほぼ同年代です。」(SIC 三年生)という意見が出た。教員の年齢層が異なるので、考え方や価値観、更にそのデザイン理念まで大きく違ってくる。また、SOFの教員は全員中国籍で、留学経験者も限りがあるので、中国の伝統的な教育方法で指導にあたっている。そのため、若い学生から見て、少し堅苦しい感じがするのである。反対にSICの教員は世界中から募集してきたので、

国籍なども多様で、国際色豊かである。それは、今までずっと中国国内で教育を受けてきた学生にとって、大変新鮮なようである。SIC の学生から、こんな感想も出ている。「いろんな国の先生がいるので、授業などを通して世界の視点を与えてくれる。私個人にとって、授業で学んだ知識より、そういうグローバルな目線を養ったことに大変感謝しています。」(SIC 三年生)

このような教員構成の安定性と流動性にも注目しなければならない。SOF の教員は非常勤などほぼいないので、教員の移動が減多になく、非常に安定している。教員一人一人が毎年ほぼ同じ授業を担当しているので、カリキュラムも安定している。しかし、SIC では、毎年教員の移動が激しく、安定性に欠ける傾向にある。こうした教員の問題は、SIC の設立当初から指摘されている。このような状況を生み出す理由は大きく二つある。一つ目は生活習慣である。前でも述べたように、SIC の教員たちはサウサンプトン大学が世界中から臨時募集した者が多く、国籍も多様である。そして、その多くが初めて中国に来たので、文化、気候、食習慣など、慣れないことが数多く存在する。それに耐えられず帰国する人が一定数いる。そして、二つ目は給与である。SIC が教員たちに出す給与は普通の中国人教員より高いが、欧米人の感覚からしてみれば決して多くない。具体的な金額は教えて貰えなかったが、インタビューの内容からその一部始終が伺える。SIC イギリス側の責任者にインタビューした際、この問題について以下のように答えている。

「教員の流動性がかなり大きな問題です。私がここに赴任してからまだ二年も経ってないですが、その間も数多くの教員が入れ替わりました。その理由がいろいろあると思いますが、一番の問題はやはり給与でしょうね。私はサウサンプトン大学が現地で雇った者ですが、以前は大連の別の大学で英語教員として勤めていました。中国の大学で 10 年以上働いてきたので、その給与基準はよく知っています。今の SIC の給料は、ほかの大学、特に中国南方地方の大学と比べると、かなり低いと言える。それが原因で、長く勤める人が少ないことも納得出来ます。しかし、教員の流動性が激しいのは、学院の発展にとって大きな障害となっているのも事実です。私もサウサンプトン大学にそれを訴えかけたことはありますが、根本的な解決策が生み出されていない。それに、サウサンプトン大学本校の教員は全くここに来たくないみたいなので、これからも引き続き非常勤でやっていくしかないですね。」(SIC イギリス側責任者)

この教員不安定の問題は、学生からも指摘されている。学生からは、「先生がころころと変わるので、やっと仲良くなったと思ったら、次の学期にいなくなるし、本当に困ります。」(SIC 三年生)や、「同じ授業でも急に先生が変わると、その教育スタンスも変わるから、私たちはかなり戸惑いを感じます。特にデザインなどの授業は、先生によってそのスタイルは本当に真逆の場合もあるので、先生がころころ変わると、本当に振り回されている感がありますね。」(SIC 三年生)というような意見が出ている。

このように、SIC の教員は流動性が激しく、あまり安定しておらず、教育現場にも大きな影響が出ている。それに比べて、SOF 所属の教員はほとんど異動がなく、安定した状態で授業を行えるので、一貫性がある。教育の一貫性が学生に与える影響は決して軽視できるものではない。SIC の学生は中国とイギリス両方の教員の下で勉強しているため、二つの教育システムを経験することになる。

3.4.4 コンテストへの参加

SOF と SIC はコンテストの参加において、ほぼ学生自身に任せている。両学院が毎年組織的に参加するのは、全国大学生ファッションショーのみである。これは中国国内で大学生レベルにおいて最大規模のファッションコンテストで、権威性も高い。このコンテストでは様々な賞が設けられ、過去の実績を見ると、SOF が数十にも上る。一方の SIC も近年では少しずつ賞を取れるようになったが、SOF と比べると、まだ少ない。その理由は経験の差だと言えるだろう。サウサンプトン大学の職員は、このことについて以下のように述べた。

「SOF はこの全国大学生ファッションショーに参加する経験が豊富で、審査員の評価基準なども熟知しており、成績が優秀なものも納得します。我々は近年になってからこのショーに参加し始めたので、経験上非常に不利です。それに、参加する学生の数も SOF が私たちの約 4 倍なので、優秀な学生を選び出す確率も当然高いです。また、私たちのデザイン理念は欧米主義的なところがあって、審査員のほとんどが中国国内のデザイナーで、その評価基準も我々にとって不利なところがあります。」（SIC 中国籍教員）

一方、学生からの意見は次の通りである。

「SOF にとって、この全国大学生ファッションショーに参加するのはもう一種の伝統で、私たちはかなり前から準備してきました。モデル、化粧、撮影などに学生たちも協力してくれて、学院が一致団結して臨んでいたのです。」（SOF 四年生）

「我々にとって、このファッションショーの参加は様々な困難がありました。まず準備期間が少ない。SOF の友達に聞くと、二か月以上前からすでに準備しているんですが、我々は一か月前からやっと着手したのです。それに、我々には専属のモデルや化粧スタッフもいないので、外から雇うか、SOF の友達に協力してもらうしかないのです。先生たちも全く経験がない人が多くて、いろいろと戸惑いを感じます。」（SIC 三年生）

学生の意見からでもわかるように、SIC がこのファッションショーの参加において、SOF と比べると不利である。それは教員によるところが一番大きいと思われる。このようなファッションショーに参加すると、教員の指導力と経験が勝敗を大きく左右する。SIC に所属する教員の多くが外国籍の教員で、しかもその流動性も激しく、今までの経験を以てきちんと指導できる人がほとんどいない。一方、SOF の教員たちは毎年このファッションショーに参加しているので、学生をどう指導したら良いか、大体の心得を持っている。大学生ファッションショー以外のコンテストへの参加は、全て学生の自由で、自分たちで申請したあと、個人で先生を探して指導を受ける。それに関しては、両学院が同じである。そして、指導を求められたら、ほとんどの教員が熱心に指導してくれる。しかし、学生インタビューによると、コンテストの情報もほとんどは先生から個人的に知らされるため、この点に関しても、SOF の教員たちがより多くの情報を持っているようである。

3.4.5 卒業後の進路

進路から見ると、SOF も SIC も、中国国内で就職する学生が多い。2022 年度を例に見ると、SOF ファッションデザイン学科の卒業生は 274 名で、就職率は

96%である。一方 SIC ファッションデザイン学科の卒業生は 199 名で、就職率は 92%である。注目すべきことは SIC の留学率で、学院全体 199 名の卒業生のうち 38 人が留学し、留学率は 19%である。これはファッションデザイン学科と視覚メディアデザイン学科、二つの学科を合わせた数字で、ファッションデザイン学科だけの数字は発表されていない。また、この数字はあくまでも留学した人数で、そのうちサウサンプトン大学本校に入学した人の数は更に低い。この問題に対して、サウサンプトン大学側の責任者は以下のように述べている。「サウサンプトン大学はこの留学率に対して満足していないだろうけれども、それも仕方ないことです。大学側と学生側、それぞれの考え方にずれが生じているようです。サウサンプトン大学からしてみれば、このプログラムの実行は中国の学生の留学意欲を刺激するものになると目論んでいたが、学生からしてみれば、意外とそうでもないみたいです。彼らは中国国内におけるこの 4 年間の勉強で充分満足しており、海外に行かなくても、海外留学した人たちと同じ卒業証書を貰えるので、それで充分だったのです。この価値観の差は、当初あまり予測出来ていないみたいですね。」(SIC イギリス側責任者)

この留学するかどうかの問題について、学生のインタビューでもさまざまな意見が出ている。中でも、「海外に行かなくても海外の大学と同じ卒業証書を貰えるので、だからここ SIC に来たのです。最初から留学なんかに行くつもりがなかったです。」(SIC 四年生)と言っていた人が一番多く、ほかに、「イギリスに留学するお金がなく、ここ SIC の学費を支払うだけでも家庭にとって大きな負担となっていたので、留学する余裕なんてないし、早く働きたいです。」(SIC 四年生)という意見が二番目に多かった。SIC に所属する学生のほとんどが、最初から留学するつもりはなかった。理由は金銭的な面が一番多いようである。SIC の学費は年間約 5 万円で、SOF の約 5 倍に相当する。それでも直接イギリスへ留学に行くよりはるかに安く、それが大きなアピールポイントだった。SICに通う学生は、裕福な家庭の出身者が多いのは確かだが、皆がそうというわけではない。海外への留学資金を普通に出せる家庭はまだ少ないのである。

一方 SOF の方は、留学に行く人は少なく、9 割以上の学生が就職か進学を選ぶ。就職する場合は、内部推薦もあるが、基本的には学生自身の自由である。中国の南方地方に行く学生が多く、そのほとんどが職につくことができるそうだ。進学についても、そのまま SOF の大学院に入る人が圧倒的に多いので、比較的合格しやすいのである。それ故、卒業生の進路も多くの場合スムーズに決まる。

二つの学院の進路状況を比較すると、SIC の学生で留学を選ぶ人はある程度存在するが、その大半は SOF の学生と同じように、中国国内で就職している。二つの学院の教育カリキュラムこそ異なるが、学生は同じキャンパス内で生活しているため、やはり同じような選択をする傾向がある。つまり学生の将来に対する選択は、単純な教育制度によるものではなく、生活習慣、固定観念など、様々な要素によって形成されることを意味する。

3.4.6 管理上の諸問題

SIC は新しい学院で、その管理システムも他の学院と異なり、それなりの独立性を持つ。それ故に、他の学院や大学の管理機関との交流が少ない。一方、

SOF は古くから存在する学院で、大学のほかの機関との連携もうまく取れている。中国の大学では、事務機関が大きな権限を持つ。また、大学には共産党委員会が存在し、各学院にもその支部が存在する。それに、入学時の軍事訓練と思想政治の科目が全学生にとって、必修科目となっている。これらの特徴は、サウサンプトン大学本校と異なる。SIC はサウサンプトン大学本校と同じ卒業証書を授与する必要があるため、当然ながら、中国国内で育成する学生が本校の学生と同じ環境下で教育を受ける必要性がある。しかし、例え TNHE のプログラムとはいえ、SIC はあくまでも中国の大学に付属しているため、イギリス側の教育方法を全面的に受け入れられるわけではない。そのことで、イギリス側の管理者と中国側の管理者の間で様々なトラブルが起きている。SIC の管理者にインタビューしたところ、このように述べた。

「うちの学院は管理システムが複雑で、イギリス側の管理も受けなければならないので、大連工業大学ではほぼ独立した存在です。ある程度自由に見えますが、実はいろいろ苦勞することも多い。特に学校の事務機関がうちの学院をどう扱うべきかいつもわからないことが多く、ほかの学院のように、事務作業がスムーズに進められない。また、時間割とかも異なるので、毎日授業のスタート時間と終わり時間もほかの学院と一時間ほどずれている。それによって、学校のイベントや活動に、うちの学院の学生がうまく参加出来ないことが多く、それも実に困ったことです。」(SIC 管理職員)

このように、SIC は大連工業大学内部では半独立の状態、大学の事務機関やほかの学院などとうまく連携を取れてないことがよくわかる。しかし、これ以上に困っているのは、イギリス側の管理方法が中国側の考え方と異なることで衝突が起きるということである。SIC のもう一人の管理者が次の事例などを紹介してくれた。

「最初のころ、入学した学生はレベルが低く、学院の管理も大変混乱していたので、サウサンプトン側がかなり怒りを覚えたようで、卒業証書に【中国キャンパス】の文字を印刷すると言い出したのです。理由はうちの学院で卒業する学生がサウサンプトン大学本校の学生と学力の差が大きいと考えられるので、同じ卒業証書を発行できないとのことでした。それは私たちとしても当然受け入れられないことで、もしそんな文字が印刷されたら、卒業証書の価値が大きく下がるので、学生も親たちもきっと大騒ぎになります。それに、もしそんなことをしたら、次年度の学生募集にも大きく影響します。当時、このことが大騒ぎになって、学校の責任者たちが何度も中国教育部とイギリス大使館に足を運んで、何とかこれを無事に解決しました。これだけではありません。当時、成績評価システムを巡っても、大きな事件が起きたのです。うちの場合、学生の成績がこちらで決まったあと、まとめてイギリス本国に送り、イギリスの審査システムで再評価する必要があります。しかし、その期間が非常に長く、時には2か月以上かかる場合もあります。その間、こちらではもうすでに新学期を迎え、授業などもスタートしています。なのに、イギリス側から送られた成績の中で、追加の留年者が出たことがあります。その追加された留年者たちは、その時すでに上の学年に進学していて、授業も一緒に受けていました。それなのに、いきなり今から留年ですと伝えられて、それは大変ショックを受けました。その子たちの親御さんも学校に押しかけてきて抗議したのです。その時も責任者たちが対応に追われ、大変だったのです。」(SIC 管理職員)

このような事件や衝突など、SIC 設立当初から多く起きている。特に教育理念や教育スタイルなどにおける隔たりが大きい。例えば、思想政治の科目は、イギリスの大学からみて不必要な授業で、削除すべきだと提案した。しかし、それは中国の大学にとって重要な科目であるため、実現出来なかった。時間割に関しても、ほかの学院の授業スタート時間は朝 8 時からだが、外国人の先生たちが、それは早いと感じており、最終的に SIC では 9 時から授業を始めることにした。また、大連工業大学では朝の自習時間と夜の自習時間というものがある。特に夜の自習時間というのは大変長く、3 時間以上教室にいないといけない。このような習慣もサウサンプトン大学からの提案で、SIC の自習時間が短縮された。施設に関しても、サウサンプトン大学からの意見で、学院のキャンパス内でカフェテリアを設置することになった。それもほかの学院からみて、考えられないことである。もちろん、これらの提案は学生からは歓迎されていて、評判は大変良かった。しかし、学校内では、SIC の学生だけ特別扱いされるといふ噂が広まり、ほかの学院からますます疎遠になってしまうのも事実である。学生からも「自分たちが SIC の学生だと自己紹介すると、ほかの学院の学生から異様な目で見られている感じがする。うまく言えないけれど、この大学では、私たちの存在が何か特別で、とにかくほかの学院と一緒にではないような雰囲気があります。」(SIC 三年生)という見解が出ている。

一方 SOF では、SIC と違って、学校内の連携はスムーズにすることができる。管理上の混乱も存在しないため、安定した状況で運営することが出来ている。また、SOF は大きな学院で、ファッションデザイン以外にも、化粧、撮影、ファッションモデルなどの学科も存在する。これらの学科がファッションデザイン学科と連携を取り、より大きな作業や仕事を行うことができる。それは SIC より遥かに有利なところである。SIC はファッションデザインと視覚メディアデザインという二つの学科しか存在せず、互いにサポートすることも出来ない。インタビューでは、SOF の学生が以下のように述べている。

「私たちの学院には、ファッションモデル、化粧などの学科があるから、そこに友達を作れば、自分の作品をすぐ実際に着させることができる。それに、全ての学科が連携すれば、ミニファッションショーも開催することができる。それは本当に便利なことで、特に自分がデザインした服は、モデルさんが実際に着てくれると、何だかすごく嬉しいし、自信にも繋がります。こういうところが本当に我々 SOF の強みだなと感じますね。」(SOF 四年生)

一方、SIC の学生は、このことに対して、肯定的なコメントを残した。

「モデルとかに関しては、SOF の学生が本当に得していますね。私たちの学院にはそういう学科がないから、ショーとかやる時、自分たちでお金を使って外からアルバイトのモデルさんを雇う必要があります。たまには SOF ファッションモデル学科の学生さんに手伝って貰うこともあります。SOF と同じコンテストに出る場合、当然向こう優先になるからね。本当に羨ましいです。」(SIC 三年生)

このように、SOF は比較的安定した運営で、それに各学科同士がお互いサポートすることもできるため、総合的な実力が高いと言える。そのほか、SOF には、ジュエリーデザインなどの授業も設置されているため、ファッションを中心に、幅広い分野で研究が展開されている。また、2022 年ファッション博物館もキャンパス内で建てられた。専攻設置や管理状況などの面から見ると、SOF

はSICよりも有利な面がある。SICは今後乗り越えなければならない問題が多く存在する。この点に関して、SICの責任者の一人がこのように述べている。

「SICの運営上における問題点の多くは、やはりプログラムをスタートする当初からの研究不足によります。このプログラムは2012年正式に調印したのですが、その年の夏からもう第一期生を募集したのです。正直、少し早すぎるような気がしました。明らかに準備不足なところがありました。何の下準備もしていない状態でいきなりスタートを切ったので、問題が発生するのは当然といえば当然です。ここ数年間に及ぶ試行錯誤により、徐々に成熟したものにはなっていますが、まだまだ問題点が多いような気がします。これらの問題を解決するためには、中英両国の責任者、管理者、教員などが一致団結して、より連携を深め、共同で立ち向かう必要がありますね。」(SIC中国側責任者)

このようなことから見ると、TNHEは学内連携が弱いと言える。TNHEを当該国に導入する場合、学生の選抜、教員の安定性、学内における内部交流など、その全てにおいて現地の文化と事情と密接な関係を持っている(Dai, Lingard, & Reyes, 2018)。この問題について、今回の調査対象である大連工業大学SICの中英双方の責任者がそれぞれ以下のような見解を示している。

「我々は学院の仕事を五つの段階に分けています。第一段階は、相手の完全コピー、つまりイギリス側のやり方をまず全般的に受け入れる。第二段階は、本土の教育と融合し、応用していく。第三段階は、全ての問題点を反省し、改革を行う。第四段階は、より質の高い教育水準を求め、進化する。第五段階は、より大きな視点から、国家発展の戦略に対応していく。現時点では、その第一、第二段階を終えたところで、第三、第四段階に突入している最中です。最初の二つの段階というのは一番難しい時期ですね。今中国で展開されているTNHEプログラムのほとんどがこの第一、第二段階で難しい局面を迎えています。それはつまり、最初受け入れる時、十分な下準備をせず、お互いあまり深く理解しないまま、プログラムをスタートさせたことですね。結局スタートしてから様々な問題が露呈し、その対応に追われるのです。その段階では、我々も相手も結局期待した成果を上げることが出来ず、がっかりすることばかりです。それに、学生が一番かわいそうですね。様々な問題によって、教育の質も当然下がるので、その時期の卒業生は今と比べると、大分損しているような気がします。」(SIC中国側責任者)

「イギリス側が少し中国任せなところがありますね。現地での調査があまり十分とは言えません。現在のところ、予期した目標に達成出来ていないのは、この初期段階による失敗が原因だと言えます。中国には複雑な国事情があって、安易に富裕層をターゲットにして、欧米式の教育を輸出するという考え方が間違っていますね。プログラム開始前に、もう少し深く調査していれば、よりスムーズな運営が出来ていたはずです。」(SICイギリス側責任者)

このように、TNHEの提供国にとって、TNHEの受け入れ国の現地事情を事前に把握しないと、期待通りの成果を得られない。しかし、一般企業の海外進出と違って、TNHEプログラムの場合、提供国の教育機関は国内にある本校と同じ効力の学位を出す必要があるため、出来るだけ国内と同じ教育条件で学生を育成したくなる。簡単な妥協が難しいため、現地教育機関との間で意見の違いが生じやすくなると考えられる。教育において、文化や教育制度の違いによって、「対等」の関係になることが難しい(Dai, Matthews & Reyes, 2020)。TNHE

は、より現地の文化に根差したプログラム作りが大事である。しかし、教育文化の差は簡単に埋められるものではないため、この問題は今後の TNHE にとって、依然として課題である。

3.4.7 まとめ

データ分析によって作り上げたカテゴリーを、SIC と SOF で比較すると、以下の表でまとめることが出来る(表 3-5 を参照)。

表 3-5 SIC と SOF の比較表

カテゴリー	SIC	SOF
教育スタイル	発想力を重視。 デザイナーを育てる教育。	技術を重視。 就職を意識した教育。
最先端ファッションへの意識	意識が比較的高い。 教員からの情報提供が多い。 接触する機会が多い。 ネット環境が開放的であるため、触れる手段が多い。	意識が比較的に薄い。 教員からの情報提供が少ない。 接触する機会が少ない。 ネット環境が閉鎖的であるため、触れる手段が少ない。
教員構成	半分が中国国籍で、残り半分は多国籍である。 ほとんどが非常勤職員。 教員の流動性が高い。	全ての教員が中国国籍である。 全員が正規雇用者。 教員の流動性がほとんどない。
コンテストへの参加	一般的な参加回数である。 学院に関連専攻が少ないため、受けられるサポートが少ない。 金銭的負担が少ない。	一般的な参加回数である。 学院に関連専攻が多いため、受けられるサポートが多い。 金銭的負担が大きい。
卒業後の進路	三分の二が国内で就職する。 一部留学する人がおり、イギリスの大学院への進学が多い。	ほとんど国内で就職する。 留学する人がほとんどおらず、大学院への進学は国内が多い。
管理スタイル	校内の事務機関とうまく連携を取れていない。 イギリスのスタイルで管理されている。 トラブルが多い。	校内の事務機関とうまく連携を取れている。 中国伝統的なスタイルで管理されている。 トラブルが少ない。

教育スタイルに関して、SOF は実技を重視し、学生の就職を支援することを目的としている。一方、SIC は、学生の発想力を重視し、デザイナー育成を目的としている。教育スタイルが異なることで、ファッションへの意識も、両学

院の間で差異が生じている。SOF は比較的閉鎖的で、最先端のファッション情報にもあまり敏感ではなく、学生がそういう情報を手に入れる手段も少ないことに対して、SIC の方は、外との繋がりがある程度自由で、最先端の流行にも触れる機会が多い。特にネット環境に関しては、SIC の方が SOF よりも自由である。教員構成から見ると、SOF の教員は全て大連工業大学の正規雇用者であることに対して、SIC の方は、外国籍の教員のほとんどがサウサンプトン大学の臨時雇用者で、国籍もばらばらで、流動性も高い。このため、SOF 学院は比較的一貫性のある教育を施すことができるが、SIC の方はそれが難しい。コンテストへの参加機会に関して、SOF も SIC も同等な機会を得られるが、準備期間や関連サポートの面から見て、SOF の方がより有利であることがわかる。卒業後の進路を見ると、SOF の学生のほとんどが国内で就職し、一部の学生が国内の大学院へ進学している。SIC の方は、イギリスへ留学する学生もいるが、半分以上の学生は SOF の学生と同様、国内で就職するか、国内の大学院へ進学している。管理の上でも、両学院はそれぞれ異なるスタイルを取っている。SOF は大連工業大学の古くから存在する学院で、大学のほかの機関との連携もうまく取れている。一方、SIC の方は、イギリスの教育スタイルで管理しているため、大学側との連携がうまくいかない時がある。この管理上の違いで、二つの学院の発展にも大きな影響を与えている。表 3-5 はそれを簡単に整理したものである。

3.5 結論

本論文は、ファッションデザインをテーマに、質的調査法を用いて、TNHE の提供国と受け入れ国の教育状況を比較分析して、その違いが教育現場においてどのように反映されているかを考察した。今回の調査は TNHE の研究における不足している分野に、ある特定の事案を提示した。研究結果が示したように、TNHE の提供国と受け入れ国の教育方針と教育制度が異なるため、たとえ同じキャンパス内における同じ専攻でも、育成した学生の特徴が大きく異なる。例えば今回の研究対象であるファッションデザイン学科において、TNHE プログラムの教育手法は学生の発想力を重視し、デザイナー向けの人材を育成することを目的とする。一方、中国本土の教育の手法は技術を重視し、職人むけの人材を育成することを目的とする。また、トランスナショナル高等教育プログラムに所属する学生は、世界からの情報に触れる機会が多く、中国本土の学部に所属する学生は、それに触れる機会が少ない。更に、今回の調査で取り上げたファッションデザインのような欧米発祥の分野でも、現地の社会状況と教育制度を無視すると、期待する効果を得られないことも明らかになった。TNHE の受け入れ国が TNHE プログラムを導入した目標は自国教育のレベル向上であるが(Yang, 2008)、実施中に、国の目標と大きなずれが生じることである。しかし、これらの問題も従来の連携体制を見直し、修正を加えることで大幅な進展が期待できる。

今後 TNHE は、国際教育の研究範囲の拡大に貢献するものとして発展していくことは明確である。今回の研究結果が示したように、芸術デザイン分野における TNHE の重要性和課題は同時に存在する。芸術デザイン分野では文化や感性が非常に重要であり、TNHE を通じて異なる文化背景の知識や技法を学ぶこ

とで、学生たちはより幅広い視野と創造性を身につけることができる。しかし、その一方で、文化の違いや教育制度の相違による問題を克服する必要がある。今後、TNHE を芸術デザイン分野で更に発展させるためには、まず、提供国と受け入れ国の双方が互いの文化や教育制度を深く理解することが必要である。これにより、教育プログラムをより現地の事情に合わせたものにすることができ、学生たちがより効果的に学ぶことができる。以上のように、芸術デザイン分野における TNHE は、大きな可能性を秘めているが、多くの課題も抱えている。これらの課題を克服することで、TNHE は芸術教育の質を向上させ、国際的な芸術人材の育成に貢献することができる。

今後の TNHE の発展においては、教育の質向上、文化交流の促進、市場化と教育本質のバランス維持など、様々な課題が待ち受けている。これらの課題に対して、各国の教育関係者が協力し、共同で解決策を模索することが必要である。こうした取り組みにより、TNHE は真に国際的な教育の発展に貢献する存在となることが期待される。本論文の調査結果から見えてきた課題について、各国の教育機関が今後、TNHE プログラムを設定する上で、良い示唆となることを期待する。

第 4 章

芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の創造性

4.1 研究概要

OECD の調査の推計によれば、将来 OECD 圏域の仕事の 14%は完全に自動化される可能性があり、更に 32%の仕事が大きく変化する可能性がある (OECD, 2019)。従って、将来社会にとって、人材に求められる能力として創造性は一層重要となる。予測によると、アメリカや西欧で創造性に対する要求がそれぞれ 40%と 30%上昇する (Bughin, J., E. Hazan, S. Lund, P. Dahlstrom, A. Wiesinger & A. Subramaniam, 2018)。OECD の加盟国のカリキュラムのほとんどに、期待される学習成果として何らかのかたちで創造性が含まれている。教育におけるその重要性は今や世界の共通認識である (OECD, 2023)。従って、創造性を作り出す教育が今世界中で展開されている。創造性というのは、「これまで存在しなかった新たなものを生み出すことである」という解釈がある (Hausman 1979, p. 239)。この特徴は、明示的か暗示的かを問わず、創造性のほぼ全ての定義に含まれている (Torrance, 1988, p. 43; Barron, 1995; Liep, 2001)。創造性とトランスナショナル高等教育 (本章では、以降 TNHE と表記) の関係性について、明確に定義した研究資料はまだ見つかっていない。しかし、創造性の豊かさ、複雑さは、心理・社会・文化的現象に根ざしているとう指摘がある (Glăveanu, 2010)。従って、複数の国から文化的影響を受けながら行う TNHE は、学生の人間性と創造性に刺激を与えることが考えられる。

TNHE の目的は、学習者が空間的移動をしなくても、海外の一流大学から教育を受けられることである。その代わりに、学習者が二つの国の文化を受けながら教育を受けることになる。一方、創造性を領域一般的な方法によって概念レベルで説明できるとしても、実践においてはまだ領域特殊的である。つまり、創造性を育成する過程において、分野や環境によって様子も異なり、たとえ、ある分野や環境においてすごく創造的であっても、それらのスキルが他の領域へ移転できるわけではない (Detterman, D. K. & R. J. Sternberg (eds.), 1993) (Bransford, J. D. & D. L. Schwartz., 1999)。分野や環境が異なれば、異なる活動が必要になる。また、創造性というのは、芸術を介してしか開花しないという信念が古くから存在し、芸術デザインのような視覚芸術教育は、意図的に創造性を生み出す教育だと認識されている (Winner, E., T. R. Goldstein & S. Vincent-Lancrin., 2013)。Dai (2018) の研究によれば、TNHE は学生に異なる学術環境を提供することによって、ある文化的に中間な学習空間を作り出し、学生の思考も文化を跨る特殊な状況になる (Kun Dai., 2018)。以上のことから、芸術デザイン分野の TNHE 自体は、創造性教育の特徴が表れ、学生の創造性を育成する方法も従来の創造性教育とは異なる様子を呈すると考えられる。教育環境において創造的であることは、知識と解決方法に対する理解を深め、より深い学習を迫及することにつながる。創造性を育成することは、実際には、学生の学習を向上させ、ある領域の専門知識を獲得させることである。従って、ある特殊な教育環境が現れた場合、そこにおける学生が創造性をいかに捉えているかを理解することが必要である。本研究は、芸術デザイン分野の TNHE プログラムを例に、質的研究法を使い、TNHE における創造性啓発について考察する。

4.2 研究デザイン

本研究では、Merriam(2004)による質的調査法の本質性に従い、芸術デザイン分野における TNHE プログラムのケーススタディである。質的調査とは、人々の感情や経験、価値観など、数値化が難しい情報を収集・分析する研究手法である。ケーススタディは教育的な革新を研究し、プログラムを評価し、政策を伝達する上で、特に有効である。

本研究では、イギリス式教育、中国式教育、トランスナショナル高等教育という三つの教育形式が関わってくる。ここで、まずこの三つの教育について簡単に紹介する。

イギリスの高等教育は、学部が通常 3 年間コースで、4 年間コースもある。大学院では、修士課程が 1～2 年、博士課程が 3 年からとなっている。階級社会のイギリスにおいて、20 世紀から、その教育政策の主要目的が階級による進学格差を解消することがあった。その教育手法は、学生が知識や技術を習得し、自由な発想を持って最大限の能力を発揮できるようサポートする。イギリスの教育機関は、政府や教育団体が定めた厳しい基準を満たしているため、質の高い教育と充実した設備の恩恵を受けることができる。また、イギリス社会は多文化、他宗教であるため、教育現場も多文化になっている。学生が常に多言語多文化の環境下で学習していることも、イギリス高等教育の特徴の一つである（杉本均・南部広孝，2019）。

中国の高等教育は、学部が通常 4 年間コースで、5 年間コースもある。また、2～3 年の専科大学や職業学院も存在する。大学院では、修士課程が 2～3 年、博士課程が 3 年からとなっている。中国の高等教育は、1990 年代に入ると、「科教興国」戦略が打ち出されてた。これは、科学技術と教育を経済的、社会的発展の重要な位置に据えて、全民族の科学技術的素養を高め、国の発展をいち早く実現させようという考え方である。この戦略で特に強調されるようになったのが「素質教育」である（杉本均・南部広孝，2019）。これは、創造的精神と実践的能力の育成に重点をおいて、道徳、知能、体育、美德など全面的に発達した人間を育てる教育であり、今日まで中国教育の目的を示す基本軸となっている。中国の高等教育は、国の方針を忠実に従う必要があるため、各高等教育機関の教育手法も国が定められた基準で行う必要がある。そのため、同じ考え方や統一された思想を持つ人間を育成することが中国高等教育の大きな特徴である。

TNHE は 1980 年代後半にはオーストラリアなどの一部の国で展開されているが、それが本格的に拡大したのは高等教育の国際化が進展した 2000 年代であった（MeBurnie, G. & Ziguras C., 2003）。TNHE のメリットは、学生が海外に渡航しなくても海外の一流大学の教育を受けられることである。従って、高等教育機関にとっての利点は、自国に留学生を呼び込む必要がないため、海外留学にかかる負担を賄いきれない学生にも比較的安価でプログラムを提供でき、大学にとっては一定の収益が期待できることになる。また、こうしたプログラムは、高等教育を受ける機会を増やしたり、教育の内容を多様化したりすることにつながる。また、学生からすれば、時間や費用をあまりかけずに外国の学位を得ることができるメリットがある。その反面、教育機関がもともと所在する国の基準や教育が提供される国の基準が外国の機関（分校）やプログ

ラムに必ず適用されるというわけではないので、教育や学位、資格の質が必ずしも保証、維持されないおそれもある。

本研究は、中国とイギリスの大学の間で実施している TNHE プログラム(大連工業大学サウサンプトン国際学院 Southampton International College 以下 SIC)を例に TNHE における創造性を明らかにする。特に、二つの国の文化的影響を受けながら、学生の創造性をいかにして育成されるのかについて検証する。本研究では次の三つの点に注目して研究の具体的な問いを立てていく。

第一に、本研究では「授業方法」というキーワードについて注目している。TNHE プログラムに所属している学生は、高校まで中国の教育制度の下で、ローカル式教育を受けてきた。その彼らが、TNHE プログラムに入ると、いきなり異なる言語で異なるカリキュラムの下で育成されるので、その教育方法や教育理念が学生に与える影響の違いについて明らかにする必要がある。

第二に、本研究では、「文化」というキーワードに注目している。今まで本土の文化の影響を受けながら育った学生が、異なる文化背景を持つ教員から授業を受けるため、そこで起きる文化的衝突は容易に想像できる。その衝突によって、学生の自国文化に対する意識が目覚める可能性もある。芸術デザイン教育は、元々学生の創造力を作り出す教育でもある。その創造力を生み出す源泉が、学生の文化的背景や生活環境である。従って、芸術デザイン分野の TNHE における文化的差異によって、学生の創造性教育にどのような影響を与えているのか、その実態を議論する必要がある。

第三に、本研究では、「啓発」というキーワードについて注目している。現代教育において、学生の創造性を啓発する手法はたくさんある。TNHE プログラムにおいて、学生が今まで受けてきた本土教育とは異なる方法で、創造性を引き出されていると考えられる。それは芸術デザイン分野の TNHE プログラムの存在意義とも言える。従って、その実態を明らかにする必要がある。

教育における質的研究は、人々がその社会的世界と相互作用しあうことによって構築してきた意味を理解することを意図している (Merriam, 2004)。本研究で検証する TNHE の創造性、という事象の解釈は多元的であり、そこに在籍する学生それぞれの経験や背景、彼ら自身のアイデンティティのあり方などによって色づけられるものである。そのため、それらの学生の声に耳を傾け、学生の行動や行為についての詳細な聞き取り調査を行うことにより、TNHE における創造性の啓発を明らかにする。

4.2.1 創造性の構成要素

Lubert (1994)によれば、複合した要因により創造性が導かれるという視点から、その構成要素を知能、知識、思考スタイル、個性、動機、環境の6つに分類した。

知能は、創造性において最も重要な要素の一つである。これには高度な段階に関連するものと基本的な段階に関連するものが含まれ、さらに領域全体に共通するものや特定の領域・課題に特有なものとして存在している。高度な段階におけるものは、問題の発見や定義、表現、解決戦略の選択、評価など、問題解決に不可欠な能力と考えられている。一方、基本的な段階では洞察力と拡散的思考が挙げられる。洞察力には新しい情報の認知、異なる情報の比較や結びつきの発見、情報の統合が含まれる。また、拡散的思考は問題解決における戦

略選択時に有効で、可能な選択肢を探索する手段となる。

知識は、図書の中で公式に見つかるものと、専門家が持つ非公式なものがある。創造性における知識の重要性は、問題の認識や性質の理解、先人のアイディアに留まらない発見、常識的な考えから新しい思考を生み出す源となり、高度な成果を支える助けとなり、新たなアイディアの発見を後押しする点にある。芸術デザイン教育において、知識は様々なアートデザインの技法やスタイル、文化的背景、歴史的な作品などを含み、学生が独自のデザインを創り出すための基盤となる。

思考スタイルは、認知と個性の間に位置し、相互に影響を及ぼすものである。また、知能や知識を問題解決に活用するための効果的な方法でもある。

個性は、知覚を効果的に機能させ、ふわふわしたアイディアを現実に変える手助けをするものである。個性の影響としては、不安や苦しみに対する耐性、忍耐力、新しい経験を受容する意思、リスクを取る決意、自身の信条や感情を貫く勇気などがある。

動機は、創造的な目的のために知覚を誘導する力となるものだ。一般的に、内在的な動機は創造性に対して有益であり、外在的な動機はマイナスの影響を与えるとされている。

環境は、身体的状態や社会的条件を改善し、新しいアイディアを生み出し成長させる役割がある。

4.2.2 調査方法

本インタビューは大連工業大学サウサンプトン国際学院(SIC)のメディアデザイン学科とファッションデザイン学科に所属するそれぞれ12名の学生に対して行ったものである。インタビュー候補者決定後の連絡は、主にSNSのメッセージやEメール、電話を使い、事前に本研究の趣旨や個人情報の取り扱いについて説明を行った。そして、全員に十分な時間を与え、同意書を読ませて、最後同意書にサインして貰った。場所は全て大学内の教室で行われた。時間は30-40分程度である。データの内容については全て本人の了解を得た上で引用を行っており、インタビュー中に話された、特に個人的な内容を述べた部分、本人が公開を望まなかった部分については録音、書き起こしなどは行っていない。最後に、個人情報の取り扱いには十分な配慮を心がけた。研究の目的上、情報提供者の出身地や現在までの学習・教育環境に触れざるを得なかったが、固有名詞をあげることは必要最低限に抑え、個人の特定に繋がらないように細心の注意を払っている。

表 4-1：インタビューリスト②

回答者番号	性別	所属	学年	インタビュー時間
1	男	メディアデザイン	3	31 分
2	男	メディアデザイン	3	24 分
3	女	メディアデザイン	3	34 分
4	男	メディアデザイン	3	30 分
5	女	メディアデザイン	3	29 分
6	女	メディアデザイン	3	24 分
7	男	メディアデザイン	4	30 分
8	女	メディアデザイン	4	33 分
9	女	メディアデザイン	4	35 分
10	女	メディアデザイン	4	40 分
11	女	メディアデザイン	4	33 分
12	男	メディアデザイン	4	28 分
13	女	ファッションデザイン	3	29 分
14	女	ファッションデザイン	3	25 分
15	女	ファッションデザイン	3	28 分
16	女	ファッションデザイン	3	31 分
17	男	ファッションデザイン	3	33 分
18	男	ファッションデザイン	3	34 分
19	女	ファッションデザイン	4	27 分
20	女	ファッションデザイン	4	33 分
21	女	ファッションデザイン	4	29 分
22	男	ファッションデザイン	4	30 分
23	女	ファッションデザイン	4	30 分
24	男	ファッションデザイン	4	29 分

今回のインタビューは 2024 年 3 月～8 月にかけて行われた。本インタビュー調査は、半構造化インタビューを基本としている。状況によっては、非構造化・インフォーマルな形式の質問も並行し、インフォーマルな質問は特にインタビュー調査の最初の段階で、引き続き行われるインタビューの質問を定型化するためにも行った。また、調査協力者の学生の経験や考えは非常に多様であり、こちらが想定していなかった回答や経験に触れることも多かったため、会話の流れの中でより柔軟な質問を行うことを心掛けた。実際のインタビューを始めるにあたっては、本研究の要旨とデータの扱い、プライバシーの保護やレコーダー使用の可否などについて口頭で伝えると共に、代表的な質問を含めたガイドラインを手渡した。

表 4-2：学生への質問表

1. 学生の背景及び TNHE プログラムについて ・ 出身地など ・ 高校までの英語力はどうだったか ・ TNHE プログラムを選んだ理由は何か ・ TNHE プログラムの質についてどう思うか ・ そのた TNHE プログラムについて満足していること、不満、問題点、メリットとデメリットなど 2. 授業関係 ・ カリキュラムの内容について ・ 授業中、学生間、学生と教員のインターアクションはどのように行われているのか ・ 授業で先生たちがどういう手法を使っていたか ・ 何か特別な授業方法があったかどうか ・ 一番印象に残った授業は何か 3. キャンパスライフについて ・ 授業以外の時間をどういう風に過ごすか ・ 人間関係はどうだったか(クラスメイト、ルームメイト、サークル活動) ・ プライベートの時間で先生たちとの交流はあるか ・ サークルや生徒会に参加しているかどうか 4. 異文化理解 ・ 文化的衝突があったかどうか ・ イギリス式の教育(文化も含め)について理解しているのか ・ 中国식教育(文化も含め)とイギリス式教育(文化も含め)を比較したことがあったかどうか 5. 創造性について ・ SIC での勉強は、自分の創造性を上昇させたと思うかどうか(もし思うなら、どのような点でそう思うのか) ・ 普段の勉強や生活において、自分の創造性を上昇させた出来事があったかどうか 6. その他 ・ 英語のスキルをどのように使用しているか(コミュニケーション、学習目的、就職活動) ・ 留学に行きたいかどうか ・ 留学に行かないなら、どんな仕事に就きたいか ・ 進学する意欲があるかどうか ・ 在学中恋愛したかどうか ・ イギリスまたはサウサンプトン大学に行ってみたいかどうか

4.2.3 研究対象の紹介

2011 年大連工業大学がイギリスのサウサンプトン大学と共同で TNHE プログラムを実施し、メディアデザインとファッションデザインという二つの学科を設置した。メディアデザイン学科の教育目的は、メディアデザインの基礎知識、専門用語の知識、学術英語能力を掌握し、ブランドデザイン、広告デザイン、デジタルメディアデザイン、デザインマネジメントなどの技能を備えることである。一方、ファッションデザイン学科の教育目的は、ファッションデザインの理論知識、専門用語の知識、学術英語を学び、ファッションデザイン、アクセサリーデザイン、シルエットデザイン、生地開発、ブランドマネジメントなどの技能を備えることである。サウサンプトン大学はイングランド南部の町サウサンプトンに本部を置くイギリスの国立大学である。1862 年に設立されたハートリー学会がその前身であり、イギリスの大規模研究型大学グループ、ラッセルグループに所属。サウス・イースト・イングランドで最大の研究主導型大学である。SIC の二つの学科は 2012 年 9 月から第一期生を迎え、2022 年現在、約 800 名の学生が所属している。

4.3 データ分析

本節では、SIC のメディアデザイン学科とファッションデザイン学科に在籍する学生の特徴や教育の実態について概観しつつ、創造性教育というキーワードに焦点を当て、インタビューをもとにした分析を行う。

本研究はグラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を使い、コーディングを実施する。手順は次の通りである。①コード作成：録音した音声データから書き起こしたテキストを詳細に読み込み、主要質問項目への回答やそれに関連する発言を抜き出し、意味単位ごとに整理した。各意味単位には内容を簡潔に要約したラベルを設定した。②グループ分け：まず、作成したラベルを分類し、内容が近いラベル同士を集めて小さなグループを形成した。その後、さらに類似性のある小グループ同士を統合して大きなグループを作り上げた。小グループは「下位概念」、大グループは「カテゴリー」と定義し、それぞれの主張を簡潔に示す名称を付与した。カテゴリーの方が下位概念よりも抽象的な位置付けとし、上位に配置されるものとした。ただし、グループ分けの過程でどのカテゴリーにも属さず、事例の説明において抽象度が高く解釈が困難なラベルについては以降の解析対象から除外した。③図式化：カテゴリー間の意味関係を考慮しながら空間的に配置し、グループ間を関連線で結び、複数のグループを枠で囲みその内容を短い文章で表現する作業を行った。この際、各カテゴリー内のサブカテゴリーやラベル、そしてそれらが生成されたテキスト内容を参考に進められた。「トランスナショナル高等教育が学生の創造性を引き出す」現象の仕組みを視覚的に明確に伝えるため、他のカテゴリーと関連線で結ばないカテゴリーおよびサブカテゴリーは図式に含めなかった。④文章化：図式に基づき、各事例における「トランスナショナル高等教育が学生の創造性を引き出す」現象の解釈を文章としてまとめた。その結果、主要質問項目への回答やそれに付随する発言から 124 のラベルが生成され、そこから 13 の下位概念が導かれ、最終的に 5 つのカテゴリーに整理された。

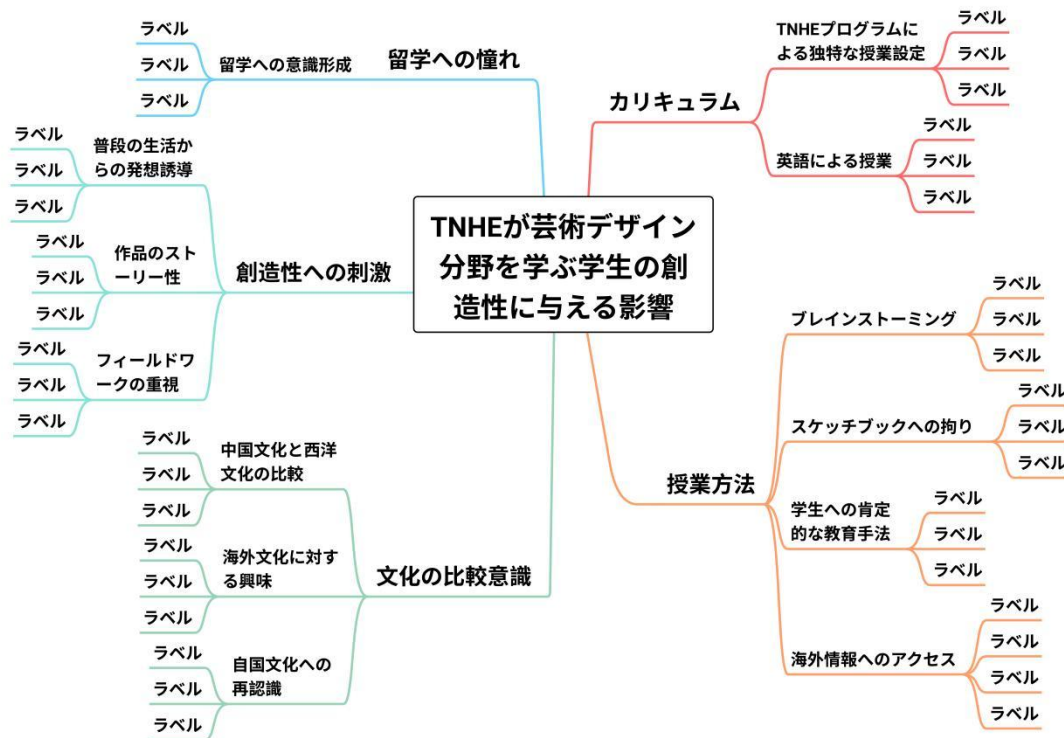


図 4-1 カテゴリ統合の導入流れ（著者が作成）

引用の際に、なるべくインタビューの言葉を変えずに引用を行い、話の一貫性や個人情報保護の観点から発言を略した部分には（中略）の印を付けた。会話特有の倒置などを多用して話している場合は、わかりやすくするために内容や流れを変えない範囲で言葉の順番を入れ替え、引用部分のなかで主語が明確でない場合などにはカッコのなかに補足を行った。中国語で行ったインタビューに関しては、もとの語彙や文脈をなるべくそのまま伝えられるように細心の注意を払った。特に、中国語会話における砕けた表現、特徴的な言い回しなどは直訳的な日本語で表現している。

4.3.1 カリキュラム

SIC のカリキュラムは、イギリスサウサンプトン大学のカリキュラムに従って設置されている。英語の授業と中国の大学に特有の政治教育の授業以外、ほぼサウサンプトン大学本校と同じである。今回の調査では、この「カリキュラム」というカテゴリーは、【独特な授業設定】と【英語による授業】、二つの下位概念から構成されている。

独特な授業設定

授業設定について、SIC には TNHE 特有のカリキュラムが存在する。それについて質問すると、学生の中から以下のような答えが出ている。

「ここのカリキュラムは全部イギリス式で、中国のカリキュラムとは大分違います。私は中国の大学で同じ専攻を学んでいる友達に聞いてみたことがあります。

す。かなりの違いが存在していることが判明しました。(中略)先生たちが一方的に知識を伝える中国式の教育より、我々に考えさせてくれるイギリス式の教育が自分に合ってるような気がします。」(回答者番号 2)

「うちの学院のカリキュラムは結構ユニークで、高校まで受けてきた授業のカリキュラムとは大分違いますね。授業によって、中国人の先生と外国人の先生が一緒になってやるので、それがすごく面白かったです。今まで英語以外で外国人の先生の授業を受けたことがないから、とても新鮮でした。」(回答者番号 13)

「英語による授業が多いし、授業のカリキュラムも中国の大学と大分違うので、留学ではないのに、まるで留学している感覚です。特にいかにも西洋の大学らしい授業科目とか見た時、自分がトランスナショナル教育の学院に所属している実感が沸きますね。(中略)西洋のそういう全員参加型の授業スタイルはすごく好きです。」(回答者番号 4)

学生からの回答でもわかるように、SIC のカリキュラム設定が中国の大学とは大分異なる。前章の表 3-4 を見てもわかるように、SIC の科目は服飾学院と比べて、創造性を刺激する科目が設置されている。SIC のカリキュラムは、学生参加型の授業が多く、科目について深い思考を刺激することを目的とする。情報の積極的で有意義な処理は学習の最大の味方であり、内容知識を重視することは高次の思考スキルを重視する姿勢と矛盾しない (Beghetto, R., J. Baer, & J. Kaufman, 2015)。従って、創造的な思考過程に学生を関与させる授業計画と教室活動は、内容知識と手続き的知識を含めて、1 つまたは複数の領域のカリキュラム内容も伝えることになる。また、SIC に所属する学生は、専門科目も英語によって行われるため、一年生、二年生のカリキュラムに英語の授業が非常に多い。

英語による授業

SIC の学生が高学年になると、学校での時間は、ほとんど英語を使って生活している。彼らにとって、英語はコミュニケーションの道具だけではなく、新しい情報を入手できる手段でもある。インタビューにおいて、英語について質問すると、以下のような回答が得られた。

「一、二年生のうち、英語の授業って本当に多かったです。でも私たちの学院は全て英語で授業するので、卒論とかも英語で書く必要があるから、英語が出来ないと卒業出来ませんから。英語の授業は大変ですが、三年生になると、大分できるようになりました。そして、英語ができると、海外の参考資料とか読めるようになるので、私にとってとても良い刺激となりました。特に私はファッションデザインを勉強しているので、海外のサイトとか読めると本当に便利です。」(回答者番号 16)

「英語の授業が多くて大変だけど、私は嫌いじゃないですよ。英語ができるようになると、先生とのコミュニケーションもスムーズになるから、授業の内容も理解できるようになります。あと、先生たちの考えていることも理解できるようになるので、異文化理解という意味で本当に便利です。」(回答者番号 17)

「四年生になると、ほぼ一日中ずっと英語を使って話していますね。特に指導教官の先生とのコミュニケーションが多いです。個人的な感覚ですが、ずっと英語を使って生活していると、自分の考え方や価値観も西洋人に近付いている

ような気がする。休み中に実家とかに帰ると、よく家族に、“あんたのその考え方、西洋的だね”って指摘されます。」(回答者番号 5)

英語の使用によって、思考方式も徐々に変わっていく傾向も見られる。人間にとって、第二言語の取得は創造性と密接な関係にあり (Carter, R. , 2004)、特に上級レベルになれば、学習者が利用可能な第二言語リソースをより創造的に用いていることが指摘されている (嶋津百代, 2016)。従って、SIC における言語環境が、学生の創造性向上に一定の影響を与えていると言える。

4.3.2 授業方法

SIC の授業は外国人教員と中国人教員の両方によって行われている。専門科目の授業は全て外国人教員によって行われている。外国人教員による授業方法は、学生たちが今まで受けてきた従来の授業方法とは異なり、学生にとって大変新鮮なものである。今回の調査では、この「授業方法」というカテゴリーは、【ブレインストーミング】、【スケッチブック】、【肯定的な教育態度】、【海外サイトへのアクセス】という四つの下位概念から構成されている。

ブレインストーミング

ブレインストーミング法は、創造的な問題解決の手法として、世界的に最も広く知られた方法である。この方法は、「多数のアイデアを生成する」および「評価を後回しにする」という二つの基本原則に基づき、「批判を禁ずる」「自由な発想を尊重する」「アイデアを改良する」「量を重視する」という四つのガイドラインに従い、集団での思考力を向上させようとするものである。このブレインストーミングを取り入れた授業の方式は、多くの学生が言及しており、これまでの授業では得られなかった新鮮な経験であった。

「授業の時、外国人の先生たちがとにかくブレインストーミングが好きで、何か新しい課題を始める時、いつもやらされていました。これがすごく面白くて、今まで経験したことのない授業内容で、すごく新鮮でした。」(回答者番号 20)

「授業ではいつもブレインストーミングをやらされています。最初は苦手だったのですが、慣れてくると、以外と面白くて、自分一人でもよくやっています。このブレインストーミングによって、自分の想像力も上がったような気がします。」(回答者番号 6)

「授業中のブレインストーミングは本当に面白くて、とにかく脳の活性化となりました。先生はいつも“より広く想像しなさい”と言うので、とにかく頑張って想像力を働かせました。時には、一滴の水から宇宙のブラックホールまで関連付けることができるので、想像力って本当に限界がないなと思いました。それが自分の作品にも大きく影響しており、作品のストーリー性がすごく豊かになりました。」(回答者番号 1)

インタビューからでもわかるように、このブレインストーミングによって、多くの学生が、「自分の想像力が上がった」、「創造性豊かな人間になった」と答えているので、創造性教育の観点から見ると、間違いなく大きなプラス要素である。Rickards (1999) によれば、このブレインストーミング方法には、創造性を向上させる点で次の四つの可能性が示されている。一、創造的な突破口を見出す力を高める。二、会議において統計的に珍しい結論を得ることと密接に関連している。三、創造的な雰囲気を生み出す方向に導く。四、創造的な

特性を育てる要因の一つである (Rickards, T., 1999)。ブレインストーミング技法は世界各国の教育現場で実施されているが、今回インタビューした学生たちにとって、新鮮な体験となっていることがわかった。

スケッチブック

スケッチブックというのは作品集みたいなもので、一番の目的は、学生に自分の作品のコンセプトをきちんと理解してもらうことである。このスケッチブックは、将来学生が留学する時も役立つのである。

「私たちの授業ではスケッチブックがすごく重要視されるので、いつもそれを頑張ってやっていました。先生曰く、作品にはストーリー性と一貫性が重要で、スケッチブックがその鍵となるって。毎週のプレゼンで、自分の作品のストーリーをみんなに説明しなければいけませんので、すごく脳を使います。(中略) このストーリーを考える作業は、ほとんど自分自身で行います。先生は最初に簡単な説明するだけで、具体的な指導はありません。」(回答者番号 8)

「スケッチブックはストーリー性が必要なもので、いつも頑張ってストーリーを考えてました。時には想像しすぎて、もはや妄想の世界に入り、最後は、自分が小説家となった気分です。」(回答者番号 14)

「私が将来サウサンプトン大学へ留学に行きたいので、スケッチブックは頑張って描いてました。欧米の大学では、このスケッチブックがすごく重要視されるので、留学したいならこれをやるしかありませんね。」(回答者番号 15)

学生の回答からでもわかるように、このスケッチブックを作成するには、ストーリー性が重要で、ストーリーを考えるという作業も創造性を育む過程の一つだと言える。これは視覚芸術教育におけるスタジオ思考とも言える。スタジオ思考の枠組みとは、4つのスタジオ構造と、質の高い思考中心の視覚芸術教室で指導される8つの心のスタジオ習慣によって構成される。4つのスタジオ構造(実演―講義、作業、批評、展示)は、時間、空間、および教員と生徒の関係の相互作用を説明する。きわめて短時間の指導(実演―講義)を経て、生徒は作業に入る。その間、教員は巡回して個々の生徒と話をする。生徒の思考を知ること、助言を与えること、疑問を投げかけることにより、生徒が自らの創造的な過程(作業)を深めるとを助ける (Beghetto, R., 2009)。このプロセスは、学生がインタビューで述べた「ストーリーを考える作業」とは類似する。

肯定的な教育態度

SICに所属する外国籍の先生たちが学生をあたまから否定することはしない。例えば学生の作品が稚拙なものであろうと、それでも何とか褒めるところを探そうとする。言語的報酬が大学生の内発的動機づけを高めることができるという研究報告がある (Deci, E. L., 1972)。従って、学生を肯定的に認めるという教育方法は、学生の学習意欲を高められることを予測できる。その延長線上、学生の創造性にもプラスの影響を及ぼす可能性が十分考えられる。インタビューの中で以下のような回答が得られた。

「外国人の先生は私たちの作品を見て、いつもまず肯定してくれます。たとえ適当にやった作品でも、最初から否定したりはしません。まず褒めてから、そのあと自分の意見を言ってきます。そうしますと、頑張っていない自分がすごく

恥ずかしく感じて、次回からもっと頑張ろうと心の中で誓ったりします。」(回答者番号 19)

「たまに頑張っていない時でも、先生が褒めてくれるので、少し申し訳ない気分になります。だから、次回からちゃんと頑張ろうって気分になります。何回か続くうちに、もう絶対課題とかきちんとやろうという気になります。そしたら、何故か新しいアイデアが次から次へと湧いてくることもあるので、自分もやればできるんだなって、少し嬉しくなりました。」(回答者番号 12)

「どんなに稚拙な作品でも、先生たちはそこから良いところを見つけ出してくれるので、すごく嬉しいです。もし最初からダメ出しされると、気持ちはきつと萎えるので、どんどんやる気を失うことになります。」(回答者番号 20)

「先生たちが自分の作品に意見を述べる前に、まずその良いところを言ってくれるので、そのあと例えきつい意見を言われても何とか耐えられます。不思議なんだけど、本当にそうなんです。」(回答者番号 4)

期待価値理論によると、人は、達成可能であり個人的に価値あるように思われる目標を追及する傾向にある (Eccles, J. & A. Wigfield, 2002)。従って、学生自身が学習目標とイノベティブな実践を追及するに当たって、教員から肯定的な評価を貰えることが重要である。創造的または批判的な思考の機会を伴う活動をうまく実施するには、学生の思い切ったアイデアの提供を暖かく受け止める環境を作り出すことが不可欠という従来の先行研究で言われていることが確認出来た (Beghetto, R., 2009)。

海外サイトへのアクセス

中国の一般大学生は、海外のネットにアクセスする時、アクセス制限がかかる。しかし、SIC の学生には、そのような制限が存在しない。これは彼らが持つ特権とも言える。

「中国の大学ではネット規制があるので、海外のサイトにアクセスするのはとても困難です。でも SIC では、海外ネットへの通信サービス (Virtual Private Network 以下 VPN) を使うことが許されるので、海外からの情報をたくさん入手出来ます。私たちのようなファッションデザインを学ぶ学生にとって、海外からの情報ってすごく貴重です。お陰でアイデアもバラエティー豊かになりました。」(回答者番号 23)

「SIC は VPN があるので、海外の情報を手に入れ易いです。その分、アイデアもすごく豊富になるような気がする。やっぱり知識が多くなればなるほど、脳が活性化しますね。そういう意味では、私たちは普通の中国の大学生より得していると言えますね。」(回答者番号 5)

「海外のネットワークと接続できるのは本当に助かります。特に発想力が鈍くなっていた時、少しネットサーフィンをすると、意外と良いアイデアが浮かんだりしますね。授業の時も、積極的にネット情報を使うことが許されるので、授業もあまり退屈に感じませんね」(回答者番号 7)

学生からの回答でもわかるように、VPN を使って海外のサイトにアクセスすることは、TNHE プログラムである SIC の特権とも言える。この点において、同じ分野を学ぶ中国の一般大学生より有利である。海外サイトへのアクセスは、情報量の増加を意味する。同時に得る知識の量も大分違ってくる。創造的思考のメカニズムを解明するために、数多くのモデルが提唱されているが、共通す

るポイントとして知識の重要性が挙げられる (Weisberg, R. W., 1999)。上でも述べたように、知識は Lubert (1994) が提唱した創造性を構成する重要な要素でもある (Lubart, T. I., 1994)。知識の増加が間違いなく学生の創造性を高めることができる。

4.3.3 文化意識

TNHE プログラムを実施する上では、文化の衝突が避けられないことである。それは、先進国の教育文化と発展途上国の教育文化の衝突とも言える。TNHE プログラムに参加する学生は、今まで自国の文化圏で教育を受け、そのあと TNHE プログラムで新しい文化の下で教育を受け、二つの文化圏からの影響を受けながら学業を進めて行く。この過程において、二つの文化が衝突しながらまた融合し、学生が一種の中間状態に陥ることがある (Kun Dai., 2018)。TNHE プログラムに所属する学生にとって、TNHE 提供国の文化に自然と興味を持つようになり、自らその文化圏に近付いていく。また、TNHE プログラムに所属する学生は、学習期間中は TNHE 提供国の文化と接触し、同時に生活する環境はまた自国の文化圏である。それによって、自然と両国の文化に対する比較意識が目覚め、自国の文化に対しても、また再認識することになる。今回の調査で「文化意識」というカテゴリーは、【海外文化に対する興味】、【中国文化と西洋文化の比較意識】、【自国文化に対する再認識】という三つの下位概念から構成されている。

海外文化に対する興味

SIC に所属する学生にとって、入学した初日からイギリスの文化と接触することになる。このイギリスの文化に対して質問すると、以下のような回答が得られた。

「SIC にいると、自然と海外の文化に対して興味を持ちますね。主にイギリスの文化だけ。自分にとっては不思議な感じです。イギリスに行ったこともないのに、イギリスの学校で今学んでいる。なんか面白いですね。」(回答者番号 10)

「今まで海外にも行ったことがないのに、いきなりイギリスの授業を受け始めて、最初は少し戸惑いますね、だからイギリスという国ってどんなところなのか、すごく興味を持ちました。いつか行ってみたいです。」(回答者番号 11)

今回インタビューを受けた学生 24 人のうち、実際イギリスに行ったことのある人一人しかいない。多くの学生にとって、イギリスの文化に触れるのは初めてで、新鮮に感じる人が多い。

また、SIC に所属する教員も世界中から来ており、多国籍である。そうすることで、学生はより多くの国の文化と触れ合うことになる。例えば、以下のように語った回答者がいる。

「私たちの先生は世界中からやってきているので、授業中に自国の文化についてたくさん話してくれます。なんか自分の世界が急に広がったような感じがしました。お陰で、世界一周旅行という夢を持つようになりました。(中略) 外国の話がたくさん聞くと、本当に良い刺激となりますね。物事に対する味方や考え方もいろいろ変わったような気がします。」(回答者番号 18)

このように、学生が異国の文化に触れると、自然と興味をもつようになり、

世界に対する理解も変わっていく。それによって、思考スタイル自体も大きく変わる。前述のように、思考スタイル自体は創造性を構成する重要な要素なので、海外文化への触れ合いは、創造性の向上にも繋ぐと言える。

中国文化と西洋文化の比較意識

SICの学生は入学してからイギリス式の教育を受けているため、逆に普通の中国大学の教育に興味を持つようになる。SICの学生の中で、以下のように語る学生がいる。

「自分はSICのファッションデザイン学科に所属しているが、大連工業大学の服飾学院にもファッションデザインという学科があるので、そっちではどんな授業をやっているのかすごく気になりますね。ずっとイギリス式の授業を受けているので、逆に中国式の授業がどうなっているのか、興味があります。」(回答者番号 15)

SICの学生の中で、敢えて中国学生が学ぶ教室まで行って、授業を傍聴する人もいる。そこから文化の比較意識に目覚めるケースも存在する。

「西洋のファッションデザインをずっと勉強しているので、それが中国独自のファッション文化とどんな違いがあるのか、ずっと気になっていました。それで、何回か服飾学院のファッションデザイン学科の授業を傍聴に行ったことがあります。なかなか面白かったですよ。」(回答者番号 13)

「西洋のファッションデザインをずっと勉強しているので、それが中国独自のファッション文化とどんな違いがあるのか、ずっと気になっていました。それで、何度かうちの大学の服飾学院ファッションデザイン学科の授業を聞きに行ったことがあります。(中略)私はよく両国のファッション文化を比較したりします。意外と面白いですよ。なんかイギリス式ファッションは西洋のモダン様式が目立つが、中国式ファッションには東洋美学の繊細さが際立つ。それを融合することによって、また新たな様式が生まれるのではないかって、ずっと一人で想像していました。自分の卒業作品には、そういうような東西融合をテーマにしたいと思います。」(回答者番号 19)

過去の研究によれば、創造性の開花の時期については、政治的に統合され平穏で伝統的かつ均質で安定した時代よりも、多様なイデオロギーが存在する動乱の時代の方が創造性が発揮されやすいとされている。(Raina, M. K., 1999)。多様な文化が共存する方が、より創造性が発揮することを意味する。SICで学ぶ学生は、常にイギリスと中国両国の文化的影響を受けるため、より創造性豊かな人間に育てられることを期待できる。これも中国がTNHEプログラムを導入した大きな目的でもある。

自国文化への再認識

SICの学生はずっとイギリス式の教育を受ける故に、逆に自国文化に対する再認識という行動も起きている。例えば、以下のように語った学生がいる。

「西洋の文化をずっと勉強していると、すごく感銘を受けると同時に、自分の国のいいところも再発見出来ますね。例えば、今まで、チャイナドレスについてあまり興味はなかったのですが、普段の授業でずっと洋服とか眺めていると、ある日突然チャイナドレスの美しさに気付いたのです。うまく言えませんが、本当に突然です。自分でも不思議に思っています。」(回答者番号 20)

「ファッションデザインはどっちかというと西洋の発祥というイメージはありますが、中国だって独自のファッションセンスと技術があります。私はこういう西洋発祥のファッション技術を勉強するのと同時に、中国独自のファッション技術も勉強したくなりました。」(回答者番号 21)

「私は将来イギリスへ留学に行きたいのですが、最終的にやはり中国へ戻って、中国独自のファッションブランドを作りたいですね。今世界的に有名なファッションブランドはほとんど欧米発祥で、アジアではもう日本のブランドだけが認められています。それがすごく悔しくて、何で中国のファッションブランドが世界のトップクラスになれないのか、ずっと考えてました。」(回答者番号 24)

このように、SIC の学生たちがイギリス式教育を受けることで、自国文化に対して新たな視点を持てるようになった。これは学生の学習意欲向上につながっており、将来、異文化をとり得た新しい創作に取り組むといった文化融合型の創造性につながりうる刺激となっていた。

4.3.4 創造性への刺激

今回のインタビュー調査において、キャンパスライフ全体を通じて、学生の創造性に対して、良い刺激となるような要素を全てまとめてみた。それを「創造性への刺激」というカテゴリを作り、【普段の生活からの発想誘導】、【作品のストーリー性】、【フィールドワーク】という三つの下位概念から構成される。

普段の生活からの発想誘導

キャンパスライフは授業だけではなく、様々な要素から構成されている。普段の生活について質問すると、以下のように語る学生がいる。

「中国人の先生って、プライベートの時間で学生と交流する人はすごく少ないので、高校までは、先生とプライベートの時間での交流はほぼありませんでした。でもここでは、外国人の先生たちは、プライベートの時間でもよく私たちと交流します。一緒に出かけたり、買い物に行ったりすることもよくあります。お陰で、先生たちとの距離感があまりなくて、何でも質問出来ます。(中略)先生たちとの交流は、私のキャンパスライフにとって、すごく重要な部分となりました。」(回答者番号 11)

「普段外国人の先生と一緒に出かける時、彼らは時々不思議なものの前で足を止めます。例えば、石ころとか、葉っぱとか、変な形の雲とか、そこからいろんなことをイメージしたりします。その姿を見て、いつも感銘を受けますね。先生たちにとって、普段の生活からデザインの閃きを探していますね。」(回答者番号 10)

「普段の生活から、デザインの閃きを探すべきと、授業で先生たちがいつも言っていました。そのやり方について、最初は理解出来ませんでした。でも、先生たちとの交流の中で、少しずつ、そのコツを掴めたような気がします。先生たちと雑談していると、よく小さな話題からすごく話が大きくなって、最終的にとんでもないスケールの話になります。それを見ていると、彼らの発想力はすごいなと感じました。芸術を学ぶ人にとって、イメージする力って大事ですからね」(回答者番号 23)

SICの外国人教員たちは、よくプライベートの時間を使って学生と交流する。これは中国人の学生にとって、とても新鮮に感じるようである。また普段の生活において、教員たちの行為が、学生の学習態度にも影響を与えているようである。

作品のストーリー性

前のカテゴリーでも触れたように、SICの学生にとって、作品のストーリー性が重要視されている。普段の授業からキャンパスライフまで、学生たちが常にそのことを意識する必要がある。

「私たちの作品にはストーリー性が求められます。ストーリー性がないと、いつも先生からダメ出しされます。でも、そのストーリー性を考えるのは本当に難しく、一つのストーリーを考え出すのに、何週間をかかる場合もあります。そのせいで、脳細胞が相当な量を失われたような気がします。」(回答者番号16)

「先生たちはいつも私たちに作品のストーリー性を求めます。私はいつもそれに苦勞します。ストーリーを考えるのは、作品を作り上げるよりもずっと難しいです。(中略)高校までの授業で、こういうものを求められたことはなかったので、本当にゼロからの作業でした。それを考える過程では、脳がすごく活性化されたような気がします。」(回答者番号2)

「作品のストーリー性を考える作業はすごく楽しいですね。自分の創造性が高められたような気がします。みんな嫌いとか言ってるけど、私は好きですよ。確かに、時間はすごくかかりますが、でも最後ストーリーが完成した時の達成感も大きいです。服をデザインした時も、そのストーリーをイメージしながらやりますので、それこそ本当のデザイナーの仕事だなんて感じがします。」(回答者番号19)

ストーリー性を考える作業は、SICの学生にとって重要である。授業の時間だけではなく、プライベートの時間でもよく使っていた。人によって好き嫌いこそあるものの、この作業のプロセスにおいて、脳が活性化されているのは間違いないようである。従って、この作品のストーリー性を考える作業は、学生の創造性に対する態度向上の役割を果たしたと言える。

フィールドワーク

フィールドワークも創造性教育にとって重要な手段の一つである。創造性評価には多層的視点があり、それは創造的産物に対する新規性・独創性、価値・有用性、主観的受容・文化的受容といった次元を統合するものである(Glăveanu, 2011)。それを理解するため、フィールドワークから情報を入手する必要も出てくる。SICに所属する学生にとっても、フィールドワークは大変重要なことである。インタビューの中で、多く学生がフィールドワークの多さに言及している。

「授業はフィールドワークが多いことに驚きますね。外でのイメージトレーニングとか、会社や博物館の見学とか、本当に多いです。高校までの授業では、写生の時以外、外に行くことはあまりなかったです。(中略)でもこういう課外活動は、すごく良いと思います。発想力の増加には役立ちますね。」(回答者番号4)

「フィールドワークが嫌いという人もいるけど、私はフィールドワークが好きですよ。脳の良い刺激となりますので、発想力とか高められます。いろんなところに行けるし、ずっと教室にいるよりましですね。(中略)しかも、フィールドワークの場所は、自分一人では行けないようなところもあるので、とても貴重な経験になりますね。」(回答者番号 11)

「うち学院は本当にフィールドワークが多いです。これは本当に今までのない経験で、とても新鮮でした。ほかの大学(TNHE プログラムではない)でメディアデザインを学んでいる高校時代の同級生に聞くと、彼らにはこんなたくさんのフィールドワークはないみたいです。それを聞くと、SIC は特別だなんて感じました。フィールドワークは教室の授業より面白いような気がする。特にアイデアを生み出したい時はすごく役立ちます。」(回答者番号 12)

SIC にはフィールドワークが多く、それが学生にとって、新鮮なものである。インタビューの回答から察すると、従来の中国式授業では、このようなフィールドワークは少ないようである。多くの学生は、フィールドワークが自分たちの創造力増加に役立つことを認めている。

4.3.5 留学への意識形成

TNHE は教育提供国にとって、自国文化を宣伝する一つ的手段とも言える。それを実施する大学にとって、留学の誘致も一つの目的である。SIC の学生の中では、卒業後サウサンプトン大学への留学を選ぶ学生もいる。SIC はダブルディグリーの TNHE プログラムなので、学生がサウサンプトン大学本校に行かなくても、サウサンプトン大学の卒業後証書を貰える。従って、実際に留学しなくても、留学と同等の学位が授与される。それにもかかわらず、約 20% の卒業生が卒業後サウサンプトン大学の大学院への進学を選ぶ。今回のインタビュー調査でも、何人もの学生が留学について言及したので、「留学への意識」というカテゴリーを作った。留学について、学生たちが以下のように語った。「ここに入ってきたのはやはり留学するためですね。自分の学んでいる専攻は、やはり留学しないとだめだと思います。ここから卒業すると、確かにサウサンプトン大学と同じ学位を貰えるのですが、やっぱり実際の留学とは少し違うんですね。だから、私は実際にサウサンプトン大学へ留学したいです。」(回答者番号 17)

「最初は留学とか考えてなかったのですが、ここで勉強しているうちに、だんだんと留学したいという気持ちが沸いてきました。今は本当に心から留学したいですね。ここで勉強していると、自然と知識欲が出て来ます。(中略)授業などで先生たちの話を聞くと、世界のことが何も知らないということがわかりました。だから、私はもっと広い世界を知りたいですね。」(回答者番号 11)

「留学するかどうか迷っていたのですが、先生たちと相談しているうちに、だんだんと留学したいという気持ちになりました。特に世界最先端のデザインをこの目で見てみたいです。(中略)ずっと国内にいと、やはり視野が狭いので、良いアイデアが生まれにくいような気がします。自分の創造性を高めるためにも、留学すべきですね。」(回答者番号 18)

学生の回答からでもわかるように、SIC の学生の中で、もっと世界を知りたい、自分の創造性を高めたいという理由で留学を目指す学生がいる。留学への意識は一種の知識欲の表れで、自己を高める意識の現れでもある。Lubert (1994)

によれば、動機 (motivation) も創造性を構成する重要な要素の一つであって、知覚を創造的な目的に力を誘導していくものである (Lubart, T. I., 1994))。従って、そういう「留学への意識」も、学生の創造性に間接的な影響を及ぼしていると言える。

表 4-3：生成されたカテゴリー・下位概念の定義と具体例

分析テーマ	カテゴリー	下位概念	発言例	発言回数
TNHE が芸術デザイン分野を学ぶ学生の創造力に与える影響	カリキュラム	TNHE プログラムによる独特な授業設定	1, 授業のカリキュラムが全部イギリス側が設定したものらしいので、中国の大学における同じ専攻のカリキュラムとは大分違うみたいです。2, 授業のカリキュラムがすごくユニークで、なんか高校まで受けてきた中国の授業とは少し違ってました。3, 授業が中国人先生と外国人先生の両方から受けるので、すごく面白いです。4, いかに西洋の大学らしい授業とかがありますので、自分が今 TNHE のプログラムに所属しているなって実感が沸きます。	7
		英語による授業	1, 英語を勉強する授業が 1、2 年生の時大量にあるので、そのお陰でどんなに英語が嫌いでも、やらざるを得ないことになりますね。2, 英語がだんだん得意になると、海外の文献なども読めるようになるので、それは自分にとってすごく良い刺激となりました。3, 英語による授業をたくさん受けると、考え方がだんだんと西洋人に近づくのを感じますね。4, 英語を勉強するのに相当な時間を費やす必要があるため、それだけで脳細胞が刺激されたような気がする。5, 英語が上達になると、先生とのコミュニケーションがスムーズになるから。より授業を理解できるようになった。6, 英語が得意になって、いろんな情報を手に入れられるようになり、自分の知識欲が刺激されたような気がする。	6
		ブレインストーミング	1, 授業の時、外国人の先生たちがとにかくブレインストーミングが好きで、何か新しい課題を始める時、いつもやらされてました。2, 外国人の先生がとにかくブレインストーミングが好きで、正直な話、僕はあまり好きではありません。3, ブレインストーミングがすごく好きで、いつも楽しくやっていた。4, 授業でのブレインストーミングがすごく新鮮で、今まであまり経験したことのないもので、すごく楽しかったです。5, 最初ブレインストーミングは苦手だったのですが、そのあとだんだんと好きになって、今は自分一人でもよくやったりします。6, ブレインストーミングはすごく脳の刺激となるので、新しいアイデアを生み出すのにすごく役立ちます。	10
	授業方法	スケッチブックへの拘り	1, 私たちの授業ではスケッチブックがすごく重要視されるので、いつもそれを頑張ってやっていた。2, スケッチブックの作成にはいつも苦労します。3, 外国人の先生たちはスケッチブックをすごく重要だと言っているため、いつもそれに時間を費やしますね。4, 私は将来イギリスへ留学したいので、スケッチブックはいつも頑張っています。5, 海外の大学へ留学する時、スケッチブックがすごく重要視されると聞いたので、僕はいつもそれだけは頑張ってやっています。	7
		学生への肯定的な教育手法	1, 外国人の先生は私たちの作品を見て、いつもまず肯定してくれます。例えば適当にやった作品でも、最初から否定したりはしません。まず褒めてから、そのあと自分の意見を言ってくれます。2, 先生たちは自分の作品を見て、いつも褒めてくれるので、それはすごく嬉しいです。3, たまに頑張っていない時でも、先生が褒めてくれるので、少し申し訳ない気分になります。だから、次回からちゃんと頑張ろうって気分になります。4, どんなに稚拙な作品でも、先生たちはそこから良いところを見つけ出してくれるので、すごく嬉しいです。もし最初からダメ出しされると、気持ちはきつと萎えるので、どんどんやる気を失うことになります。5, 先生たちが自分の作品に意見を述べる前に、まずその良いところを言ってくれるので、そのあと例えきつい意見を言われても何とか耐えられます。不思議なだけで、本当にそうなんです。	8
		海外情報へのアクセス	1, 私たちの学院は海外のホームページを自由に閲覧できるので。情報を仕入れるのはすごく便利です。2, うちの学院には VPN があるので、すごく便利です。ほかの学院の学生と比べると、自分が得た気分になりますね。3, VPN があるので、海外の情報を手に入れやすいです。その分、アイデアもすごく豊富になるような気がする。4, 海外のネットワークと接続できるのは本当に助かります。特に発想力が鈍くなっていた時、少しネットサーフィンをすると、意外と良いアイデアが浮かんだりしますね。5, 海外へのネットアクセスが僕がこの学院に入って唯一良かったと思ったことです。	9
	文化の比較意識	中国文化和西洋文化の比較	1, 大学の服飾学院にもファッションデザインという学科があるので、そっちではどんな授業をやっているのかすごく気になりますね。2, ずっと英語で授業を受けているので、中国の学生たちが普段どんな風に授業を受けているのか気になるね。3, 一般の中国学生が受ける授業と自分たちが受けた授業とは、どんな違いがあるのかすごく興味があって、ほかの学院の授業を傍聴に行ったこともあります。4, 西洋のファッションデザインをずっと勉強しているので、それが中国独自のファッション文化とどんな違いがあるのか、ずっと気になっていました。5, イギリスの授業をずっと受けていると、逆に中国の文化に対してより興味を持ったような気がします。	7
		海外文化に対する興味	1, このサウサンブトン国際学院にいて、自然と海外の文化に対して興味を持ちますね。2, 今まで海外にも行ったことがないのに、いきなりイギリスの授業を受け始めて、最初は少し戸惑いますね、だからイギリス という国ってどんなところなのか、すごく興味を持ちました。3, 私たちの先生は世界中からやってきているので、授業中に自国の文化についてたくさん話してくれます。4, 先生たちが世界中から来ているから、彼らと話していると、すごく世界に興味を持ちました。5, うちの学院に所属する学生は海外に行ったことのない人が多いので、ずっとここで授業を受けていると、みんな海外へ行きたくなり	6

分析テーマ	カテゴリー	下位概念	発言例	発言回数
			ますね。	
		自国文化への再認識	1, 西洋の文化をずっと勉強していると、すごく感銘を受けると同時に、自分の国のいいところも再発見することもありますね。2, ファッションデザインはどっかという西洋の発祥というイメージはありますが、中国だって独自のファッションセンスと技術があります。私はこういう西洋発祥のファッション技術を勉強すると同時に、中国独自のファッション技術も勉強したくなりました。3, 私の将来の夢は、西洋と東洋の文化を融合したファッションデザインを生み出すことです。5, 私は将来イギリスへ留学に行きたいのですが、最終的にやはり中国へ戻って、中国独自のファッションブランドを作りたいですね。	6
		普段の生活からの発想誘導	1, 先生たちがいつも、生活の中でアイデアが隠れていると私たちに言っています。2, 普段外国人の先生と一緒に出かける時、彼らは時々不思議なものの前で足を止めます。例えば、石ころとか、葉っぱとか、変な形の雲とか、そこからいろんなことをイメージしたりします。その姿を見て、いつも感銘を受けますね。3, 先生たちと雑談していると、よく小さな話題からすごく話が大きくなって、最終的にとんでもないスケールな話になります。それを見ていると、彼らの発想力はすごいなと感じました。	4
	創造性への刺激	作品のストーリー性	1, 私たちの作品にはストーリー性が求められます。ストーリー性がないと、いつも先生からダメ出しされます。2, 先生たちはいつも私たちに作品のストーリー性を求めます。私はいつもそれに苦労します。ストーリーを考えるのは、作品を作り上げるよりもずっと難しいです。3, 作品のストーリー性はいつも求められますが、それは本当に難しい作業です。普段あまりそういうのを意識したことがないので、いりなりストーリーとか言われても、本当お手上げです。4, 作品のストーリー性を考える作業はすごく楽しいですね。自分の創造性を高められたような気がします。	5
		フィールドワークの重視	1, 授業はフィールドワークが多いことに驚きますね。外でのイメージトレーニングとか、会社や博物館の見学とか、本当に多いです。2, うちの学院はフィールドワークが多いですね。本当によく外にでます。他の学院では絶対ありえないことでしょう。3, 私はフィールドワークが好きですよ。脳の良い刺激となりますので、発想力とか高められます。4, フィールドワークは教室の授業より面白いような気がする。特にアイデアを生み出した時はすごく役立ちます。	7
	留学への憧れ	留学への意識形成	1, ここに入ってきたのはやはり留学するためですね。自分の学んでいる専攻は、やはり留学しないとだめだと思います。2, 最初は留学とか考えてなかったのですが、ここで勉強しているうちに、だんだんと留学したいという気持ちが沸いてきました。今は本当に心から留学したいですね。3, 留学するかどうかわ迷っていたのですが、先生たちと相談しているうちに、だんだんと留学したいという気持ちになりました。4, ここで勉強していると、やはり外の世界に憧れますね、知識欲とかもすごく沸いてきます。もっといろいろ知りたい、そこの世界が知りたい、そういう気持ちになれますね。	6

4.3.6 分析のまとめ

以上の内容をまとめると、SICのカリキュラムでは、TNHE プログラムによる独特なもので、一般的な中国式カリキュラムとは異なる。全ての授業が英語で行われるため、英語の授業数が非常に多く、学生の学習言語は全て英語となる。SICにおけるこの特殊なカリキュラムと英語環境が、学生の思考方式を徐々に変化させ、学生の創造性向上に一定の影響を与えている。

SICの授業方法では、ブレインストーミング、スケッチブック、肯定的な教育方法、海外サイトへのアクセスという四つの要素に注目した。ブレインストーミングは学生に想像力を働かせることができる。スケッチブックは学生により自分の作品のコンセプトを認識させることができる。肯定的な教育方法は、学生に自信を与えることができる。海外サイトにアクセスできることによって、学生はより情報と知識を手に入れることができる。どの要素も、直接的或いは間接的に学生の創造性向上に貢献している。

文化意識の面では、海外文化に対する興味、中国文化と西洋文化の比較意識、自国文化に対する再認識という三つ方面から分析を行った。SICの学生が海外

文化に興味を持つことで、世界に対する理解が変わっていく。同時に自国文化を海外文化と比較するようになり、より創造性豊かな人間になっていく。また、学生がイギリス式教育を受けることによって、より自国文化を意識するようになり、自国文化に対して誇りを持てるようになった。

SICでは、学生の創造性を刺激するため、普段の生活からの発想誘導、作品のストーリー性、フィールドワークという三つの方法を取っている。SICでは、先生たちが学生の発想力を高めるため、普段の生活から学生にイメージトレーニングを要求している。そして、全ての作品にストーリー性を要求して、学生が自分の作品のストーリーを考える過程で、創造力も上がっていく。また、SICではフィールドワークを重要視しており、学生がフィールドワークを通じて、創造性を高める授業を体験している。

SICの学生は、TNHEプログラムに所属しているため、自然とTNHEの提供国に興味を持つようになる。中にはサウサンプトン大学本校へ留学したいと思っている学生も一定数存在する。この留学への意識が学生の知識欲を刺激し、より創造性豊かな人間になる可能性が高い。

4.4 結論

本稿は芸術デザイン分野のTNHEプログラムにおける創造性について考察した。今回の調査はTNHEの研究における不足している分野に、ある特定の事案を提示した。調査結果で示したように、芸術デザイン分野におけるTNHEプログラムは、教育提供国と受け入れ国の間に存在する文化的差異によって、そこで学ぶ学生の創造性を高めることができる。まず、TNHEプログラムで学ぶ学生は、新しい言語環境と授業方法によって、新たな価値観と思考スタイルを得ることができる。そして、二つの国の文化の影響を受けながら学生生活を送るため、その過程において、文化的な衝突、文化の比較意識、自国文化への再認識などが起こり、学生の創造性教育に大きな影響を与えている。また、芸術デザイン分野のTNHEプログラムでは先進国が教育の提供国であり、プログラムの実施によって、創造性を刺激する新しい理念や手法がTNHEの受け入れ国にもたらされた。最後に、TNHEプログラムで学ぶ学生は、自然と留学意識に目覚め、新しい知識欲と探求心が啓発される。

今回の調査研究から、芸術デザイン分野におけるTNHEプログラムは、そこで学ぶ学生の創造性を高められたという結論が導かれた。これは、トランスナショナル高等教育が、それを導入した国の教育現場に新たな教育手法をもたらし、その結果によって学生の創造性に対する意識・態度が高められたとも言える。この調査結果は、創造性教育の研究者たちに、TNHEという新しい視点を提供することで、今後の創造性教育研究に助力できることを期待する。一方、本論文は、一つのケーススタディという点において限界も生じている。今後は異なる国と学科のケーススタディを増やして、芸術デザイン分野のTNHEプログラムの特徴と課題を明らかにしつつ、TNHEが国際教育の発展に与える影響を分析していきたい。

第 5 章

結論と今後の課題

5.1 本論文のまとめ

トランスナショナル高等教育は、急速に国際化する世界の教育にとって、重要な役割を担っている。トランスナショナル高等教育の重要性と国際的な人材に対する社会の需要に鑑み、高等教育の多くの分野(芸術デザイン分野も含む)においてトランスナショナル高等教育のプログラムが実施されている。この文脈では、本研究の目的(MR0)は、中国の大学を例に、芸術デザイン分野を対象としたトランスナショナル高等教育の効果を明らかにすることであった。

研究の目的(MR0)を達成するため、二つの副目的(SR0)を設定した。SR01はファッションデザイン学科を対象に、トランスナショナル高等教育とそれを受け入れる国のローカル教育を比較し、その違いを検討することである。第3章では、SR01の達成のために、現場の学生、教員、スタッフにインタビューを行い、質的研究法を用いて、二つの教育システムを比較分析し、その違いが教育現場においてどのように反映されているかを考察した。その結果、トランスナショナル高等教育は、それを導入する国の高等教育と比べて、教育方針と教育制度が異なるため、たとえ同じキャンパス内における同じ専攻でも、育成した学生の特徴が大きく異なることを示した。また、今回の調査で取り上げたファッションデザインのような欧米発祥の分野でも、現地の社会状況と教育制度を無視すると、期待できる効果が十分に得られない状況を学生や管理教員からの生の声をもとに示したことである。

SR02は芸術デザイン分野のトランスナショナル高等教育プログラムにおける創造性について検討したものである。第4章では、SR02の達成のために、メディアデザイン学科とファッションデザイン学科に所属する学生にインタビュー調査を行い、質的研究法を用いて、トランスナショナル高等教育が学生の創造性に与える影響を考察した。その結果、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育は、それを導入した国の教育現場に海外の教育方法をもたらし、それによって学生の創造性的態度に良い影響を及ぼす可能性があることがわかった。

SR01とSR02を達成することで、MR0を達成した。そして、期待すべき芸術デザインを対象とするトランスナショナル高等教育は次のものである。トランスナショナル高等教育は学生の発想力を重視し、デザイナー志向の人材を育成することに向いている。特に、学生は文化的多様性を理解し、創造性に対する意識と態度が向上する。しかし、ローカル教育と比べると、技術の授業が少なく、学生の技術力が不足する可能性がある。そのため、芸術デザインを対象としたトランスナショナル高等教育では、学生の発想力を伸ばすだけでなく、技術的なスキルもしっかりと身に付けさせることが重要である。また、トランスナショナル高等教育プログラムに所属する学生は、ローカル教育で学ぶ学生よりも海外からの情報に触れる機会が多く、それを生かして、世界最新のトレンドを把握し、世界とつながれる国際的な人材を育成することが期待できる。更に、トランスナショナル高等教育では、欧米発祥の芸術デザイン分野であっても、現地の社会状況と教育制度を無視すると、期待する効果を得られないことも今回の調査でわかった。そのため、芸術デザインを対象としたトランスナショナル高等教育のプログラムを策定する際には、現地の状況を十分に考慮し、柔軟に対応する必要がある。特に現地の教育機関(今回の場合は、服飾学院)

と連携を取り、コンテストに参加する際、必要なサポートを得ることが大事である。

この研究の結果について、注目すべき点は以下の二点である。第一は、トランスナショナル高等教育の実施意義である。トランスナショナル高等教育プログラムの実態を調査した結果、トランスナショナル高等教育を導入した国（今回の対象国は中国）は、期待できる教育効果が十分に得られない状況を学生の印象から示したのである。杉本（2014）は、トランスナショナル高等教育におけるホスト国や学生への利点を、①選択肢の拡充・機会の増加、②高等教育のインフラやノウハウに関するコスト削減、③地域活性化・雇用創出、④外貨流出の防止、⑤異文化からの防御・頭脳流出の抑制、⑥グローバル化に伴う淘汰からの保護、の6つに整理した。しかし、今回の調査結果によれば、中国においてはこれらのメリットが必ずしも十分に発揮されていない可能性があることがわかった。まず①について、中国国内では海外留学が今でも大変人気のある制度であることから、留学を希望しても、海外に行く経済的余裕のない学生にとって、トランスナショナル高等教育は新しい道の一つとなり、国内学生にとって、確かに選択肢の拡大につながっている。②の高等教育におけるノウハウやインフラ整備に関して、確かにインフラへの投資に対する期待は一部存在するものの、求められているのは主に英語で高度な専門分野を教えるノウハウであり、海外の大学院進学に向けた準備教育としての役割に大きな期待が寄せられている。しかし、今回の調査では、中国に派遣された教員たちは、世界中から臨時に雇った者が多く、とてもイギリスの本校と同じような教育を期待できるとは言えない。③の雇用の創出・地域の活性化については、卒業生の多くが中国国内で就職したという調査結果を見て、雇用創出の効果はある程度認められるが、その就職先がほとんど地元ではなく、中国全土に広がっている現実をみると、地域への影響はほとんどないと言える。④の外貨流出の抑制と⑤の頭脳流出の抑制の効果については、一部の学生がトランスナショナル高等教育プログラムから卒業しても、海外の大学院へ進学する状況を見ると、効果拔群とは言えない。⑥については、グローバル化からの「淘汰」というよりは、グローバル化をするうえで、学生が海外文化の影響を受け過ぎないように守っているとも言える。以上のように、中国におけるトランスナショナル高等教育の実践は期待通りの結果を十分に得たとは言えない。

第二は、トランスナショナル高等教育は学生の創造性に対する意識・態度を高められるという点である。今回の研究結果は、学生が二つ国の文化的影響を受けながら学習するトランスナショナル高等教育は、創造性が高められることを示した。OECDによれば、創造性を育むシグネチャーペダゴジーは、クリエイティブ・パートナーシップ、デザイン思考、対話型教育、メタ認知教育法、モダンバンドムーブメント、モンテッソーリ教育法、オルフ音楽教育、プロジェクト型学習、リサーチ型学習、スタジオ思考、芸術的行動のための教育法という11種類ある。シグネチャーペダゴジーとは、教育活動、プロジェクト、あるいは教育そのものに適用可能な構造化された教育モデルである（OECD, 2023）。これらのシグネチャーペダゴジーは、創造性や積極的な学習姿勢の育成に関連して複数の要素を結びつけた。トランスナショナル高等教育では、学生にとって、今まで受けてきた教育とは異なる方法で育成される。異なる言語・価値観を持つ教員と共同で授業に取り組む過程で、従来の枠にとら

われない発想が促されることになる。しかし、従来の留学と違って、学生の生活環境は今まで通りである。つまり、学習環境と生活環境の文化的違いが存在するのが、トランスナショナル高等教育の特徴である。このような特徴の下で、トランスナショナル高等教育プログラムに所属する学生は自己の文化を相対化し、他者の視点を取り入れる柔軟性を養う。同時に、そこに所属する教員も単なる知識伝達者に留まらず、異文化間の橋渡し役としての役割が強化される。授業設計においては、両国の教育哲学を統合したカリキュラムが求められ、結果として学生の主体性と協働力を促進する学びが実現する。このような教育環境は、創造性の土壌となり得るだけでなく、グローバル社会で活躍できる人材育成の実践場ともなる。

5.2 知識科学への貢献

世界のグローバル化が進む中、トランスナショナル高等教育は国際教育の重要な担い手となっている。本研究では、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実態と特徴を明らかにした。本研究によって明らかにした内容によって、芸術デザイン分野のトランスナショナル高等教育がその受け入れ国において、現場で学んでいる学生の視点から、どのような効果と影響を及ぼしているのかについて、新しい知見を提供したと言える。本研究の調査結果から見えてきた課題は、各国の教育機関が今後芸術デザイン分野のトランスナショナル高等教育プログラムを設定する上で、良い示唆となることから、トランスナショナル高等教育の研究に理論的含意を与える。同時に、本研究は、芸術デザイン学科に所属する学生を相手としてトランスナショナル高等教育の実施状況と特徴を分析したことも、当分野の研究に実践的含意も与えたと言える。

そして、本研究が知識科学に貢献出来た点として、(1) 中国本土のファッションデザイン教育は技術を重視し、就職に有利な人材を育てることを目標としており、トランスナショナル高等教育は学生の発想力を重視し、デザイナーを育てることを目的としていることを発見した。(2) 芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育プログラムは、それを導入した国の教育現場に海外の教育方法をもたらすことによって、学生の創造性が高められることを実証した、の2点が挙げられる。この成果は「国際教育研究、トランスナショナル教育研究、創造性研究」における知見を総合し、質的研究法を用いて達成した。つまり、トランスナショナル高等教育の有効性という社会課題に対して、分野を跨る学術的知識を生かしたものであり、知識社会での人材育成手法に貢献した。

さらに、本研究は質的研究法に基づき、芸術デザイン分野を学ぶトランスナショナル高等教育プログラムに所属する学生を対象として調査を行ったことで、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実践的な側面を明らかにした。このような質的研究は、学生の主観的な経験や意見を収集することができ、トランスナショナル高等教育の現状や問題点を深く理解するために重要である。

最後に、本研究の実務的貢献として、トランスナショナル高等教育が創造性教育に与える影響について新しい視点を提供した。トランスナショナル高等教

育によって、学生は自国で生活しながら異なる文化や教育方法に触れることができ、これが特徴的な創造的思考や柔軟性を育む土壌となる。今後は、トランスナショナル高等教育をベースとした創造性教育のモデルをさらに開発し、その有効性を検証する研究が必要である。

このように、本研究は、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実態と特徴を明らかにし、知識科学に対して多面的な貢献を行った。これらの成果は、今後の国際教育や創造性教育の発展に役立つ重要な知見となることが期待される。

5.3 今後の課題

本研究は、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の実態と特徴について研究を行った。その結果、芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育は、それを導入する国の従来の高等教育と比べて、それぞれ社会的に異なる人材を育成することが判明した。また、トランスナショナル高等教育は、学生の創造性を高める効果があり、創造性教育の新たな手法となれることも示された。従って、今後トランスナショナル高等教育をベースとした創造性教育の新しい育成モデルを構築することを将来の課題にしたい。

一方、本研究は質的研究法を使っており、対象とした学生や教員もファッションデザインとメディアデザイン学科に限定している。調査結果の妥当性はある程度保たれているが、他の芸術デザイン分野や異なる学科における一般化の可能性についてはさらなる検証が必要である。今後の研究ではより分野を広げ、各分野の特徴と課題を明らかにしつつ、トランスナショナル高等教育が国際教育の発展に与える影響を分析していきたい。それから、コロナの影響及び個人的な限界で、今回はサウサンプトン大学本校で実際に行われている教育の実態を調査することが出来ず、サウサンプトン大学本校で行われている授業と SIC の授業と比べて、違いが存在するかどうか把握することが出来なかった。これも今後著者の研究課題だと言える。また、今回の研究では、インタビューデータのみ扱っているため、今後は定量的データとの統合により、効果の客観性を高める余地も残されている。そのため、今後は多様な芸術デザイン分野や教育環境における比較研究を進め、トランスナショナル高等教育の普遍性と特異性を明らかにする必要がある。更に、長期的な追跡調査を通じて、学生の創造性発達過程への持続的影響を検証することで、より堅実な教育モデルの構築が期待される。最後に、教員の国際経験、教員と学生のコミュニケーションなど、教育手法以外の側面が創造性教育に与える影響についても、詳細な要因分析が求められる。加えて、学生個々のバックグラウンド学習動機との関連性を考慮した微視的なアプローチも不可欠である。これらの課題に段階的に取り組むことで、芸術デザイン分野における持続可能なトランスナショナル高等教育の理論と実践の理論が形成されることが期待される。

また本研究は中国の大学のみで実施されたものであり、他の国における文化的、教育的文脈との比較が不足している。特に欧米や東南アジア諸国との連携事例を対象にした多国籍比較研究が求められる。これにより、トランスナショナル高等教育のモデルが持つ文化的適応性や構造的限界がより明確になる。また、グローバルな芸術デザイン教育ネットワークの構築に向けた政策提言にも

つなげていく必要がある。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にご指導、ご助力を賜りましたこと、心より深く御礼申し上げます。

本論文の執筆にあたり、主指導教官である由井蘭隆也先生には貴重なアドバイスと丁寧なご指導を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。副指導教官である永井由佳里先生からも貴重な御意見を頂き、同じく深く感謝の意を表したいと思います。副テーマ研究においては、キムウニョン先生にご指導していただき、衷心より感謝の意を申し上げます。また、インタビュー調査に協力して下さった大連工業大学の教員と学生の皆様にも心より感謝致します。

博士論文の学位審査にあたり、外部審査員として九州大学の李曉燕先生、内部審査員として西村拓一先生、藤波努先生、島田淳一先生に貴重なお時間を割いていただき、有益な助言と温かいご指導を賜りましたことを心より感謝の意を申し上げます。

最後にずっと支えてくれた家族にも感謝の意を表したいと思っています。本当にありがとうございました。

参考文献

英語文献

Altbach, P. G., & J. Knight. 2007. "The Internationalization of Higher Education: Motivations and Realities." *Journal of Studies in International Education* 11 (3–4): 290–305.

Aminu, N., Pon, K., Ritchie, C. & Ivanov, S. (2022). Student motivation and satisfaction Why choose an international academic franchise programme rather than a home one? *International Journal of Training and Development*, 26. 407-426. <https://doi.org/10.1111/ijtd.12263>

Barak, M. (2017). Science teacher education in the twenty-first century: A pedagogical framework for technology-integrated social constructivism. *Research in Science Education*, 47(2):283-303.

Barron, F. (1995). *No rootless flower: An ecology of creativity*. Cresskill: Hampton Press.

Beghetto, R.(2009).“Correlates of Intellectual Risk Taking in Elementary School Science”, *Journal of Research in Science Teaching*, Vol. 46/2, 210-223.

Beghetto, R., J. Baer, & J. Kaufman (2015)“Teaching for Creativity in the Common Core Classroom”, Teachers College Press, New York.

Blackmur, D. (2007). “A Critical Analysis of the UNESCO/OECD Guidelines for Quality Provision of Cross-Border Higher Education.” *Quality in Higher Education* 13 (2): 117–130. <https://doi.org/10.1080/13538320701629137>.

Bohm, A., Davis, D., Meares, D., & Pearce, D. (2002). *Global student mobility 2025: Forecasts of the global demand for international higher education*. IDP Education.

Bransford, J.D. & D.L. Schwartz. (1999). “Rethinking transfer. A simple proposal with multiple implications”, *Review of Research in Education*, Vol 24/2, 61-100.

British Council. (2012). *The shape of things to come: Higher education global trends and emerging opportunities*.

Bughin, J., E. Hazan, S. Lund, P. Dahlstrom, A. Wiesinger and A. Subramaniam (2018). *Skill Shift: Automation and the Future of the Workforce*, Discussion paper, McKinsey Global Institute, <https://www.mckinsey.com/~media/McKinsey/Featured%20Insights/Future%20of%20organizations/Skill%20shift%20Automation%20and%20the%20future%20of%20the%20workforce/MGI-Skill-Shift-Automation-and-future-of-theworkforce-May-2018.ashx> (accessed 14 August 2019).

Carter, R. (2004). “Language and creativity: The art of common talk”, London: Routledge.

Dai, K. (2020). “Learning Between Two Systems: A Chinese Student’s Reflexive Narrative in a China-Australia Articulation Programme.” *Compare: A Journal of Comparative and International*

Dai, K. (2021.) *Transitioning ‘In-Between’: Chinese Students’ Navigating Experiences in Transnational Higher Education Programmes*. Leiden, The Netherlands: Brill.

Dai, K., B. Lingard, & R. P. Musofer. (2020). “Mobile Chinese Students Navigating Between Fields: (Trans)forming Habitus in Transnational Articulation Programmes?” *Educational Philosophy and Theory* 52 (12): 1329–1340.

Dai, K., B. Lingard, & V. Reyes. (2018). “‘In-Betweeners’: Chinese Students’ Experiences

nances in China-Australia Articulation Programmes.” *Scottish Educational Review* 50 (1): 36–55.

Dai, K., K. E. Matthews, & P. Renshaw. (2020). “Crossing the ‘Bridges’ and Navigating the ‘Learning gaps’: Chinese Students Learning Across Two Systems in a Transnational Higher Education Programme.” *Higher Education Research & Development* 39 (6): 1140–54. <https://doi.org/10.1080/07294360.2020.1713731>.

Dai, K., K. E. Matthews, & V. Reyes. (2020). “Chinese students’ Assessment and Learning Experiences in a Transnational Higher Education Programme.” *Assessment & Evaluation in Higher Education* 45 (1): 70–81.

Dai, K., S. Wilkins, & X. Zhang. (2023). “Understanding Contextual Factors Influencing Chinese Students to Study at a Hong Kong Institution’s Intra-Country Branch Campus

Deci, E. L.(1972). “Intrinsic motivation, extrinsic reinforcement, and inequity”, *Journal of Personality and Social Psychology*, 22, 113-120.

Detterman, D.K. & R.J. Sternberg (eds.). (1993). “Transfer on Trial: Intelligence”, *Cognition, and Instruction*, Ablex, Norwood, NJ.

Eccles, J. & A. Wigfield. (2002). “Motivational Beliefs, Values, and Goals”, *Annual Review of Psychology*, Vol. 53/1, 109-132.

Egron-Polak, E., & Hudson, R. (2014). *Internationalization of higher education: Growing expectations, fundamental values: IAU 4th Global Survey*. International Association Universities.

Fang, W., & S. Wang. (2014). “Chinese students’ Choice of Transnational Higher Education in a Globalized Higher Education Market: A Case Study of W University.” *Journal of Studies in International Education* 18 (5): 475–494.

Fielden, J., Middlehurst, R., & Woodfield, S. (2007). *Global horizons for UK universities*. The Council for Industry and higher education.

Garrett, R., Kinser, K., Lane, J.E., & Merola, R. (2017). *International branch campuses: success factors of mature IBC 2017*. The Observatory on Borderless Higher Education.

Glăveanu, V. P. (2011). “Creating Creativity: Reflections from Fieldwork.” *Integrative Psychological and Behavioral Science*, Volume 45, 100-115

Griffin, McGaw, & Care, (2012). *Assessment and Teaching of 21st Century Skills*, Springer Dordrecht.

Han, X. (2021). “Disciplinary Power Matters: Rethinking Governmentality and Policy Enactment Studies in China.” *Journal of Education Policy* 38 (3): 408–431. <https://doi.org/10.1080/02680939.2021.2014570>.

Hartmann, E., and K. H. Mok. (2021). “Knowledge, Power and Geopolitics of Transnational Higher Education.” Paper presented at the European Consortium for Political Research General Conference. <https://scholars.ln.edu.hk/en/publications/knowledge-power-and-geopolitics-of-transnational-higher-education>

Hausman, C. R.(1979). Criteria for creativity. *Philosophy and Phenomenological Research*, 40(2), 237–249.

Huang, F.(2008). “Regulation and Practice of Transnational Higher Education in China.” In *Teaching in Transnational Higher Education: Enhancing Learning for Offshore International Students*, edited by L. Dunn and M. Wallace, 23–33. London: Routledge.

Kleibert, J. M. (2022). “Transnational Spaces of Education as Infrastructures of Im/M

obility.” *Transactions of the Institute of British Geographers* 47 (1): 92–107. <https://doi.org/10.1111/tran.12475>.

Knight, J. (2005). Shortages, gaps, data dilemmas. *The Observatory of Borderless Higher Education*.

Knight, J. (2017). Are double/multiple degree programs leading to “discount degrees?” In G.Mihut, P.G. Altbach, & H. de Wit (Eds.), *Understanding higher education internationalization* (111-113). Sense Publishers.

Knight, J. (2019). International program and provider mobility in selected African countries. https://www.britishcouncil.org/sites/default/files/ippm_africa_report_a4_final_mapping_study_of_ippm_national_policies_regulations_and_activities.pdf. British Council.

Knight, J. (2021). Higher education internationalization: Concepts, rationales and frameworks.

Knight, J., & Lee, (2022). International joint, double, and consecutive degree programs: New developments, issues, and challenges. In B. Leask, D. K. Deardorff, H. de Wit, & H. Charles (Eds.), *The SAGE handbook of international higher education* (pp.414-428). Stylus Publishing.

Knight, J., & McNamara, J. (2017). Transnational education: A case for renewed British Council and DAAD data collection guidelines for international programme and provider mobility (IPPM).

Kun Dai, Ka Ho Mok & Xiaoyuan Li. (2023). “Mapping the historical development and landscape of research about transnational higher education: a scientometric analysis from comparative and international perspectives”, *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, DOI: 10.1080/03057925.2023.2292517

Kun Dai. (2018). “Learning between two systems: a Chinese student’s reflexive narrative in a China-Australia articulation programme”, *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, 50,3, 371-390.

Lane, J. E., & Kinser, K. (2013). Five modes to deliver transnational higher education. *International Higher Education*, 70, 9-11.

Lawton, W., & Katsomitros, A. (2017). Global: International branch campuses expanding. geopolitical landscape changing. In G. Mihut, P.G. Altbach, & H. de Wit (Eds.), *Understanding higher education internationalization* (37-39). Sense Publishers.

Leung, M. W., and J. L. Waters .(2013). “British Degrees Made in Hong Kong: An Enquiry into the Role of Space and Place in Transnational Education.” *Asia Pacific Education Review* 14 (1): 43–53.

Levaino, A. (2016). Transnational higher education: Determinants and risks. *Higher Education*, 73(4), 637-656.

Lim, C. B., D. Bentley, F. Henderson, S. Y. Pan, V. D. Balakrishnan, D. M. Balasingam, and Lubart, T.I.(1994). ““ Creativity”, in *Thinking and Problem Solving*”, San Diego, CA:Academic Press, 289-332.

Liep, J. (2001). Introduction. In J. Liep (Ed.), *Locating cultural creativity* (1–13). London: Pluto Press.

Xiaoyuan Li, Kun Dai & Xiaofan Zhang.(2024).“Transnational Higher Education in China: Policies, Practices, and Development in a (Post-)Pandemic Era” *Higher Education Policy*, Volume 37, 761–778.

McBurnie, G., and C. Ziguras .(2001). “The Regulation of Transnational Higher Education in Southeast Asia: Case Studies of Hong Kong, Malaysia and Australia.”*Higher Education* 42 (1): 85–105.

McBurnie, G. & Ziguras C.(2003). Remaking the world to our own image: Australia's efforts to liberalise trade in education services *Australian Journal of Education*, 47(3), 217-234.

Merriam, S.B.(2004). “Qualitative Research and Case Study Applications in Education”, San Francisco: Jossey-Bass Publishers.

Mok & Han.(2017).“Higher education governance and policy in China: managing decentralization and transnationalism.”*Policy and Society*, 36:1, 34-48, DOI:10.1080/14494035.2017.1288964

Moufahim, M., & Lim, M. (2015). The other voices of international higher education: An empirical study of students' perceptions of British university education in China. *Globalisation, Societies and Education*, 13(4), 437-454. <https://doi.org/10.1080/147677242014.959476>

Nouahim, M., & Lim, M. (2015). The other view: An empirical study of students' perception of internationalization. *Globalization, Societies and Education*, 13(4), 443-458. <http://doi.org/10.1080/14767724.2014.959476>

OECD .(2019). *OECD Employment Outlook 2019: The Future of Work*, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/9ee00155-en>.

Pon, K., & Ritchie, C. (2014). International academic franchising: Trying to fit a square peg into a round hole? *London Review of Education*, 12(1), 104-120.

Pyvis, D., & Chapman, A. (2007). “Why university students choose to study in Malaysia: A case study.” *International Journal of Educational Development*, 27(3), 235-246.

Pyvis, D., & A. Chapman. (2005). “Culture Shock and the International Student ‘Offshore’.” *Journal of Research in International Education* 4 (1): 23–42.

Pyvis, D., & A. Chapman. (2005). “Why University Students Choose an International Education: A Case Study in Malaysia.” *International Journal of Educational Development* 27 (2): 235–246.

Raina, M. K.(1999). “Cross-Cultural Differences“, in *Encyclopedia of Creativity*, Vol.1, Academic Press, 453-464.

Rickards, T. (1999) “Brainstorming Revisited: A Question of Context”, *International Journal of Management Reviews*, 1, 1, 91-110.

Shams, F., & J. Huisman. (2012), “Managing Offshore Branch Campuses: An Analytical Framework for Institutional Strategies.” *Journal of Studies in International Education* 16 (2):106–127.

Simpson, D. (2021). *International joint universities: Towards a new model in international academic mobility* [Doctoral dissertation, University of Toronto]. https://tspace.library.utoronto.ca/bitstream/1807/106288/2/Simpson_Diane_Lesley_202106_PhD_thesis.pdf

Strauss & Corbin. (2014). “Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory” SAGE Publications, Inc

Tight, M.(2021),“Globalization and Internationalization as Frameworks for Higher Education Research.”*Research Papers in Education* 36 (1): 52–74.

The Chinese Ministry of Education Chinese-foreign cooperation in running school(20

25),<https://www.crs.jsj.edu.cn/>

Torrance, E. P. (1988). The nature of creativity as manifest in its testing. In R. Sternberg (Ed.), *The nature of creativity: Contemporary psychological perspectives* (43–75). Cambridge: Cambridge University Press

Weisberg, R. W.(1999). “Creativity and knowledge: A challenge to theories”,In R. J. Sternberg (Ed.), *Handbook of creativity* Cambridge University Press, 226-250.

Wilkins, S., & Balakrishnan, M. (2013). Assessing student satisfaction in transnational higher education. *International Journal of Educational Management*, 27(2), 143-256. <https://doi.org/10.1108/09513541311297568>

Wilkins, S., M. Stephens Balakrishnan, & J. Huisman. (2012). “Student Satisfaction and Student Perceptions of Quality at International Branch Campuses in the United Arab Emirates.”*Journal of Higher Education Policy & Management* 34 (5): 543–556.

Winner, E., T.R. Goldstein & S. Vincent-Lancrin .(2013). “Art for Art's Sake? The Impact of Arts Education”, *Educational Research and Innovation*, OECD Publishing, Paris, <http://doi.org/10.1787/9789264180789-en>.

Yang, R. (2008). “Transnational Higher Education in China: Contexts, Characteristics and Concerns.” *Australian Journal of Education* 52(3):272-286. DOI:10.1177/000494410805200305

Yu, J. (2021). “Consuming UK Transnational Higher Education in China: A Bourdieusian Approach

Ziguras, C. (2003). “The Impact of the GATS on Transnational Tertiary Education: Comparing Experiences of New Zealand, Australia, Singapore and Malaysia.” *The Australian Educational Researcher* 30 (3): 89–109. <https://doi.org/10.1007/BF03216799>.

日本語文献

上平崇仁・飯田周作(2020)「創造性教育におけるフィールド概念の整理と学修プログラムの検討」『情報科学研究』41、pp. 25-40.

OECD教育研究革新センター(編著)西村美由起(訳)(2023)『創造性教育と批判的思考—学校で教え学ぶことの意味』明石書店.

夏立憲(2002)『中国における民営大学の発展と政府の政策』溪水社、pp. 43.

澤谷敏行(2022)『現代中国高等教育の躍進—急速な大学発展の要因』関西学院大学出版社

嶋津百代(2016)「創造性の視点から捉え直すインターカルチュラル・コミュニケーションの可能性—日本語学習者が考えるコミュニケーションのあり方—」, 三牧陽子・村岡貴子・義永美央子・西口光一・大谷晋也(編)『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』くろしお出版、pp. 293-308.

南部広孝(2014)「第9章 中国におけるトランスナショナル高等教育—高等教育段階での『内外協力による学校運営』—」杉本均編著(2014)『トランスナショナル高等教育の国際比較—留学概念の転換—』東信堂、pp. 26-27

杉本均・南部広孝(2019)『比較教育学言論』共同出版.

杉本均・張 潔麗(2017)「中国型トランスナショナル高等教育の展開—内外協力による学校運営とブランチキャンパス概念—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』63、pp. 445-463.

花田真吾(2019)「高等教育パートナーシップとSDGs」東洋大学国際共生社会研究セン

ター監修『国際貢献とSDGsの実現ー持続可能な開発のフィールド』 朝倉書店

花田真吾(2022)「国境を越える教育」異文化間教育学会(編)『異文化間教育事典』
明石書店、pp112.

花田真呉(2024)『国際高等教育ー教育・研究の展開をみすえる』 明石書店

博士論文の骨格となる研究業績リスト

学術誌論文

「芸術デザイン分野におけるトランスナショナル高等教育の創造性」
周首能、由井蘭隆也、キムウニョン
日本創造学会論文誌 29 巻 2026 年 6 月掲載予定 査読有り
【本論文の第四章内容該当】

国際会議発表

“Transnational Higher Education in Northeast China”
Shouneng Zhou, Takaya Yuizono
Proceedings of the 20th International Conference on Knowledge,
Information and Creativity Support Systems (KICSS 2025)
【本論文の第二章内容該当】

付録：インタビューのトランスクリプトの実例

実例①

日付：2019年9月15日

場所：大連工業大学カフェテリア

学生所属：サウサンプトン国際学院4年生

所要時間：30分

対応する研究：第三章

書き起こし文：

老师：你现在已经大四了是吗？

同学：对。

老师：你老家是哪？

同学：我是沈阳的。

老师：你是小的时候就开始学画画吗？

同学：不是，我是高考复读的时候学的画画，没学一年，就两三个月。

老师：学两三个月就能艺考？

同学：我本来是学理的，文化课分比较高，而且之前就挺想学服装的，感觉服装挺好玩的，虽然学的时间短，画得不算特别好，但还是想试试。

老师：你是从什么时候开始决定想考服装专业的呢？

同学：上高中的时候我就有个本，读的全是关于服装的东西，第一年考得不好，复读的时候就想抓住机会，不想错过自己感兴趣的专业，女生好像大多都挺想做衣服的。

老师：你是准备参加高考的时候才知道这个学校的，还是之前就已经知道？

同学：我学美术之后，负责我们报考学校的女老师告诉我的，她推荐了工业大学，说北服比较难考，工业大学的服装专业也挺好，让我可以考虑。关键是自己的分数也不是很高，能选的学校并不多。

老师：你学习这三年，觉得咱们的课程设置、老师的授课方法，哪些方面比较好，哪些方面改进后会更好？

同学：我觉得咱们学院比较好的是学习的東西能開闊眼界，雖然我們基礎不如服院的同学，但在設計上，看東西的視野更廣闊，因為有外國老師教學，能接觸到不一樣的思路。如果學院能更著重基礎教學，比如手繪、縫紉這些，会更好。

老師：咱們學校有兩個服裝專業，一個在服院，一個在國教，你們在學習和生活中，有沒有想了解服院同学在學什麼？

同学：有過，我和服院的同学聊過，他們會學服裝史、手繪、縫紉這些基礎課程，我和同学現在一起考研，都想補補基礎。他們的課技術類特別多，我們的課這種技術類的課很少，這就造成我們都到了大三，還無法自己完成一件衣服的制作。

老師：你覺得國外的老師和中國的老師，教學風格或理念上有不一樣的的地方嗎？

同学：不一樣，有的中國老師教東西會要求按他們的要求做，固定好方向讓你執行；國外老師更注重讓學生自己發展，先告訴你一個他認可的想法，然後讓你自由發散，不會強制要求做什麼。但老師們對作品集的要求很高，需要故事性。不然就會給不及格。

老師：咱們學校總體的硬件設施和網絡條件怎麼樣？

同学：總體一般，不算特別好但也不算差。圖書館挺好的，有很多國內沒接觸過的國外新書，很新。但一些設備不讓我們親手操作，怕弄壞，而且有使用時間限制，人多的時候還得等，會耽誤設計過程，突然有靈感的時候沒法及時動手，思路容易被打斷。但是網絡條件很好，我們可以使用VPN，這樣可以讓我們接觸到許多國外網站的消息，這點對我們的設計靈感來說特別有利，真的激發了我們很多創作靈感。這點確實比服裝學院的同学要優越很多。

老師：你們會參加一些比賽嗎，覺得學校和老師給予的支持多嗎？

同学：學校提供的比賽資源比較少，我們很少知道有比賽信息，大多是自己找的。而且學校不會給多餘時間參加比賽，平時學習工作量也大，根本沒精力兼顧。

老師：大家學習壓力大嗎？

同学：挺大的，上大學比上高中還累，真的很累。大三之後有考研、出國這些想法，但大四的工作量反而比大一還多，精神壓力也大。反觀服院的大四學生，課程沒那么多，有更多時間做畢設、準備考研。

老師：你剛來入學的時候，在語言溝通方面是不是有一定障礙？

同学：對，有一定障礙。

老师：咱学校的英语教学怎么样？

同学：学校的英语教学比较注重口语和听力，但写论文主要靠自己，老师不会过多讲解或帮忙修改。大一大二还要兼顾专业课，英语学习的压力也很大。

老师：日常生活中，学生和老师的课下交流多吗？

同学：不算多。大一大二交流还多一些，大三大四之后我们都有自己的想法，不希望老师固定要求我们怎么做。如果作业有问题会和老师聊，但不会让老师给我们定思路、教我们怎么做，都想自己主导。

老师：你看过服装学院的作品吗，和咱们的作品对比有哪些不同？

同学：看过，去年的毕设和他们的作品集我都了解过。服院的作品更商业化、实用，更容易日常穿着；我们的作品更前沿、偏艺术表现，没那么商业化，这没有好坏之分，只是侧重点不同。服院同学大一大二会学服装史、手绘、缝纫等基础，这些我们比不过他们，但我们的作品集是优势，国外很看重这个，里面不仅有作品，还有完整的设计思路和实验过程，比如把自己设计的印花印到专门的纸上再转印到布上，然后把布料贴在 A3 大本上，注重触感和视觉感。

老师：你未来的规划是什么，想考研、留学还是工作？

同学：想考研，先考国内的，研二不忙的时候想试试国外的双学位。因为现在出国读研学的东西和国内差不多，都是给个 brief 自己做，我们想先把国内的基础学扎实，了解国内的布料情况，这样知识体系更完整。

老师：有没有想去的目标院校？

同学：准备考工业大学的服院，和×××一起，她已经保送了。她学习特别好，设计很新颖，在专业上一直是我们的专业分数很高的，外表看着内向，其实聊起来很开朗。

老师：你觉得学校或学院在哪些方面改进后，对同学们的生活或学习会有帮助？

同学：咱们学院和外界的联系太少了，显得很神秘，大学本来应该是成长和社交的过程，但我们学院的同学除了学习就是学习，学习任务重，没多余时间报社团，除了寝室的人，和其他人沟通不多。学设计太封闭不好，不利于思路发散。另外，希望学院能增加手绘、缝纫、打版相关的课程，我们有很多想法，但实际操作能力差，没法完成，现在这些课程都是自己花钱出去学的。

老师：听说你们老师流动性挺大的，是真的吗？

同学：对，是真的。这个对我们的学习影响很大。每个老师的风格都不一样，刚刚适应了一个老师，结果立刻又换了一个，这个真的很无语。而且有的时候老师们的意见和风格也会对立，这对我们的学习造成了很负面的影响。

老师：家里对你学习这个专业支持吗？

同学：支持的，一开始我爸不支持，他自己是搞学习研究的，觉得还是文化课更重要，但后来慢慢接触了解这个专业后，就接受了，觉得这个专业也挺好，让我学自己喜欢的东西。

老师：你将来有没有想出国看一看的打算？

同学：有，毕竟现在不是真正的国外学习环境，还是想去国外看看实际的教学情况，西方的服装设计发展得更成熟，有很多值得学习的地方。

老师：你觉得老师的教学风格是有统一感，还是因老师而异？

同学：因老师而异。比如偏英国的老师，有的喜欢好看、有视觉感的作品集，有的更喜欢实用型的作品，不同老师教的东西和侧重的点都不一样。

老师：你对整体的课程是比较满意、一般还是不太满意？

同学：感觉一般。主要是基础课程不够，很多实操技能都得自己额外花钱学，有点不方便。

老师：班级同学之间的氛围怎么样？

同学：大一大二还好，有助班老师看着，整体更团结，联系也多；大三大四之后大家联系少了，更喜欢自己一个人，觉得这样更自由，有自己的节奏。

老师：室友关系怎么样？你们住在几舍？

同学：室友关系都挺好的。我们现在住在 20 舍，在四合院那边，离综合楼近但上课得跑这边来。之前住二舍，就是现在管院的楼，那时候离上课的地方挺近的。

老师：你在学习和生活中，遇到过什么困难吗？

同学：有，大二下学期的时候，我当军训教官，我妈也想让我锻炼一下，提升沟通能力，但那段时间还要兼顾英语学习，学校英语挂科挺严重，还会影响双学位证，当时压力特别大，感觉精力不够用，都觉得快挺不过来了。

老师：你还参加了学生会？

同学：对，我是学院学生会的，现在大四准备退了。学生会工作挺占用时间的，

而且国教的同学风格多样，不好管理。

老师：学生会主席是谁？

同学：是师团的王文晶，你应该也采访她了。

老师：国教的同学是不是个性比较强的挺多？

同学：对，比如我们班之前有个男生，留着长头发，穿着偏中性化，但他在设计方面的理念特别强，越是有个性的孩子，在设计上的想法越突出。

老师：你觉得学设计个性重要吗？

同学：挺重要的，大众化的思维可能设计不出特别出彩的东西，但也因人而异，有的大众化思维能设计出更接地气、更实用的作品。

老师：你和×××是同学吗？她给人的感觉很有个性。

同学：是同学，就是那个小卷发、穿红色衣服的女生，她学习挺好的，发型和穿着都很有特点，专业方面也挺厉害的。

老师：国教这几年发展得越来越好了，学生素质和师资力量都在提升，设备也越来越先进了，还有独立的咖啡厅和专属 WiFi，硬件上比其他学院还是有优势的。

同学：是啊，听说刚开始的时候不太好管理，第一批学生根本管不了，后来学院越来越成熟，有了管理经验，慢慢就好了。而且现在师资也比以前强，有各种风格的老师，还有香港、台湾的老师，甚至还有埃及的老师，外教也换了一批又一批。

老师：你知道国教刚建成的时候的情况吗？最早是南普顿大学的副校长××负责，他是巴勒斯坦裔英国籍，后来去伯明翰城市大学当校长了，之后找了×××来负责，他是爱尔兰人，汉语说得好，之前在大麦和软件园待过，×××老师倒是一开始就在。

同学：听说过，大家都说如果×××不在了，国教可能就黄了，他算是早期的核心人物。

老师：学服装专业其实也挺烧钱的，布料这些都不便宜，硬件设施和经济支持对你们来说影响大吗？

同学：挺大的，有好的设备和足够的支持，能更顺利地完成设计，不用因为设备限制或者成本问题耽误想法。

老师：来年你们要参加大学生时装周，国教和服院各有一个秀，相当于实力比拼，

全国の人都会評判，你觉得咱们国教和服院的优势分别是什么？

同学：服院的优势在基本功，手绘、缝纫这些都比我们扎实；我们国教的优势在思维开发和视野，设计更前沿、更有创意，作品集也做得有特色。

老师：国教现在的硬件比以前好多了，咖啡厅也是后建的，之前是个很小的地方，后来把印刷厂的楼要过来扩建，椅子、卫生间都翻新了，一年一个样。

同学：是啊，现在的环境比以前好太多了，图书馆的国外书籍也特别实用，能接触到很多新信息。

老师：今天咱们聊得挺全面的，我回去写论文如果发现还有要问的问题，再联系你。

同学：好的，没问题。

老师：那你先忙吧，谢谢你的坦诚分享，耽误你时间了。

同学：不客气老师，应该的。

メモ：

他人の推薦でトランスナショナル高等教育を知った。

入試点数はそんなに高くない。

基礎的な技術は服飾学院の方が高い。

服飾学院の方が学力重視と聞く。

サウサンプトン国際学院の授業が発想力が重視。

サウサンプトン国際学院の授業は応用型ではなく、芸術性が重視。

スケッチブックの作成に時間がかかる。

作品が世界基準である。

サウサンプトン国際学院にいと、世界に対する視野が広がる。

教員の流動性が激しい。

教員の流動性に対して、学生が戸惑っている

英語の勉強が多い。

英語の授業に対するストレスが大きい。

サウサンプトン国際学院に対して、満足度は6割程度。

将来留学してみたい、でもとりあえず国内の大学院に行きたい。

ファッションデザインを学ぶにはお金がかかる。
人間関係は悪くない。

实例②

日付：2019 年 9 月 15 日

場所：大連工業大学カフェテリア

学生所属：服飾学院 3 年生

所要時間：20 分

対応する研究：第三章

書き起こし文：

老师：你是从小就学艺术、学画画吗？

同学：对，我 4 岁开始学国画，学到 9 岁，刚开始是我妈强制性要求的，后来慢慢喜欢上，9 岁之后就自己随便画画，高一下学期开始正式学国内的美术高考。

老师：你是从高一就决定要艺考了吗？

同学：不是，我从小就决定要学服装设计了。

老师：你是什么时候有想学服装设计的意识的？小学还是初中？

同学：那时候意识不是特别明显，但小学的时候就喜欢自己画一些裙子之类的。

老师：你老家是哪的？

同学：山西太原。

老师：家里支持你学这个专业吗？

同学：小时候他们都很支持我画画，到了高中选专业的时候，他们想让我选环境设计这种更好就业的，但我想学服装设计的愿望比较强烈，最后还是支持我了。

老师：你现在刚大三是吗？

同学：对，刚刚大三。

老师：当时选学校的时候为什么选择大连工业大学？

同学：我本来想去北服，联考完去北京集训了一个月，想适应那边的画风，但最后差 3 分没考上。我查了国内服装专业的学校排名，后面像东华这些需要校考的我都没考，所以就选了大连工业大学。

老师：你现在接触到一些专业课了，对学校的学习环境、老师的教学风格，觉得哪些方面好，哪些方面需要加强？

同学：教学风格分老师，有的老师思想比较开放，有的还是传统死板的教育方式，但大部分老师的实力都很好，毕竟是很多年老教师了。

老师：咱们学校有不少海外归来的老师，目前教你们的多吗？

同学：有，但目前教我们的不算多。

老师：你知道×××老师吗？

同学：我知道，我有他微信，他在日本。

老师：你来这之前知道咱们学校国教也有服装设计专业吗？

同学：知道。

老师：平常和国教的学生接触多吗？

同学：比较少，因为他们学费贵，一年5万，入学条件可能比我们稍微低一点，我们两个学院之间会互相有看法。

老师：你觉得服装学院和国际教育学院比，优势在哪？

同学：我们从大一的时候开始就比较重视技术教学，但是他们好像不是这样，他们更重视学生的创造力。但他们技术上远不如我们，所以他们到大四还不能自己独立完成一件衣服的制作。

老师：确实。这点之前也有人说过。每年大学生时装周，咱们服装学院和国教各有一个秀，你知道吗？

同学：知道。

老师：从你的感觉来看，硬件设施的不同对服装设计学习有影响吗？

同学：还是有一点影响的，但不是很大。但网络条件确实影响很大。我们自己宿舍的网络几乎连不上国外的网站，这对我们了解最新的服装行情有很大障碍。有的时候逗得让在国外的亲戚们帮着下载一些东西。真的很不方便。

老师：原来如此。这个问题有很多同学说过。还有一个问题，服装设计专业挺烧钱的，面料、工艺都要花钱，家里的经济支持会不会有影响？

同学：会有，经济支持够的话就能放得更开，不在乎面料浪费之类的问题。

老师：如果不考虑金钱因素，让你再选一次，你会选服装学院还是国教？

同学：还是会选服装学院。

老师：为什么呢？

同学：因为我觉得学校会更重视服装学院，这边的基础教育可能做得更扎实一些，

能学到更多东西。而且，我觉得我们学院更现实一些。刚才也说了，我们学院更重视技术，我觉得这是对的。我之前也梦想过当设计师，建立自己的品牌，但现在马上大四了，我更关注的是自己能否找到工作。从这一点来说，我们学院做的真的很好。

老师：如果全国范围选，你还是更想上北服是吗？

同学：对，如果能有更好的选择，我还是想直接出国。

老师：你未来打算出国深造是吗？有想去的国家吗？

同学：对，有机会会出国，想去法国、意大利这些欧洲国家。

老师：美国的服装设计也很强，你考虑过吗？

同学：美国也很强，但经费会更贵，而且最近也不太友好。

老师：亚洲的话，日本的服装设计也不错。

同学：对，日本很强，亚洲就是日本。

老师：你将来想设计男装还是女装？

同学：女装。

老师：你现在大三，有没有参加过比赛或者考取资格证？学校和老师在这方面的帮助多吗？

同学：有比赛，但比较少。学院会支持，有时候会派专门的指导老师，但参赛的人多的话，得自己主动去问，老师们都会告诉我们，尤其大连本地的比赛更支持。而且我们参加比赛的时候，服装表演专业和化妆专业的同学们也会来帮忙，所以感觉更有利一些。

老师：将来你想在国外发展还是回国工作？

同学：现在还不确定，毕竟没出去过，不知道外面的环境。我问过××老师，他说可以在外面待一两年锻炼一下，会有不同的视角。

老师：关于出国留学，服装学院的国际化项目多吗？向海外推荐的途径多吗？

同学：比较少，去年有个导师跟我说，主要就是和南安普顿的合作，其他学校的项目都比较少。

老师：家里人支持你出国发展吗？

同学：支持，我妈跟我说不用担心钱，只要我自己实力够，想出就出。

老师：你有兄弟姐妹吗？

同学：有个姐姐，比我大6岁。

老师：你姐姐已经工作了吧？

同学：对，她都已经生孩子了。

老师：实际学了服装专业之后，你是更喜欢这个专业了，还是觉得比想象中难很多？

同学：还是有困难的，和想象中不太一样，需要学的东西更多。我之前以为只是设计，但实际上还要亲手做出来，还有面料再造之类的各种问题。

老师：你们专业有没有同学是后来才选择服装专业的？

同学：有，我舍友就是，他们是辽宁本地人，考这个学校，我们专业是最好的，所以老师推荐他们选了这个专业。

老师：你和室友关系好吗？

同学：非常好。

老师：你班级同学关系怎么样？

同学：还可以。

老师：你一会儿还有课吧？

同学：对。

有些同学不是特别熟。

老师：今天聊得差不多了，谢谢你的分享，不耽误你上课了。

同学：不客气。

メモ：

小さい頃から絵が好き。

受験する前は芸術受験専門の学習塾に通ったことがある。

元々別の大学に行きたかった。

服飾学院は海外留学経験の先生が少ない。

ファッションデザインを学ぶには結構お金がかかる。

服飾学院の授業は技術重視。

服飾学院の教育は就職に有利。

ネット環境があまりよくない。

服飾学院にいと、世界最先端ファッションへの接触機会が少ない。

コンテストに参加する時、学院からのサポートが多い。

コンテストに参加する時、服飾学院の他の学科の学生も手伝ってくれる。

将来留学に行きたい。

服飾学院は海外大学との連携が少ない。

ルームメイトと仲が良い。

实例③

日付：2024 年 3 月 17 日

場所：大連工業大学カフェテリア

学生所属：SIC メディアデザイン学科 4 年生

所要時間：30 分

対応する研究：第四章

書き起こし文：

老师：你当初是怎么了解到南安普顿中外合作办学项目，最终选择来这里的？

同学：高考分数出来后，我翻了报考手册，一直很喜欢大连这座城市，而且我之前学美术的画室里，有不少学长学姐都考上了大连工业大学，所以就重点关注了这所学校。我知道学校的服装专业特别厉害，曾经是全国前三的水平，后来查到学校有南安普顿国际学院的中外合作办学项目，刚好有服装设计专业。我还特意了解了南安普顿大学的 QS 排名，是世界百强名校，学历学位证也都齐全，综合来看性价比很高，和家里商量后就确定报考了。

老师：你是通过艺考入学的吧？之前有没有接触过服装设计相关的学习？

同学：对，我是艺考考生，而且是零基础入门，从开始学美术到参加联考，只花了 8 个月时间。其实我之前一直在钢琴和美术之间纠结，喜欢钢琴但又担心长期学下来会失去兴趣，可如果不学美术，我这辈子可能都不会接触到这个领域，所以想趁年轻体验一下。学美术的时候，我画速写特别喜欢琢磨人物的衣服和服饰搭配，慢慢就对服装设计产生了浓厚兴趣，报考时就坚定地选了这个专业。

老师：来到南安普顿之后，实际的学习生活和你最初的想象有差距吗？具体体现在哪些方面？

同学：差距还挺大的。我来之前以为服装设计会更偏向插画相关的创作，实际接触后发现教学体系很不一样。而且我们大一大二的时候英语课特别多，我都觉得自己像是英语专业的。大三之后就正常了。我们学院的教学分两大块，一块是设计教学，由专门的设计老师负责；另一块是技术教学，有中方老师和英方老师共同授课。英方技术老师是保加利亚人，有自己的个人品牌，特别痴迷手工制作，

在我做毕业设计的时候，他给我提了很多创造性结构的建议，我会把这些想法带回去和设计老师沟通，再不断完善。还有一点没想到的是，我们的授课老师更换比较频繁，大一大二大三的设计老师都不一样，大四又换回了大一的老师，不同老师毕业的院校不同，比如伦艺、圣马丁、皇艺，他们的设计风格 and 评判标准差异很大，有时候按上一个老师的喜好完成的作业，换了老师之后会被要求返工，这让我们有时候会觉得困惑，但也被迫学会了适应不同的设计逻辑。

老师：很多人说英式教育更侧重创新性思维的培养，你在学习中有没有明显感受到这一点？

同学：感受特别深，这其实是不同教育理念带来的差异。我之前学美术的时候，特别喜欢画一开大小的长期素描，习惯了细致复刻的风格，刚来这里的时候，被老师直接指出“像打印机一样，缺乏创造性思维”。我们有位圣马丁毕业的设计老师，他带来的教学理念特别“激进”，圣马丁的毕业设计和走秀完全不考虑日常穿着，更看重服装的夸张程度，以及背后对社会热点、敏感话题的讨论，或是个人情感的极致抒发。他对我们的创意要求极高，直到大四看我毕设的时候还说，如果我的设计里只有一个新奇点，很难拿到高分，一直推着我在创意上做更多突破。我刚入学的时候，因为之前穿了10年校服，对时尚几乎没概念，看到老师展示的优秀设计师案例，都觉得那些衣服不可能穿在街上，完全无法理解，后来才慢慢适应这种注重创新和表达的设计逻辑。

老师：在培养创新性思维方面，老师们有没有用过一些让你印象特别深刻的教学方法？

同学：有两种方法让我收获很大。一种是打破固有版型的限制，老师看我一直用基础版型做设计，觉得太保守，就让我把做好的衣服剪开，颠倒过来重新拼接，不管暂时舒不舒服、好不好看，先打破思维定式，这种结构重组的方式让我跳出了传统设计的框架。另一种是跨领域灵感提取，大一时有个课题要求我们把服装设计和建筑结合起来，先从艺术家或设计师身上获取灵感，再选取一座知名建筑，比如大本钟、悉尼歌剧院，拍下建筑的剪影提取廓形结构，最后把这些结构运用到服装拼接设计中。当时第一次接触这种跨领域的设计方式，特别惊讶，也让我明白设计灵感可以来自生活中的方方面面，不局限于服装本身。

老师：课堂上的教学有什么特点吗？

同学：我们老师在课堂上主要采取头脑风暴式的教学方法。这种模式我在上大学之前从来没有体验过，我觉得特别有意思。我觉得通过这种模式，自己的创造力提高了很多。

老师：你们的课堂都在学校吗？

同学：不，我们经常到外面去寻找创作灵感。这也是老师们的意思。国外的老师觉得课堂的授课不能提高我们的创造力，必须到外面与大自然接触才能激发创造力。我觉得这个想法真的很对。有的时候真的是在外面散步时的不经意间会得到灵感。我觉得这种室外教学对我们的创作真的有很大帮助。

老师：听说南安设施特别先进，这对你们的教学和创作有很大帮助吗？

同学：确实，我们的设备很先进，有些设备还是英方提供的。但要说对我们帮助最大的还是网络。整个工业大学，只有我们学院允许使用 VPN 上国外的网站。我觉得从或许情报这方面，我们学院真的是全校第一。

老师：和学校其他专业相比，你觉得南安普顿中外合作办学的独特优势是什么？

同学：最突出的优势是自由度高、展示自我的机会多。我了解到其他学院的作业大多有固定模板，题材比较受限，老师要求按部就班完成；但我们学院的老师更鼓励个性表达，只要能清晰阐述自己的设计理念，不管风格多特别，都会支持我们深入发展，还会主动引导我们尝试不同的创作方向。关键是老师们总是夸我们，有的时候我都觉得很刻意，但这种夸赞也给了我很大自信，让我能更大胆地去想像，不怕错误。老师们的这种夸赞式教学，对我的创作真的给了很大影响。除此之外，时间安排上老师们也很灵活，老师只会明确最终的截止时间，不会硬性规定每周必须提交什么成果，我们可以根据自己的创作节奏调整，这种自由度让我们能更好地沉淀创意。另外，学院的氛围也很开放，疫情前有很多特色活动，比如电影俱乐部，每周五晚上会组织我们看《心灵捕手》《低俗小说》这类国外电影，我们还会用课上学的 CAD 软件，把电影元素编辑到衣服上，再找厂家定制成文化衫，特别有意义。学院门前还有前几届毕业生画的涂鸦画像，是送给之前的负责人的，这种自由表达的氛围在其他学院很少见。

老师：你在学习中感觉到中英两国的文化差异了吗？

同学：有感觉到。我觉得差距还是挺大。英国方面还是开放，我们显得比较保守。

老师：毕业后你有什么具体规划？周围同学的发展方向大概是怎样的？

同学：我毕业后打算先留半年间隔期，今年秋天申请英国的研究生。主要是在南安普顿待了几年，已经习惯了英式教育模式，对英国的学术环境也比较了解，而且学服装设计的话，英国的时尚资源和教育水平都很有优势，所以没考虑其他国家。我们寝室 6 个人的发展方向比较多元，有 1 位同学已经提前一年开始就业，在青年华侨相关的机构打工积累经验；剩下 4 人都计划留学，其中 2 位已经拿到了国外院校的 offer，交了押金，就等着入学了。身边还有不少同学和我一样，倾向于去英国深造，应该都是受学院英式教育的影响，想在更专业的环境里提升创意设计能力。

老师：同学关系怎么样？

同学：同学关系很好。

老师：不上课的时候，平时在校园里都干什么呀？

同学：我主要是忙学生会还有社团的工作。偶尔也和室友们一起吃个饭啥的。

老师：大学的时候谈恋爱了吗？

同学：没有没有。根本没有时间。

老师：今天聊得很深入，谢谢你分享了这么多学习中的细节和未来的规划。你是个有明确目标的同学，希望你能顺利申请到心仪的英国院校，留学期间多利用当地的美术馆、博物馆资源，多和不同国家的同学交流，好好提升自己的专业能力和视野。

同学：谢谢老师的认可和建议！我会把老师的话记在心里，珍惜留学的机会，不仅要学好专业知识，还要多开阔眼界，弥补自己在创意和视野上的不足。也感谢老师愿意耐心听我分享这么多，今天的交流让我对未来的留学之路更有信心了。

メモ：

サウサンプトン大学の OS 順位が TNHE プログラムを選ぶ動機である。

一、二年生の時は英語の授業が多い。

サウサンプトン国際学院の授業はデザインと技術二つのパートがある。

サウサンプトン国際学院の先生はよく変わる。

先生がよく変わるので、対応が難しい。

先生がよく変わるのは、新しい理念をたくさん学べることでもある。

サウサンプトン国際学院の設備が良い。

サウサンプトン国際学院では、デザインの自由度が高い。

サウサンプトン国際学院では VPN を使える。

サウサンプトン国際学院では、世界から情報を集めやすい。

サウサンプトン国際学院の授業ではブレインストーミングがよく使われる。

イギリスの文化の方が開放的だと感じる

ブレインストーミングが学生にとって新鮮である。

フィールドワークが多く、それによってデザインのヒントを得られる。

普段生徒会とサークルの仕事に没頭している。

将来イギリスへ留学したい。

实例④

日付：2024 年 5 月 20 日

場所：大連工業大学 C213 室(日本語科オフィス)

学生所属：SIC ファッションデザイン学科 4 年生

所要時間：29 分

対応する研究：第四章

書き起こし文：

老师：你老家是哪里的？当初是怎么了解到南安普顿中外合作办学项目并选择这个学校的？

同学：我老家是山东烟台的，特别巧的是，我舍友也是烟台的，我们之前还在同一个画室学习，只是报考时不太熟，后来进了学校 QQ 群才认出彼此。分数出来后，我在报考手册里查找目标院校，一直很喜欢大连这座城市，又知道大连工业大学的服装专业曾经很厉害，就重点关注了。看到学校有南安普顿中外合作办学的项目，而且南安普顿大学 QS 排名不错，学历学位证齐全，性价比很高，和家里商量后就确定报考了。

老师：你是艺术生出身吗？之前有过相关的学习基础吗？

同学：对，我高二开始学习画画，是艺术生。其实一开始在钢琴和美术之间犹豫过，担心一直学钢琴会失去兴趣，但如果不学美术，这辈子可能都不会接触到这个领域，就想趁年轻体验一下。学美术的时候，我对设计相关的内容很感兴趣，慢慢就坚定了走艺术设计方向的想法，所以报考时就选了视传专业。

老师：来到学校后，实际的学习生活和你最初的想象有差距吗？具体体现在哪些方面？

同学：差距还是有的，我一开始以为中外合作办学节奏会更紧张，像美剧里那样，结果发现其实更闲一点，而且因为还是在国内校园，整体氛围挺中国化的。学习上，我们从大一开始就是项目制教学，老师会引导我们从调研阶段一步步推进，最后进入设计环节，整个流程很完整。但和国内传统艺术院校相比，这里的自由度更高，老师不会限制设计材料和具体表现形式，只会提供灵感和方向，不会强

迫我们必须按某种方式做。但在南安，作品集是非常重要的。作品集的制作，对我们的锻炼很大，因为老师要求自己的作品集必须要有故事性。这个作品集的制作过程对人的创造力有很积极的影响。

老师：英方的教育模式在创新性思维引导方面，给你带来了哪些帮助？

同学：帮助挺大的。比如我们的教学不会局限于课本，老师更注重引导我们自主探索。这学期我的毕业设计是桌游设计，之前完全没有接触过游戏设计领域，一开始定的是偏美式的角色扮演风格，侧重情感表达，但后来发现太耗时，不符合一学期的完成周期。在老师的建议下，我把美式和德式桌游的特点结合起来，老师还会帮我梳理想法，每次沟通后，我都能清楚接下来的方向，这种引导对我来说特别有帮助。老师会介绍国内外流行的设计材料和工艺，像 PS、AI、ID 的操作，还有新的印刷方式，我平时自己很少主动去了解这些，老师的讲解让我打开了思路，会想着基于这些工艺去做针对性设计。而且我们在课堂上经常做头脑风暴，这个对我们创造力的增加真的有很大帮助。这种授课模式之前完全没有经历过，真的很有意思。如果不是这种中外合作办学，估计也接触不了这种课。

老师：课堂上老师与学生的互动多吗？

同学：有的时候挺多的。但基本上都是让我们自己去思考。

老师：课程方面你觉得安排的合理吗？

同学：我觉得还行。我们的课和国内的服装设计专业不太一样。我自己也了解过一些，我觉得我们的课对创造性思维的要求挺高的。激发创造力的课非常多，我看服装学院几乎没有这种课。

老师：除了毕业设计，日常上课中有没有哪位老师的教学方法或风格给你留下了深刻印象？

同学：有两位老师让我印象很深。一位是外方的老师，他经历很丰富，留学过，在国内外多个城市工作过，不仅教我们设计工艺，还会给我们提供人生指导。我们大四面临毕业选择，他会结合自己的经历，跟我们聊考编、考公、当老师等不同方向的利弊，因为他基本都尝试过，所以建议特别实用。另一位是我的毕设指导老师，他不会直接告诉我们该怎么做，而是在主题引导和灵感创作上给很多建议。比如我对主题有新想法，或者不知道怎么推进时，他会分享自己的经验帮我分析，但最终的决策还是让我自己做，这种方式让我能保持自主思考。

老师：大家对英式教育或者说英国文化，能理解吗？

同学：我觉得能理解。有些地方可能需要时间，但最终都能理解。

老师：你觉得学校的课程设置有没有偏向于引导大家留学的倾向？

同学：我觉得有。大一大二我们有专门的英语课，每天都上，涵盖听说读写，考试也会重点考察这四个方面，学院尤其偏重读写能力的培养。现在我日常交流的口语基本没问题，除非遇到特别专业的表达，哪怕不刻意背单词，也敢于主动和外国人沟通，这对留学来说很重要。而且我们的设计老师大多是外国人，平时交流、论文撰写都要用英语，论文的逻辑框架要求也和国外标准一致，比如对抄袭的界定很严格，老师会反复强调这在国外是很严重的问题。身边有大三大四就出国的同学，他们反馈说，在这边打下的基础让他们在国外交流和学习时能快速融入。

老师：疫情对你的学习和中外合作办学的教学有没有产生影响？影响大吗？

同学：有一定影响，但不算特别大。大一大二的时候，因为疫情，很多外国老师没法来国内，只能线上交流，直到大三大四才线下见面。线上交流的话，网络通顺时沟通没什么问题，但如果网络失真，再加上部分老师口音较重，比如有位伦敦腔的老师，说话又快又低沉，一开始很难听懂，有些英语不好的同学可能会有点跟不上，大一大二那段时间多少有点“糊涂着过来”的感觉。不过线下交流虽然更有实感、更方便，但线上教学的核心内容并没有缺失，整体来说对学习的影响是有限的。

老师：在整个大学期间，有没有什么让你印象特别深刻的人或事？

同学：有几件事挺难忘的。大一的时候，×××老师既是我们的英语老师也是设计指导老师，线上看他特别有英伦范，口音是伦敦腔，我们都觉得他像《哈利波特》里德拉科·马尔福的爸爸，想象中他是苍白瘦削的瘦高个，结果大三他来国内线下授课，我们才发现他是“韩国双开门”式的健壮身材，反差特别大，当时特别震惊。还有一位女老师，我曾经做过一个“人生的多种选择”的主题设计，基于中国教育现状，分享了山东学生5点起、12点睡的高强度学习模式，她特别惊讶，还很欣赏这个主题——我想通过设计告诉高中生，高考不是人生的唯一目标，上大学后可以获得更多松弛感，不用被“25岁前必须完成某些目标”的焦虑裹挟。另外，×××老师也让我很受启发，做桌游设计时，我花了很多功夫

在规则制定上，总想着尽善尽美，他却提醒我，设计更看重视觉呈现，不用在细节上过度纠结，这让我避免了因钻牛角尖而耽误进度。

老师：在和国外老师相处的过程中，有没有遇到过让你觉得惊讶、和中国老师风格差异很大的事情？

同学：有两位老师的做法让我印象很深。×××老师，听到我分享山东学生的高强度学习模式时，表现得特别惊讶，她没想到中国学生的学习压力这么大，还很认同我设计里传递的“松弛感”理念，这种对不同教育模式的包容和认可，和国内老师的关注点不太一样。还有×××老师，他在教学中更注重核心需求，比如做杂志设计时，我总纠结排版的细节，想让每个部分都完美，他却告诉我，先把整体排版做好，再去打磨细节，不用一开始就陷入局部，这种抓重点的教学思路，和国内老师更强调“面面俱到”的风格有明显区别。和这些老师们接触多了，我感觉自己也很受启发，对自己的创作也有很多积极的影响。这也是我们中外合作办学项目的一个优势吧。

老师：你在学习中感觉到中英两国的文化差异了吗？

同学：感觉到了。确实差异很大。不过，在这种两国文化交叉的环境下学习，对自己的创作有很大帮助。感觉自己的想象力变得更丰富了。而且我觉得在南安学习，自己对祖国的文化更加感兴趣了。比如说现代的服装设计是起源于欧美，但我们国家也有自己的服装设计，我一边学习西方的服装设计，同时也开始对中国的服装设计产生了兴趣。

老师：同学关系怎么样？

同学：这个我觉得没啥问题。

老师：不上课的时候，平时在校园里都干什么呀？

同学：和同学唠嗑吃饭是最多的。大多数时间可能都在宿舍里躺着。

老师：大学的时候谈恋爱了吗？

同学：没有。

老师：毕业后你有什么规划？为什么会做这样的选择？

同学：我想在北方发展，目前正在准备军队文职的考试，12月份就要考了。我爸妈挺支持这个选择，我爸还专门给我报了培训班，他们觉得体制内工作稳定，适合我这种比较宅的性格。其实我本身不太喜欢设计，不像我舍友那样天天抱着

平板画画，我只有赶作业的时候才会打开设计软件，所以对设计相关的工作没有太多向往。军队文职报考的是管理学方向，不是设计学，我对体制内工作也不排斥，觉得能为国家做贡献也挺好的，而且如果之后有更好的机会，也可以再做调整。

老师：今天聊得很全面，谢谢你分享了这么多学习和生活中的细节。军队文职是个不错的选择，稳定且有意义，希望你能顺利通过考试，在自己选择的道路上稳步前进。

同学：谢谢老师的祝福和倾听！今天的交流让我梳理了自己的大学经历和未来规划，也更有信心面对接下来的考试。我会好好准备，不辜负自己和父母的期待，也感谢老师一直以来的耐心引导。

メモ：

大連という町が好きで大連工業大学に来た。

創造していた環境とは少し違った。

もっと西洋的だと思っていたが、授業以外では基本中国の大学とそんなに変わらない。

英語の授業が多い。

キャンパス内の交流も英語が多い。

サウサンプトン国際学院は雰囲気がとても自由である。

今学期から授業でゲームデザインというものをやって、面白かった。

ブレインストーミングは授業でよくやる。

ブレインストーミングはすごく新鮮に感じる。

サウサンプトン国際学院では、創造性を刺激する授業が多い。

サウサンプトン国際学院の教育では、スケッチブックの作成を重視。

スケッチブックはストーリー性が重要。

スケッチブックの作成過程は、自分の創造力に良い刺激を与えた。

サウサンプトン国際学院の授業では、学生に留学を意識させる。

イギリス式教育を受けることで、より中国文化を意識するようになった。

中国の伝統的ファッションデザインにも興味を持つようになった。

外国人先生は個性的な人が多いように感じる
人間関係は特に問題ない。
卒業後中国の軍隊で公務員になりたい。